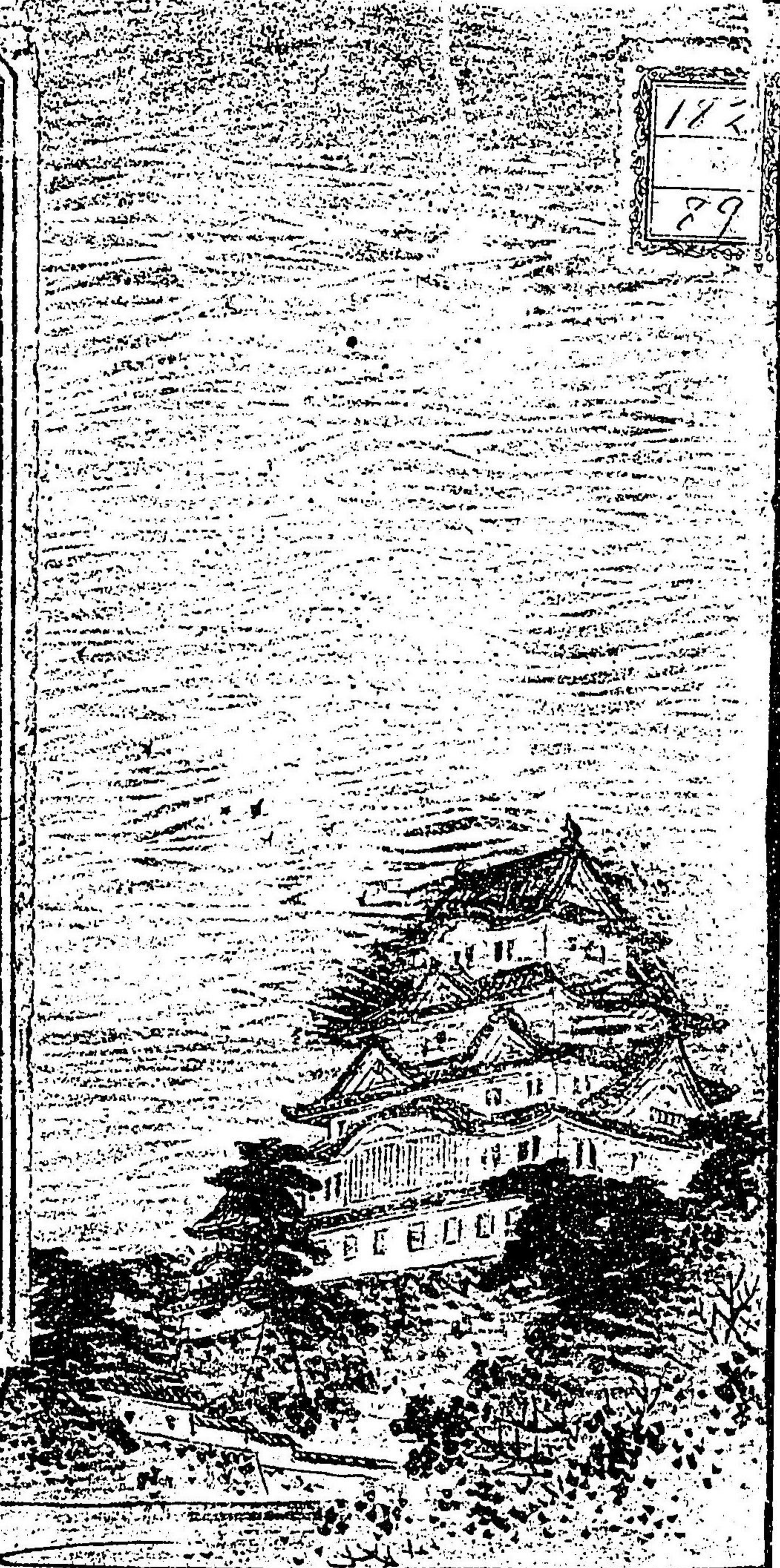


182  
89

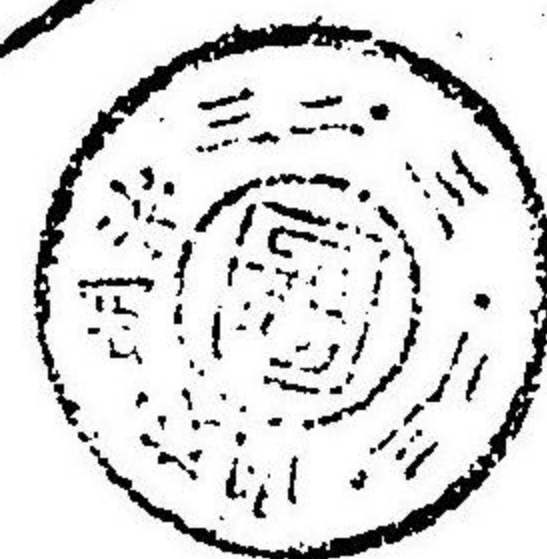
大正  
讀  
姫路名勝  
完



新編

聖賢

友志



本館現任

勝珠堂



久由ぬいせき姫海の家あまの人  
おはしま志ありあきの知る人より  
格あかよ計孝年らるまよ志  
うく心よせ深き人あり計を書とま  
多ああつて心給言いとま持親事  
里近きあうか持あ命古志と  
界ねる昔のつとま命のうけ持  
と命知らるる人あら計孝今志人  
あも懐の世もほらつとま  
ねむらら書きあつていとちやけ  
せられありの多志夫のいとちよた  
みーかきものせられ多れとよとわ  
見ち知あまの里志世に持志を  
いち志らうしかまをうけいと  
乱計らわし道持枝と孝あ  
世に持志をあらはれ人

ふんもまをばし  
 明治廿二年三月廿九日  
 姫路市里人 香山 義彦  
 博士の学究 志を  
 承る

貴論拜誦。わが播磨の國は好地志なり。播磨鑑、播磨志草、播磨  
 名所巡覽圖會、などを下めども、播磨名蹟志、播磨名所記、以下  
 零細なるものまでも數ふるときは、殆んど二十餘種の多きに及び  
 はん。されども、是れ、多くは、簡單なる道中案内記、若くは好事  
 家の覺え書、たゞしは歌枕名寄ともいふべきものにして、まことに  
 地志の名を附與し得べきは少し。早くより公行せる本邦地志のうち、  
 武相兩國の新編風土記稿の如きは、舊幕の官撰よかゝるものなれば、  
 比較的に完美なることいふまでもなし。その他、雍州府志、山城名勝  
 志の山城に於ける、五鈴遺響の伊勢に於ける、張州雜志の尾張に於  
 ける、駿河志料、甲斐國志、近江輿地誌畧、越登賀三州志、紀伊續  
 風土記などの、各々の國に於ける、編纂の手際は、多少の巧拙を  
 認め、孰れも生等の大に便とするところのもののみ。山陽道に於  
 ける、備前の吉備溫故、備後の福山志料、安藝の鹽濱通志、周防長門の長

ふまもまをばし  
明治廿二年三月はらのたね  
姫路市里人喜山斎齋  
城下の学芸家志多

貴翰拜誦。わが播磨の國は好地志なり。播磨鑑、播磨志草、播磨名所巡覽圖會、などをばしめとし、播磨名蹟志、播磨名所記、以下零細なるものまでも數ふるときは、殆んど二十餘種の多きに及びはん。されども、是れ、多くは、簡單なる道中案内記、若くは好事家の覚え書、たゞしは歌枕名寄ともいふべきものにして、まさしく地志の名を附與し得べきは少し。早くより公行せる本邦地志のうち、武相兩國の新編風土記稿の如きは、舊幕の官撰しかゝるものなれば、比較的に完美なることいふまでもなし。その他、雍州府志、山城名勝志の山城に於ける、五鈴遺響の伊勢に於ける、張州雜志の尾張に於ける、駿河志料、甲斐國志、近江輿地誌畧、越登賀三州志、紀伊續風土記などの、各その國に於ける、編纂の手際は、多少の巧拙こそあれ、孰れも生等の大に便とするところのものなり。山陽道よても備前の吉備溫故、備後の福山志料、安藝の藝藩通志、周防長門の長

防風土記の類は、皆大に觀るべきものにて。我が播磨の國も、  
 せめて、上より列べたる諸書より似たりたるものだより有れかしと、年來  
 希ひ居りゆひしに、貴下之御企てを承りて、屬望せるところ尠か  
 らざゆ。今先づ姫路名勝志だけ御出板のよし。未だ拜見せざること  
 も多、其の書に就きては、何とも申兼ゆへ共、渴するものは飲をな  
 し易きの譬へにて、兎に角、喜びの意を申述べゆ。尙追々、播  
 磨全体のもの、御公行の運びに相なりゆ様祈り申ゆ。まづは御返す  
 のみ敬具。

卅二年一月念七

東京より

三上 参次

姫路市

矢内 正夫 殿

沿革 考證 姫路名勝誌叙

矢内君、余に手紙して、何か一言と、こたび君が著せる姫路名勝誌  
 の端に、書きつけてよといふ、名所古蹟の事はしも、この書の中に  
 詳しくあめれば、余べつに書きつくべきこともなし、よじや、書き  
 つくれはとて、君が書をは、世に重くするに足らぬ余ぞ、かくいひ  
 て断りてむ、と幾たびか思ひけるが、なほ、えしも断らで、かゝる  
 くりごとと、ふみのはじめに托するは、かつは君が志に感ず、かつ  
 は世のこの書よまむ人に、余がつね思へる一ふとを訴へむとなり  
 今は十年のむかしなりける、余はじめて是の國にまゐるとき、余  
 と流車を下りうせる人の、加古川驛のあなたにて、み空を指して、  
 見たまへ、姫路の城ぞや、かの高う白う替ゆるは、太閤さまの繩は

りの城よ、と教へられしが、この城、いまは姫路師團の營所の圍の内にあり、姫路が丘の上に立てればとて、またの名をば、白鷺城といふゆる、そは、奈良の朝に、天下の地名は二字にきめて、好き字をあてよ、と詔おはせられたるとき、かの丘をも姫路の丘としたるど、世の漢學者ども、それはた雅ならずとて、姫路の城とはいはて、路城など書きけるが、それをゆゑも漢めかきとや思ひけむ、やがて鷺城とも白鷺城ともいひいだしとど、此に鷺城あればとて、つひには岡山の城をば鳥城など名づけにけり、余かつて是の城の天主臺に上りて、豊太閤がむかしととのびしが、いま君が是の書のなかなる名所古蹟は、あらまし、是の城の上よりは、一目のうちに見るむどかし、あゝ君も余もこの明治のゆたけき大御代にあへはこそ、名所

の古蹟のと、心のどけきことをも、筆に口にする暇あるなれ、とおもふにつけても、また、うれしきこと、うれたきことなむあるさて、何ぞとかうれしきぞといへば、近きころ、姫路の城の手いれと始として、すべて、國史の保存、おひくゝに其の道のたちぬること、あにうれしからざらむや、そもそも、國家の獨立は國民が愛國の心になり、愛國の心は、その國史を知りて、その祖先を追慕するより生ぜることなるが、さて、その國史はといへば、記録に存し、口碑に傳はり、名所古蹟に残れると、維新のはじめには、新を知るに急にして、古を温ぬる暇なかりけると、今は國家の統一と、國史の力にて固うかためむの心にや、ちかごろは、公よとては文書の探訪に年とし人を諸國に出し、名たよる社寺を國費にて修葺し、さて

は、官私の國寶を登録して、その亡失を防ぎぬるなど、また、私にしては、日々に消息をく古老の口碑を録し、月々に變りゆく名所古蹟を世に宏うする篤志者として我が矢内君のときありて、公に私に、史事史跡の保存に心をを用ゐるもの多くなりぬれば、國史を知らむとおもふもの、その志のふかきは、記録なり古文書なりを調べあさりて學びつべく、志ありて暇なき人々は、業務の餘閑よ古跡をたづね名所をめづる旁、むかしの豪華の餘風を傳へつべく、今の世の事とけさは、昔のことく、雨ふるあした、雪ふるもうべに、爐のそはに、父老のむかしはなむと聞くよむなく、また、十里を一日の道のりと旅せし昔とは事かはり、百里をも一日に馳する瀟車にて旅する世となりぬれば、名所古蹟のあらかため道とるべなくては、あ

りて惜しいこととしてけりと悔むも詮方なかるべし、君が是の書と著はせらるる是る故とれもひてのことならし、余この國よ来て、大野なる水丘にまゐるづること、こゝにして生れたまへる小碓皇子が、東の蝦夷、西の熊襲を攻めきためたまひし英烈と思はせはあらず、また加古川なる刀田山鶴林寺にまうては、千三百年の昔にも、聖徳太子のときありて、灌漑の利と、今に五十餘村を潤せると感ぜぬことなし、されば君がこの著とうれしむひとも多からむかしさらば、なにぞとかうれたまをといへば、姫路にては漢めかず、縣城としてむなむ、何につけても漢めかする餘りには、國語の獨立しえぬ今のありさま、是あようれたま限りにあらざらむや、それ國語の獨立は、思想の獨立なり、思想の獨立なうては、いかで、國家の獨



六  
まごまたくじらるべき、さるに、中世封建の時に、割據の固め  
りと、往來の道とことさらに不便にせる、職業を世襲にせる、教育  
のうへしたに行きわたらぬなどのことより、我が國語は、はなすと  
きの口語と、筆とりてものに書きつくる文辭と、口語文辭の二やう  
に分れしにぞ、それさへあるにむかしは學問といへば、漢文を讀  
み、漢字を知ることのみ思へりしより、漢文の訓讀は國語の文辭  
をいたく壞り、文辭は年々に口語と速かり來て、今は口語と文辭と  
は全く相關らぬが如くなりぬ、されど幸にも、教育の途とよのはぬ  
世なりければ、文辭の敗れくづれしも、その範疇はいと狭かりしに、  
明治の大御世となりては、外國語の譯讀といふもの加はりて、いた  
く國語の口語とくづし、漢文の訓讀はまじりまじりに文辭をやぶりて、

七  
その流毒の廣まるることのときこと、餘弊の被れる區域の宏きこと、  
また昔の比にもあらざ、特に廿七八年の役より後は、教育の俄に勃  
興せしにつれて、我が國語はいやまに漢化しゆきぬるぞうれたし  
ともうれたしや、かゝらむさまにて年々に國語の漢化しゆきなは、  
たとひ、國史の保存に公私その力を盡せばとして、何の効かあらざと、  
西土の地名に人名に、漢字をあつること今にやまぬは、姫路を驚城  
とせる昔の漢學者のみも笑はれまじ、文藝の上ならば漢文訓讀體も  
一體として許されむも、博物とし教ふるものまで、鳥の名、獸の  
名、または草木の名まで、漢名をあつるなど、今しも漢字を知り、  
漢字を書き、なるだけは、口語ととひ離れたる文をかくと、學問と  
し思ふ人々あればぞかし、あゝ我が國語の獨立をば如何にかせむと

する、今の世の中は漢字を二ツ續けて何ことも何もかも、熟字にていひぬき書きもする世なりけり、夫の小學の生徒のもやうを聞け、けふと云へばわること今日といはせ、いへといふはよからせとて家屋とかいせ、かなしといはては涙萬石とかいすなり、かゝらむ勢よては、即て、ひだりむけまへにすすむなといふ、兵士の號令も、今の世のはやりにいはまじかは、左方に轉向して而して前方に行進すべし矣と號令せよなどいひいづる日も遠からまどそれ漢字と一字覺えむには、楷行草に書き分け、音訓によみとらねばならず、かくして百字と長の年月に覚えたりとて、この百字とさまさまに限りなく、今のごと人々の勝手に熟語につくらまじかは、九千九百の熟語とさるわりぞかし、かゝる役にたぬ厄みなる漢字を教へむとて、

小學の六年を半はあだに費して、兒童を苦しむることよ、思はぬことの極みなり、あゝ誰じの人ぞ、世のかゝる迷とさまさむとするものは、

余かつて播磨風土記を讀みて、この國の史誌を書かむの志を興じしが、いまにえ果さざり、矢内君いつか余に告げけらくは生涯を期して播磨寶鑑といふを書かむのとて、ろを興して、はやく既に着手したりといふ、この姫路名勝誌の如きはその餘りの屑とさく、あゝ國史の保存に篤志なる、世既し君が如きあれば、祖先を追慕し、愛國の情を厚うする、其道なきをうれはず、ひとり、彼の漢字と漢文訓讀の弊をば如何かはせむ、これにつけてまた一ツ思ひ出づることある

むかし置太閤が明を征するとき、ある人、公に、漢文をよくする人を伴ひたまへと勧めければ、太閤わらひて、余は明の民よ我が國語をもちゐさせむところ思へ、といはれ志をなむ、あゝ太閤みまかられてより、今は三百年をぞこしらひけるよ

明治三十二年一月廿五日

姫路の城のもとなる

まへは、なかをこらす

沿革 姫路名勝誌

凡 例

- 一、凡そ國といひ郷といふは歴史を持てる謂にて、この歴史あればこそ愛國の心も起り愛郷の念も萌すなれば、歴史存録の必要なることは今更いふまでもなきぞかし、たい維新の改革よりして三千年來の史事名蹟の口碑に存するもの遺文に傳はるもの日に月に湮滅せむとする豈悲しからずや、本書は我姫路地方の過去現在の史事名蹟を採録して其傳を永うせむとするものなり。
- 二、本書は姫路名勝誌と題すれども、其記事は姫路市のみならずして、隣地なる飾磨郡は論なく、印南郡加古郡揖保郡などに係る名蹟沿革も併せて記述せるにより、一名播磨名勝誌と稱するも不可なきなり。
- 三、本書は嘗に名勝舊蹟の現在を記述せるのみならずして、過去の歴史沿革には深く意を用ひて考證の勞に任りぬ、故に各地に對する過去三千年來の歴史を知らむと欲する

ものは是を措て他に求むる所なかるべし、

四、本書に式内社といへるは延喜式の神祇部に載れる神社のことなり、この延喜式は醍醐天皇の時に菅原道真藤原時平などに勅して撰まれしものにて、朝庭諸國の恒式を詳記しあり、延喜六年十二月に成れり、其神祇部には神祇官の祈年祭に預り給ふなる全國三千一百三十二座の神々を載せありて播磨のは五十座あり、

五、阿菊皿屋敷の談話、平野村長者屋敷の事蹟に就きては奇怪なる口碑傳説多かり、是等は務めて博く其説を求めて之を古書に徴し舊記に照し以て正確なる記録を作る端緒を啓けり、この兩件の説明が自餘の記事に比して稍長きにわたれるは、敢て好奇心に驅られたるにはあらずして、切に世の臆説を排除せむと欲してなり、

六、本書を編纂するに就きては播磨古風土記、播磨鑑、英賀日記、射楯兵主神社考、六臣談筆、古事類苑などを主なる参考書とせり、

凡例終

沿革 考證 姫路名勝誌

目次

第一章 總論

播磨風土記に出てたる姫路丘命名の由來……………一頁

伊和の里と國衙の庄……………姫路の廣袤……………三頁

姫路の四區分……………國道筋……………飾磨津道又道筋……………四頁

生野街道……………西國橋筋……………練兵場……………五頁

西魚町筋……………鹿谷街道……………因幡街道……………六頁

士族邸……………中門筋……………國府寺小路……………七頁

大溝小路……………中魚町筋……………戸口と職業……………八頁

第二章 城廓

築城の創始……………鶴見丸と龜居丸……………一頁

羽柴秀吉と黒田孝高……………太閤丸……………二頁

池田輝政の増築……………十一内門と五大外門……………三頁

三左衛門廻……………本多忠政の入府……………	四頁
船場川の改修……………本多松平兩家の交代……………	四頁
酒井忠恭の入府……………船場大洪水……………	五頁
河合寸翁の財政整理……………	五頁
維新の革命と開城……………	六頁
姫路城の高さと四門の名稱……………	七頁
閑話一則……………	七頁

第三章 神社

二十四社のこと……………	八頁
惣社と例祭……………名越祭と影向祭……………	九頁
修羅踊と血池……………宮本武藏の奉願……………	二頁
長壁神社……………案内社……………	三頁
十二所神社……………阿菊の祠……………	四頁
登着堂……………今川貞世記行のこと……………	五頁
神明社……………山王社……………姫路神社……………	六頁

第四章 佛閣

白川神社……………粟島神社……………	一六頁
高岳神社と蛤岩……………荒川神社……………	一七頁
青山神社……………三和神社……………水尾神社……………	一八頁
男山神社……………白國神社……………佐伯社……………	一九頁
廣峰神社と其祭式……………牛頭天王の事……………	二九頁
松原神社……………厄神詣……………灘祭……………	三二頁
船場本徳寺と其齋居松……………	三三頁
景福寺と船丘……………正明寺……………	三六頁
慶雲寺……………子安地藏と宿分院……………	三七頁
書寫山圓教寺……………性空上人のこと……………	三七頁
華山法皇のこと……………	三八頁
上東門院和泉式部の登山……………	三九頁
羽柴秀吉の陣……………寺領のこと……………	三九頁
女人禁制……………四万六千日と修正會……………	四〇頁

御車屋敷……頃岩……白山……	四〇頁
如意瀧……關伽水……見鏡水……	四一頁
一本杉のこと……女人堂と退凡碑石……	四一頁
増位山隨願寺……増位町のこと……	四一頁
牛堂山國分寺……	四三頁
永享の大地震並に御着村勅旨村のこと……	四三頁
佛日山法輪寺並に岡田村町坪村のこと……	四五頁

第五章 巡覽

第一日の巡覽

長壁神社と惣社……鬼石と道祖社……	四七頁
血池より生松原……鶴ヶ淵笛吹岡……	四九頁
老延清水……梅鉢の松……	五〇頁
往古の廣野の里と五郎右衛門屋敷……	五一頁
春山翁と其國書館……	五二頁

男山八景と魁春園……	五二頁
鷺の清水と其雅談一則……梅雨松……	五四頁
景福寺より薬師山の紀念碑……	五六頁
船場御坊のこと……	五七頁
十二所神社と阿菊皿屋敷の話……	五九頁
姫路俱樂部より手柄山眺望……	六七頁
演劇場のこと……	六八頁
第二日の巡覽	
白國村と増位の温泉……	六九頁
風蘿堂と芭蕉翁……惟然と千山……	七〇頁
千明の句碑……隨願寺と淨光院の碑……	七六頁
増位山嶺と索麵瀧……	七七頁
廣峰神社と登山の阪路……	七八頁
平野村と御輿塚……長者屋敷と其考證……	七八頁
御所清水と薛苔清水……	八五頁

八代八景と龜居寺の跡……………八五頁

第三日の巡覽

水尾山と其附近……………安室村と六本松……………八六頁

書寫山と其寶物のこと……………八八頁

廻御所と王院馬場……………八八頁

草上宿と今宿のこと……………八九頁

昌樂寺と君居寺……………大井川と手野川……………九〇頁

青山村の名蹟と其八景……………九〇頁

第四日の巡覽

御饗橋と神谷村のこと……………九二頁

市之郷村と其歴史……………國分寺と菩提碑……………九二頁

麻生山と仁壽山……………九三頁

八家の地藏と小赤壁……………九三頁

福泊の稱呼を説きて播磨の國名に及ぶ……………九四頁

粟生松原と妻鹿の功山……………九五頁

子安貝……………蘆屋塚……………九五頁

飾磨津のこと……………搦染……………堪保……………九七頁

津田の細江と……………其穂麥寸翁の養給……………九八頁

飾磨八景……………家島と室津七曲の景……………九九頁

播磨鐵道と龜山本徳寺……………一〇二頁

第五日の巡覽

阿彌陀驛の時光寺……………智根天満神社……………一〇二頁

石寶殿と觀瀾處……………高砂神社と十輪寺……………一〇三頁

尾上神社と其鐘……………別府港と手枕松……………一〇四頁

俳人瓢水のこと……………一〇五頁

刀田山の太子堂……………一〇五頁

氷岡神社と野口の念佛堂……………一〇五頁

巡覽後の概評

姫路の七不思議……………一〇六頁

福中町通と山鐵停車場との桑滄の變……………一〇六頁

姫路八景の私選……………姫路附近の絶景……………一〇七頁

姫路の地氣と中學校の聲價……………一〇七頁

第六章 名産

姫路木綿……………高砂染……………野里鑄物……………一〇九頁

姫路革具……………明珍火箸……………玉椿……………一〇九頁

龍虎丹……………森重の鰻……………梅枝の鮓……………一一〇頁

姫路附近古今の名産……………一一一頁

目次終

沿革 姫路名勝誌

山水樓主人 矢内正夫 編述

第一章 總論

今よりは大凡三千年前のことなり、我天祖天照大神の弟にわたり給ふ素戔嗚尊の御子に大日貴尊といふが坐しけり、この尊は只管に力を殖産の業に盡せ給ひて中國邊は大抵そが關かせ給ひしなるが、其頃は我姫路地方も置鹽川、市川などの河流と南海の水と相合して一面の河海をなし、姫路丘、琴丘、船丘、箕丘の如きは點々相並びて群島の如かりしとぞ、この置鹽川は今も手野川に落ちれど、近き明暦の頃今より九二〇までは書寫山の東より御立村を過ぎ今宿村の大井川に續きて飾磨津に入りしといへば、古の神代の頃には姫路地方にまで氾濫せしこと其理あり、尊は斯る國土を關する熱心に蒼生の利益を計り給ひしかば、人々大國主神と尊み稱へしといふ、



この大日貴尊（大日貴尊と書するが本鎮に勝へるにて大は久しく安栗郡の伊和村に住  
 國主と稱へること共に入オよりの敬稱なり）

み給ひしが御子に火明命といふがありて性凶暴に坐し何にかにつけて妨害  
 多かりければ尊も今は意を決めて或時の船路に御子をば兄なる因達大神十  
 五（因達大神は神功皇后御征韓のとき御船前なし給ひし因達大  
 神に在し、故の名にしてその山は今の世宮  
 山つ其邊りなるべといふに淡水を汲み來れと給さ遣はして其まゝに還て置さ船  
 出し給ひしに、御子は還り來て船のなかりければ父神の意を付り知りて激  
 く憤り、流を亂り波を起して其船に追いつき、終に怒に任せて船をば顛覆  
 し給へり、その時船に積りし種々の品は漂ひて彼の島々に着さけり、廻ち  
 龜兒めちと呼びし由なりの着さし島を姫路丘（今の城  
 山なり）といひ、琴の着さしを琴丘（今  
 總師山といひ、船の着さしを船丘（今の景福  
 寺山なり）といひ、箕の着さしを箕丘（今の秩父  
 といふなど、其時に起りし名凡そ十四丘以上四丘の外に波丘、箱丘、匣丘、袋丘、箱丘、  
 沈石丘、藤丘、鹿丘、大丘、曾丘の十五あり）  
 あり、又船を覆へせし川の名を怒潮川といひ、其下流を吉濟川と名づけら  
 れし由にて、今の置搦川と雲見川のことなり、この事蹟はいかにも奇し

伊和の里又國街の庄

さやうなれど、今より一千二百年前に勅命を奉じて選みし播磨風土記に出  
 でありて最古の傳説なり、

我邦三城の一に數へらるゝ名高き姫路城は三千年來名あるこの姫路丘に築  
 かれあるにて、神代には此邊一帶を伊和里と呼べりしが如し、其後今より  
 一千二百五十年前孝徳天皇の頃より播磨を管轄する國府をこの地に置かれ  
 て、國衙庄又國府などの稱ありき、されど其頃は市川の本流が神谷村を通  
 せし由なれば、住民地は其川に沿ひてし今の國府寺村を中心として官衙は  
 多分今の晝着堂邊にありしなるべしとなり、

今の國府寺村が國府の中心なりし頃には姫路といへるは今の城山を呼べり  
 し名なるが、其後人皇第九十六代後醍醐天皇の時、赤松則村の次子貞範か  
 一小城をこの姫路丘に築きしより其城地を始めて姫路と稱し、數百年の後  
 羽柴秀吉、池田輝政がこの城を増築してより市街漸く繁盛に趣きて、古の  
 中心なりし國府寺村は市街の東部に偏して城山が中心となるに至れり、こ  
 の地は播磨の中西にありて明治二十二年までは飾東郡今の飾磨に隸せしが、

其四月一日より市制を布きて獨立の一市區となり、市長を公選して自治の制を取れり、因に記す飾磨郡が東西の二郡に分れし年代は證をすべし史籍なきを以て疑かならず頃のみさならむ、扶桑略記寛弘四年三月十三日の所には飾磨郡の語あり今八百九十二年なり、寛治三年二月六日後醍醐天皇より香檳山に下されたる院宣には飾磨の語あり八百九十年なり、姫路總社に播磨全國の神々を合祀しは七百十八年前なる養和元年にしてこの時は播磨十六郡とあり、飾磨郡も東西に分れありしなり、彼是を照し考ふれば分郡は遠く八百餘年前のことなれど後世記録にて舊稱を用ひしもあり飾磨の西郡東郡といへるも聞かぬてうの確分せしは徳川幕府中世以後のことなり、この事を東京大學教授にて史料編纂事務なる文學士三上泰次君が目下特に本郡の爲めに取調られつゝあり、而して二郡が再び古の飾磨郡に復し、は明治二十九年四月一日なり

姫路の慶雲

姫路の四區分

國道筋

市街は東の方、市川の西岸より西の方、薬師山の西に達し、南の方、山陽鐵道姫路驛より北の方、野里梅ヶ坪に至り、東西一里半南北一里餘にして、中央に姫路城あり、其地俗に大別して四區となす、城西を船場とし、城南を内町とし、東偏を神谷とし、北偏を野里とす、船場と内町との間に市川より分流せる一小水あり、被川又船場川といふ、四區を合せて町の數凡そ一百あり、今國道なる山陽鐵道に沿へる有名なる町々を擧ぐれば第一等は國中町にして内町の西端にあり、町の西、船場川に架けたるは福中橋なり、福中町の東に横町、堅町、西中東の二階町のり、この間は一直線にして福中町通といひ、姫路城の正南面に位す、其東の橋面に姫路郵便電信局あり所在の町名を古二階町といふ、其より少しく北に折れて復東す元盤町といふ、北手に射楯兵主神社あり所謂總社にして全播百六十八座の神々を合祀せる所なり、元盤町より北に折れて平野町、東魚町あり、復東に折れて大黒町、一丁町、國府寺町あり、國府寺町の東端に姫路城の外塹あり、其架橋を京口橋といへり、内町の東端なりけり、西なる福中橋に沿ひて城南尋常小學校と船場巡查派出所とあり、東なる京口橋に沿ひて姫路尋常中學校、城東尋常小學校及び姫路警察署あり、國道中堅町より南に下れるは飾磨津道又道筋にして、其筋二丁許を堅町筋といひ、南の橋面に姫路病院今この病院は本年中に姫神山腹なるあり北の橋面に姫路神社あり、又同じ國道中大黒町より北に上れるは生野街道にして、久長町、竹田町、大野町などあり、梅ヶ坪は其北端にして遊廓あり、

飾磨津道又道筋

生野街道

國道中堅町より南に下れるは飾磨津道又道筋にして、其筋二丁許を堅町筋といひ、南の橋面に姫路病院今この病院は本年中に姫神山腹なるあり北の橋面に姫路神社あり、又同じ國道中大黒町より北に上れるは生野街道にして、久長町、竹田町、大野町などあり、梅ヶ坪は其北端にして遊廓あり、

西國橋筋

福中橋の北部に架れるは西國橋にして、橋より東の町筋を西國橋筋といふ、  
阪元町、本町、綿町あり、綿町の東端より南に向へば中魚町筋にして、郵  
便電信局前なり、其南端の東側に姫路市役所あり、又北に向へば城内に入  
る、其古城門を惣社門といふ、門を進めば城内なる第十師團第八旅團司令  
部の前を通して其北隣に西に向ひて惣社の西門あり、其西一帯は練兵場と  
兵營とにして、今少しく東北に向へば第十師團司令部として莊嚴なる洋風  
館あり、伏見宮陸軍中將大勲位貞愛親王殿下が師團長として軍務に執筆し  
給へる所なり、而して殿下の御住居は惣社の西門を入りて南手なる舊偕行  
社の内なり、

練兵場

西魚町筋

福中町通の南なる筋は魚町筋といひて西魚町、惠美酒町、吳服町、茶町、  
和泉町あり、西魚町、惠美酒町は藝妓の檢番と料理店とが多きを占め、そ  
を南陽社と稱す、阪元町に西樂社といへるがありて相對峙せり、檢番に井  
上竹鹿、中店、い店あり、い店は堅町と阪元町とにありて姫路藝妓台資會

鹿谷街道

社の設立せる所なり、料理店は井上樓、丸萬樓、福高樓など名あり、  
博勞町、米田町、龍野町などは船場にての繁華地にして、龍野町三丁目よ  
り北に出づれば、岩鼻といへる地を経て飾磨郡なる書寫山方面に向へる道  
路あり、之を鹿谷街道といふ、書寫山より數里の山奥に、應神天皇が御巡  
行のとき、敵屋を張りし故に名づけられしと云ふ鹿谷村ありて、其權現社と  
いへるは古來有名なる社なり、街道の名は是より出づ、

因幡街道

龍野町六丁目より國道を西に進めば市街の西端に出づ、車騎と呼べり、こ  
の地は飾磨郡高岡村の内なり、其西十丁許に河あり、夢前川又手野川と稱  
す、この川は往昔應神天皇が御手を拭ひ給ひしより手拭川と呼べりし由播  
磨風土記に見ゆたり、川に一長橋あり夢前橋といふ、橋を過ぎ西に行くも  
のは國道なれども、北に折れたるは因幡街道なり、  
船場柿山伏、景福寺前、内町の五軒屋敷、下寺町裏、光源寺前、野里の  
坊主町などは一般に士族邸なり、

士族邸

中門筋

堅町筋の東は上下白銀町にして、之を中門筋といふ、北に行けば中門ありて城内に入るべし、

國府寺小路

中門筋の東は國府寺小路といひて、其筋の北端なる本町部内は、維新の際まで一帯に姫路の最舊家なる國府寺家の屋敷地にして、世々姫路の本陣を勤め、四門宏麗驚くばかりの大邸宅なりしが、其後退轉して諸人の所有に歸し、只北門のみ其儘残りて、門を入れば黒住神社あり、この國府寺家は景行天皇の後裔角野明國の子孫にして、今の暹羅國派遣一等領事國府寺新作といへるは其正系なりとぞ、この國府寺小路の南衝に姫路區裁判所あり、東に折れ南に向へは城の外塹ありて小石橋を架し御宮利橋と名づく、この橋は明治二十二年五月に新に架せるにて、時恰も有栖川宮陸軍大將大勳位熾仁親王が、姫路なる第八旅團兵を檢閲し給はむか爲めに、この地に御臨みありければ、初めて御渡橋を乞ひ奉りしよりの名なりとぞ、

大溝小路

國府寺小路の東に大溝小路あり、姫路市中を流る、川は今船場川のみなれど、今より二百八十九年以前なる慶長年中までは市川の分派にして神谷を流る、忍熊川あり、惣社境外を圍み流れて南下せる二股川あり、其頃の城東の地は白井磯といへる河原なりしといへり、隨ひて今の中二階町邊は國府の渡とて、白砂青松の間に濼々たる緑波を破りて、行人を乗せ去り渡し來る輕舟の浮べりし地にして、慶長十三年池田輝政が城櫓を修め市廛を擴めけるとき、それを埋めて一溝水となししが今の大溝なりとぞ、この大溝小路の東は即ち中魚町筋なり、

中魚町筋  
戸口と國樂

赤松貞範か始めて姫路丘を城地に選みし頃は、何程の戸口ありしは得て詳らめかたけれど、固より微々たる一寒村たりしに相違なく、舊記によれば、貞範築城のときは、宿分院の五反西より山の麓まで百戸許ありて、姫山の里と名づけ、西の方中村岡まで斷續して人家ありしと見わたり、されば人家總計を假に百五十戸として、人口は六百以上に届かざりし計算なり、其後百二十年を経て、池田輝政が四州百万石の本城地とせし時代には、巨

多の戸口ありて天下屈指の大都會たりしに相違なければ、僅に十數年間に  
 して本多忠政十五萬石の城下となり、市街甚く衰頽を極めたりといへり、  
 今寶曆年間の調査に係る舊記を見るに、二千八百四十七戸、二萬二千三百  
 九十人とあり、是今より百四十年以前の戸口にして、明治三十年末の調査  
 五千五百四十一戸、二萬五千二百五十六人に比すれば、統計上に於て其頃  
 より我邦全土の戸口に莫大なる變差を來せるに對し、姫路は格段著しき  
 相違なきものゝ如し、さる所以は畢竟往時は中央集權の弊甚しくして自  
 然城下のみが繁盛を極めしが、今日は之に反して其幾分を平等に寒村僻地  
 にまで分賦せるによるならむ歟、されど今日姫路と其附近とに置かれたる  
 陸軍に加ふるに、殆ど市街の觀をなしつつある周圍郡部の村落を以てすれ  
 ば、現在の人口の優に五萬に達せるならむ、されば姫路も決して全國戸口  
 増進の比例に後れずといひて可なり、

市の公立學校は明治二十年十月一日創立の姫路高等小學校あり、明治九年

八月十六日より設け、城南尋常小學校あり、明治十年十月一日に建てら  
 れたる城東尋常小學校あり、一般の向學心はいまだ盛なりとはいひがたけ  
 れど、年々に就學の割合は加はる由なり、只創置以後十數年を経過せる今  
 日に、未だ高等小學校の建築せられずして、十所以上の借宅に個々分裂せ  
 る有様は全市の爲めに悲しむべき現象なりとす、

第二章 城 廓

我姫路は三千年來其名ある交通便利の地なれども、戰爭上の要害地と認定  
 せられたるは至極近代の事にして、今より五百六十六年前後醍醐天皇の元  
 弘二年に赤松貞範の築城せしより創まりしものゝ如し、この貞範は赤松則  
 村の次男にして村上天皇の皇子具平親王の後胤なり、世に所謂村上源氏な  
 り、後醍醐天皇叛臣北條高時の爲めに隱岐に流され給ふとき、則村は播磨  
 佐用郡赤松庄より皇子護良親王の令旨を奉じて兵を起し、攝津の摩耶山に  
 據り、貞範をして姫路丘にありし稱名寺といへるを利用して城柵を設け、

姫路の創始

龜見丸と龜居丸

其族小寺頼秀と共に中國を扼せしむ、是れ姫路城の創始なり、貞範歿して小寺頼秀城主となり、其子孫景治、景重、職治相次て城主たりしが、嘉吉の亂に赤松滿祐赤穂郡の白幡城に亡びて職治も戦死し、山名持豊城主たり、然るに赤松則村六世の孫政則北朝に勤功ありて其家を再興し、應仁の亂細川勝元に屬して再び播磨守護職となり、姫路城に居り、城をば増し築きて本丸を龜見丸、二の丸を龜居丸と稱す、本丸は十八間に二十門、二の丸は二十八間に三十間なり、居ること暫時にして先例により小寺職治の子豊職に譲りて更に大に置鹽山に築きて移り居る、豊職より則職、政隆を経て、小寺氏は御着城を本據とし、政隆戦死して後、御着城の家臣姫路の人黒田重隆姫路城を管す、重隆は宇多天皇の皇子敦實親王の後胤にして、世に所謂宇多源氏なり、歿して子職隆繼ぎ歿して子孝高繼ぐ、この孝高は官兵衛尉と稱し、羽柴秀吉に屬して世に知られたる名將なり、秀吉孝高の策を用ゐて御着城、英賀城、三木城など暫時に討ち滅して全播磨を平さしかば、三木

羽柴秀吉と島田孝高

本丸丸

城を根據となさむ心組なりしに、天正八年四月八日孝高秀吉に勸めて己が居なる姫路城に據らしめ、自からは妻鹿の功山城に退き居る、孝高は有名なる策畧家なれば、名將秀吉さへ屢々其奇謀に驚きけるが、秀吉歿して後、徳川家康に屬して筑前五十萬石に封せられたり、姫路附近の士人多く孝高に仕へて高官を得けるが、栗山利安の如きは世に名を知らる、羽柴秀吉は赤松貞範より十四代目の城主なるが、姫路に居ること僅に三年、其間に置鹽城の用材を姫路に移して三層の天主閣を營り、大に要害を固む、後世太閤丸といふ、天正十年三月十五日三備に出征し、城をば其母弟秀長に譲れり、去る明治三十一年は、その秀吉か慶長三年七月十三日伏見城に薨じ給ひしより、恰も三百年に相當するをもて、姫路にては九月二十一日より五日間其三百年祭を執行せしが、種々の催はしなせありて全市頗る賑ひにき、其後木下家定城主たりしが、慶長五年十二月池田輝政播磨五十萬石に封せられて、三河の吉田城より移り治す、後又備前二十八萬石、淡路六萬石を得

池田輝政の府邸

十一内門と五大外

て百萬石と稱す、實に姫路第十七代の城主なり、このとき城下には宿村、中村、國府寺村の三邑ありて姫地と總稱し、極めて寂しき所なりしを、輝政百萬石を得てこの地を三國の中心となし、城櫓を増築して五層閣とし、内壕外塹を穿り、城外に八十八の米字街を興し、市内に十一門、市外に五大門を設けて往來を警しむ、十一門とは惣社門、中門、鵬門、埋門、車門、市橋門、清水門、野里門、久長門、内京口門、鳥居門にして、外廓なる北條門、飾磨門、外京口門、竹門、備前門が、所謂五大門なり、又城南に飾磨津に通ずる運河を起さむとせしが成らずして止みぬ、其跡をば三左衛門堀と稱す、治城十四年にして卒し、子利隆繼ぐ、孫光政に至り備前に移り、其跡は本多忠政十五萬石を領して、伊勢桑名城より入府す、實に元和元年五月なり、船場川はこの時に出来しなりといへり、忠政の後に子政朝ありしが、寛永十六年四月赤松則景の後胤松平忠明十八萬石にて、出羽の山形より入府し、其子直基に傳へしが、慶安二年八月に至り榊原忠次といへ

三左衛門堀  
本多忠政の入府  
船場川の改修  
本多松平両家の交代

酒井忠恭の入府  
船場大洪水

河合守直の討殺

るが姫路に封せられたり、この忠次は幕府の大老職たりしが、發して増位山に葬る、山上の墳墓今に莊嚴なり、子政房職を繼ぎしが尋で卒し、孫政倫越後村上に移り、松平直基の子直矩來りしが、暫くにして本多政武と交代し、次て亦榊原政邦と交代す、政邦は政倫の子なり、子政祐職を襲ぎしが、子なきをもて養子政岑の政岑を嗣る女色を瀆りて、姫路の美色は悉く收めて去るが、後江戶の名妓高尾を籍給して連れ歸れるなど身行松とせり或して江戶に召さるに傳へたり、後寛保二年六月朔日松平直矩の孫義知姫路城に入府し、卒して景福寺山上に葬らる、子朝矩職を繼ぎしが、領内不穩の事あり、且年幼なりければ、上野の前橋に移され、寛延二年七月廿四日酒井忠恭と交代す、この年船場川大洪水あり、溺死せしもの四百八人あり、今市川の東なる山脇村山下に溺死菩提の碑あるは、其三回忌に建てしにて、十三回忌なる寶曆十一年七月五日にも大法會ありき、主として罹災者の遺族を救恤せしは家老河合定恒なりければ、領民長く其徳に服せしとぞ、彼の有名なる寸翁道臣は定恒の嫡孫なりけり、忠恭より忠以、志道を経て

維新の革命と開城

忠實に至る時に藩の財政窮乏せしかば、重く寸翁を用ひて、それを整理せしむ、效あり、其後忠學忠實忠顯忠緒を経て忠棟に至り、維新の大革命あり、姫路藩の多数は佐幕黨なりしかば、勤王黨河合宗元、其子宗貞、萩原政興などに死を賜ひ、開亭は將軍徳川慶喜に従ひて京師にあり、開亭とは忠棟の號なり、後應慶三年十二月三十日より伏見鳥羽の戦争あり、慶喜の軍敗れて開亭江戸に奔る、明治元年正月十日官軍總々姫路城に向ひしかば、十六日に至り倉皇開城して恭順の意を表し、伊勢崎城主酒井忠恒の子忠邦を迎へて藩主とし事漸く平く、この忠邦は最後の城主にして四十一代目に當れり、明治二年六月十七日忠邦封土を奉還して、舊封實收十分の一凡そ八千石を賜はりしが、明治四年七月十四日廢藩置縣となり、城地は陸軍省の管轄に歸して、大阪鎮臺の分營地たり、明治十九年第四師團第十聯隊の兵營となり、明治二十七八年日清戦役後第十師團をこの地に置かれてより、兵員は年々に増しきたりて、去る明治三十一年十一月にて其設備も完整し、月の

姫路城の高さと四門の名稱

閉詰一則

十三日に司令部も開かれて、二十四日午後二時陸軍中將伏見宮貞愛親王殿下師團長として御着任せられしが、十二月十日全縣下の官民一致して殿下を始め、師團の將校二百餘名を城内なる將校集會所に招請して、師團設置祝賀會を催しけるに來會せしもの七百名に達し、煙火、狂言などの餘興もありて頗る盛會なりき、而して師團の午砲は其月廿八日に創りて發せられたり、この姫路城は高さ井水より四十七間にして、石垣以上は三十九間一尺あり、第五層の廣さ八十疊なり、大手を桐門といひ、東北門を菊門といひ、東方を櫻門といふ、内部には木門、鐵門、其數頗る多く、そを伊呂波に命名しあるより、俗に伊呂波四十八門と呼べり、藩士片山志賀右衛門は甚しき法螺ふきなりしが、或とき江戸邸御使部屋にて御刀番と話し、御刀番「姫路は鶴多しと聞く誠なるか、といひければ片山は答へて「毎朝登城するに鶴多くて進めぬ位にて、兩手に拂ひ退け



つゝ歩むなりといへり。御刀番も笑ひて、「其許の勘定にては御城の高さ何程ぞといへりしに」さ様なり。二重三重の邊までは見ゆれど、其より上は雲に隠れて見ゆ申さず勘定せむ術なしと答へければ、御刀番は「拙者先年城下を通りけるに能く見ゆたりといひしに」其許は誠に仕合者なり、とは雲の隙間にありしならむ。拙者は生れて今に隙間に逢はずといへりしとぞ。

第三章 神社

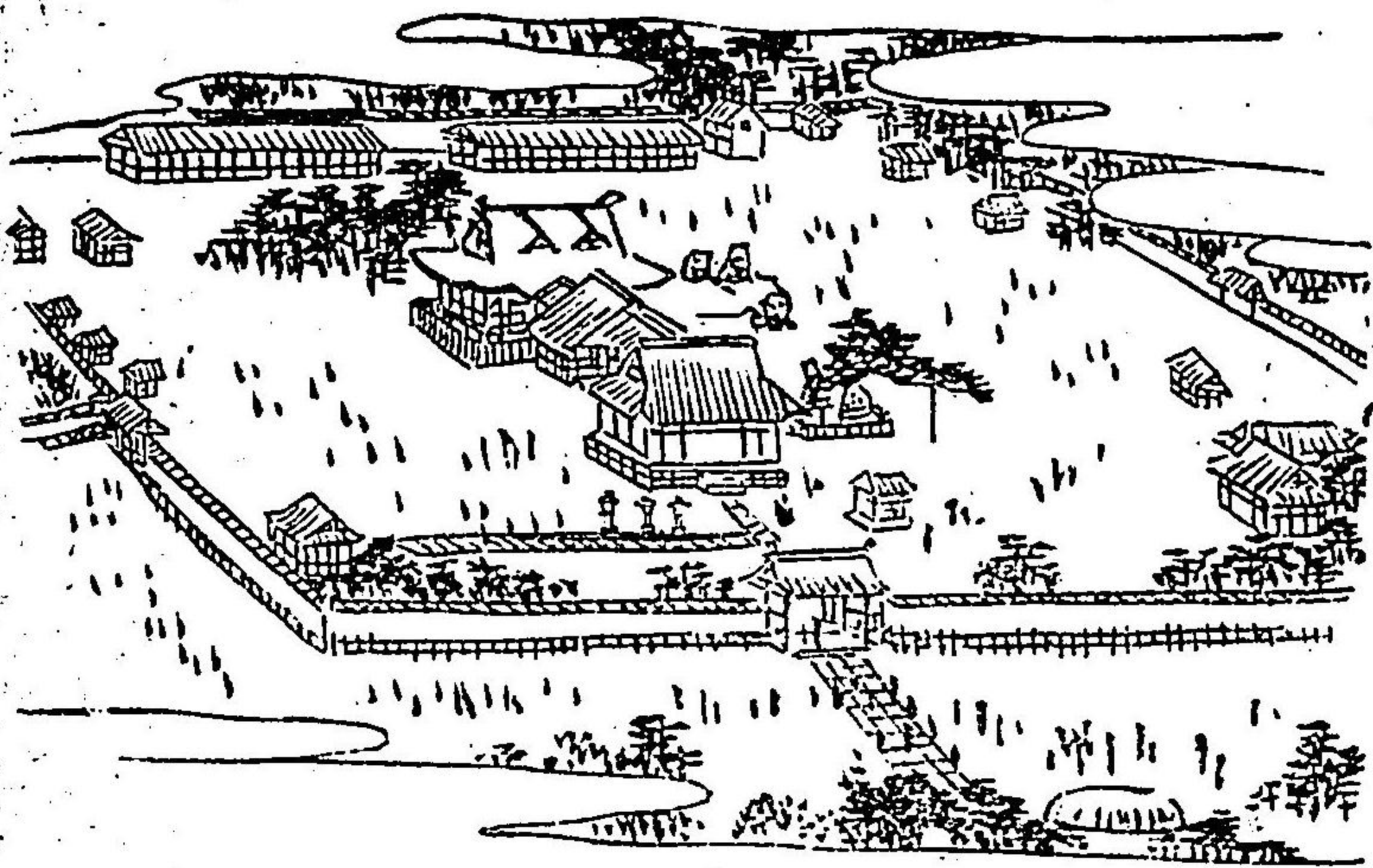
二十四社の事

姫路市並に其附近なる神社二十四座を遥みて二十四社と稱し、敬神家のそれを順拜せるもの多し。古き神社は大抵その中に列せるにより、今は先づこの二十四社の中にて名高き神々の縁起を記述せむ。

二十四社は市中にて惣社案内社、十二所神社、齋着堂、神明社、山王社、市外にて神谷天神社、北條天神社、芝原春日社、荒川神社、題目堂大神社、三和神社、青山神社、安田朝田神社、土山八幡社、蛤山高岳社、辻井行矢社、山井大蔵社、男山八幡社、愛宕社、伊傳居桑原社、白國大蔵社、同

惣社と例祭

惣社の圖



依伯社、大日大蔵社をいふ、惣社射楯兵主神社は姫路藩城内にあり、祭神は大日貴尊、五十孫にして、維新前までは軍八頭正一位惣社伊和大明神と稱し、社領百五十石ありき、この伊和大神とは大日貴尊の別名にして、表蓋鳴尊の御子に當り中國北國などを開拓し給ひし神なり、一に兵主明神とも申す、欽明天皇の二十五年六月十一日飾磨郡伊和里水尾山に鎮祭し給へり

しを、延暦六年六月十一日國衙庄小野江に奉遷す、又射楯六神とは大日貴尊の御兄五十猛尊の御事にして、神功皇后が三韓より御歸陣のとき、因達里に鎮祭し給へりしを、後小野江の兵主明神社に合祀して射楯兵主神社と稱せり、延喜式神名帳に播磨國飾磨郡射楯兵主神社二座とあるは是なり、この小野江は今の惣社の三丁許 西北にして、因達里は今の東 阪本村邊なりしかの心地す、惣社神宮なりし上月爲彦氏は呼聲殆ど相似たれ又水尾山は今の三軒屋村秩父山の舊稱にして、播磨風土記にある十四丘の一なる箕丘のことなり、

惣社の舊名は射楯兵主神社なりしに、爰に一の怪しき隣相記といへる一書が久しく世に行はれて、この伊和大神は天平寶字八年六月十一日に、國司藤原貞國が安栗郡神戸一宮よりこの地に遷しとなり、との妄説を傳へて、神事などにも神戸一宮にあなる白倉、高瀬華崎といふ三山を擬へ造りて三山神事など稱するは理なき次第なり、凡祭式に山と録とを飾るは我國の古例なり

一條天皇の正暦元年三月三日播磨守平井保昌神威を乞ひて丹波大江山の鬼賊を討平す、依りて翌年六月朔日朝廷よりこの神に正一位を授け給へり、安徳天皇の養和元年十一月十五日播磨全國百六十八座の神々を合せ祀りて軍八頭正一位惣社伊和大明神と稱す、軍八頭とは軍事に於て八百萬神に長たる意にて、惣社とは播磨全國の神を總ぶる謂なりとか、この惣社が小野江の神の本あり故に一名より今の地に移りしは天正九年のことなりといふ、この神社の例祭は毎年十一月十五日にして、社西に御旅所あり、三昧の神興の渡御式を行ひ、神前にて猿樂三番を勤む、是を姫路の能と稱し、遠近より來觀するもの頗る多く賑はしき祭式なり、又六月三十日に名越祭といへるを行ふ、名越とは蓋し夏越の謂にして、蘇民將來の故事に基き流行疫を祓除するてふ奏輪を造り、脂づるもの、ろをくぐりて無病を祈る、

名勝地

影向祭

又六十年目に影向祭といへるがあり、丁卯祭又一山祭ともいふ、この影向祭といへる語は神の廻りて影を現はし給ふ謂にて、惣社には射楯大神、兵主明神の外別に九所の神靈を祀れる神秘あり、そは曾て境内九株の松に影向ありしてふ九柱の神靈ならむが、この九株の松は御旅所の邊にありしに、天正の亂に伐り取りて一株のみ残りしを、後に社の東側に移して影向松と稱せしが、今は枯れて株のみ残り、

修羅踊と血池の池

今より三百七十八年前、大永元年七月十三日より三日間置鹽城主國守赤松政村始めて臨時祭を行ふ、この時は氏子なる宿村、國府寺村、福中村、北條村、南條村、南畝村、山井村、八代村、野里村、庄田村、津田村、中村の十二ヶ村より、踊子三百九十七人出て、刀劍、鐵鎗などの武器を持して殺伐極まれる踊舞をなし死傷多かりしが、其後二十年ごとにこの式ありて維新前まで續けり、是を修羅踊と稱す、修羅とは獄鬼の梵稱なり、今も社殿の西南隅に一池ありて血池と呼べり、この踊の遺物なりとぞ、この赤

宮本武蔵の奉頓

松政村の寄附に係る大鏡は今も境内に安置しあり、惣社拜殿正面の奉頓に宮本武蔵が自畫奉納せる力士相撲の圖ありて名高し、又其側に吉備真備が入唐の時の圍棋の圖あり、前に玄宗皇帝あり、背に安倍仲磨の神靈あり、畫神浮助す、浪華の畫家谷口鶴山の筆にして、同地の商人が文政五年二月に奉納せるものなり、

長壁神社

長壁神社は元來城廓内にありしものなるが、今は惣社の正面なる神橋外の東側にあり、祭神は姫路刑部大神なり、この祭神に付ては古來異説多く、刑部親王の女宮姫なりといひ、木華咲耶姫なりといひ、伏見天皇の寵姫刑部局罪ありて姫路に謫せられけるを祀りしなりといひ、甚しきは阪田町善導寺内に棲めりし阿芳と呼べる老狐なりなぞいひ傳ふ、維新前までは藩主を始め、市民一般に厚く崇敬して、不思議なる靈徳を備へ、常に姫路城の最高所に坐して、そを守護し給へる神なりと信せられさ、例祭は陰曆の八月朔日にて狂言などあり、堅町長源寺に祀れるこの神の分靈は六月二十

案内社

三日に例祭あり、

案内社は惣社境内の東南位にあり、祭神は猿田彦神なり、この神は天照大神の御孫瓊々杵尊が高天原より鏡紫に天降りましむとき、道の案内し給ひける神にて、延暦六年兵主明神が水尾山より小野江に遷りますとて、播磨各郡への案内を、この神に尋ね給ひし因みによりて、其十八年に一社を創めしなりとぞ、維新前までは小野江の舊地なる岐阜町にありしが、

其後の所に遷し、なり、

十二所神社と阿菊の祠

十二所神社は舊飾磨門の西に當り、同名の町内にあり、祭神は少彦名神なり、今より九百七十年前延長六年三月朔日この社の南方なる南畝丘に十二莖の艾を生し、是にて妹を摩すれば諸病を治すべしとの神託あり、依りて其丘に一社を創めけるが、後安元元年九月九日今の地に奉遷し、元地を御旅所とす、例祭は陰曆九月九日所謂御旬祭にして屋臺など出て賑はし、境内に阿菊の祠あり、

書着堂

今川貞世紀行のよ

書着堂は神谷なる國府寺町にあり、祭神は市岐島姫神なり、書着は蓋し日月にして、日女神、月讀尊二神のことならむ、日女神とは天照大神のことにして、月讀尊とは素戔嗚尊の別名なるが、御同胞なる二尊が相誓ひて生み給ひし女神は市岐島姫なれば、それを祭りて書着神社と稱するは故あらしむなり、又稚日月神社とも書すとぞ、今川貞世が九州紀行に「姫路より南に當りたる所を問ひしに飾磨の里といふ、歩行路は少し隔てたれば河並の中に出でたる景色遙に見渡されて何となく面白く、又聊か行過ぎて川の邊りに石塚一ツあり、是は神の坐す所なり、出雲路の社の前に見ゆる物の形ども一ツ二ツ侍りしを何ぞと尋ねしに、この道を始めて通る旅人は、貴賤どもに之を取り持ちて、塚を周り、  
。。。。。。とありこの貞世のいへる社は、今の小川渡の西北にありし道辻社のことにて、書着堂のことにはあらねど、話の似寄りて珍しき社なればこゝに併せ掲げつ、

神明社

神明社は龜井町にあり、皇大神を祭り、祭日は七月十五日なり、

山王社

山王社は野里の北端に在り、大己貴尊を祭る、今は日吉神社と稱せり、二

十四社外にて市中にある名高き神社は姫路神社、白川神社、粟島神社など

なり

姫路神社

姫路神社は維新の際まで姫路藩主たりし酒井伯爵家の祖酒井正親を祀れる

にて、本町五十番地にあり、明治十二年十一月十日舊藩臣が創立せしもの

にて縣社なり、酒井氏は徳川家譜代の臣にして、正親の如きは徳川信忠よ

り家康に至る四君に仕へ、功勞頗る多く、家康は幼より父の如くに視てし

が、天正四年六月三河に卒し雙松院と諡す、例祭は九月十七日なり、

白川神社

白川神社は坊主町にして、東に城の外塹あり、西に船場川ありて狹隘なる

所なり、祭神は倉稻魂神にて、善く諸病を治し給ふとて、來り禱るもの常

に絶えず、殊に小兒の間は氏子となれば發病せずと申し傳へて、之を信

せるもの多しとぞ、

粟島神社

粟島神社は龍野町五丁目にあり、少彦名神を祭り、婦女子の諸願を叶へ給

ふとて詣づるもの多し

高岳神社と蛤岩

高岳神社は飾磨郡今宿村の北なる袖振山の南端に在り、俗に蛤山と號し、

二十四社の中に各高き社なり、祭神は仲哀天皇、應神天皇、崇徳天皇

天皇、言代主神、猿田彦神の五座なるより、又五社明神とも稱す、社殿の

上方に大なる岩あり、所謂蛤岩にして、往昔田井村の一貧女、この岩

の上なる水溜にて、黑白二個の蛤を拾ひ得て、俄に富有になりし由いひ傳

ふ、

この社は元來矢落村在家村八帖岩の上に祀られありしを、神の告によりて

今の所に遷せしなりといふ、例祭は陰曆九月九日の節句祭にして、蛤祭と

稱し賑はしむ祭式なり、

荒川神社

荒川神社は飾磨郡井口村西手の山腹にあり、例祭は十月十七日の陣營祭目

にて荒川祭と稱し人出多し、

青山神社

青山神社は飾磨郡延末村の北手なる青山といへる一小山の巔にあり、社殿は姫路城主本多忠國の造營なりとぞ、應神天皇、天兒屋根命を祀れり、

三和神社

この青山は播磨風土記にある十四丘の一にして、最と古き名山なり、三和神社は青山の南手なる手柄山の南麓にあり、祭神は大己貴尊なり、手柄山は播磨風土記に所謂手刈丘の轉じたるにて、往古韓人が始めて來にける時、鎌を用ふるを知らず手にて稻を刈りければ、斯く名つけられたるなりといふ、丘の上には今姫路公園を設く、南播磨灘に向ひて風景絶好なれば、春秋の候老弱子女の登り遊ぶもの頗る多し、

水尾神社

山井村大蔵社は男山の南麓にあり、今水尾神社と稱す、以前は材木町にて神守丘といへるにありしなり、祭神を素盞鳴尊の子大蔵尊なりと云ひ傳へてけるが、近年に至りこの地こそ惣社の原地にして、祭神は射楯兵主大神なりと稱し、祭日も惣社と日を同ふし、屋臺など出て、頗る賑はし、

男山神社

男山八幡社は一に長彦神社と稱す、祭神は神功皇后、應神天皇にして、社

男山神社

殿は赤松貞範の再興に係り、其後赤松政村、神原政邦の改築せしことあり、播磨風土記に長彦墓、馬墓、馬墓池などのこと出であり、この山邊ならむと思はるゝふし多けれど分明ならず、

白國神社

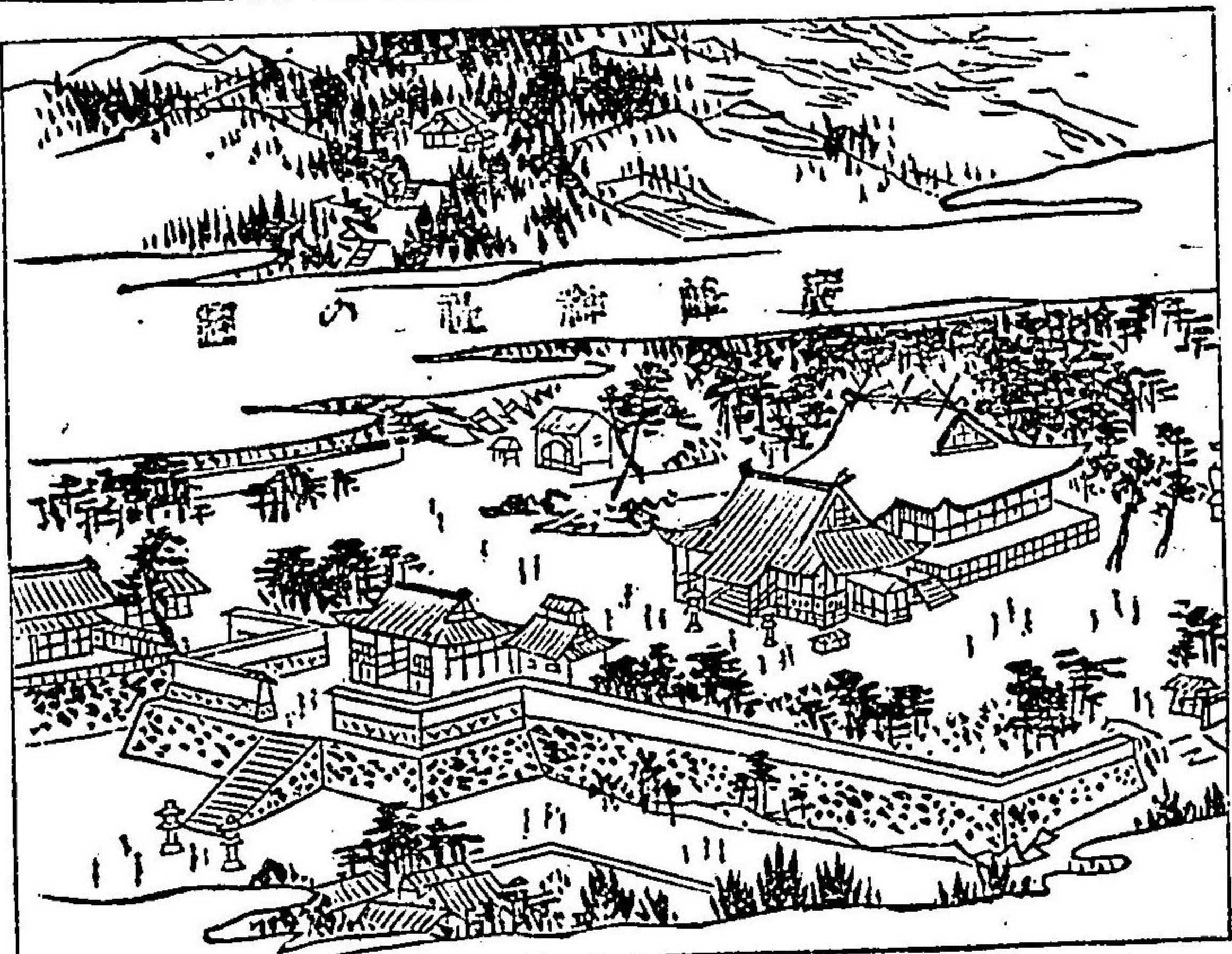
白國神社は白國村の山腹にあり、この神は俗に一に神戶一ノ宮、二に荒田神社、三に北條酒見神社、四に白國神社と云はるゝ位の古社にして、祭神は國方姫なりといへり、此村の白國和といへるはこの社と共に繼續せる舊家なりといふ、

佐伯社

佐伯社は白國村の東の入口なる土橋を西に渡れば、其左側の數中にある小社なれど、靈驗ありとて遠地より來り詣づるもの多し、

廣峯神社と其祭式

二十四社外にて姫路近地にある名高き神社は廣峯神社と松原神社となり、廣峯神社は姫路の北手にて、姫路驛を距る一里七丁なる廣峰山の巔に在り、山の高き白國村より登れば十八丁、之を表阪といふ、平野村よりすれば八丁、之を表阪といふ、祭神は素盞鳴尊、稻田姫及び八王子にして、維新前



の社領は凡そ八十石ありしなり、今は縣社に列す、この神社は、今より一千百六十五年前天平五年三月十八日遣唐留學生吉備真吉備が唐より歸朝のとき、時の帝聖武天皇に奏して、翌年素盞山上に造營ありしものなるが、それより一百三十五年の後清和天皇の貞觀十一年の春に至り、王城鎮護の爲めに京都に御遷座あり、今の祇園神社是なり、而して其後とても其跡には同

し神を祀られありしが、それより又九十餘年の後、性空上人同山に圓教寺如意輪堂を營みしかば、神佛の混交を忌みて、又六年の後即ち今より九百二十六年前なる天祿三年に、白幣山といへりし今の廣峰山に遷されしなり、此社にては毎年七祭あるうちに四月三日の祈年祭、同月十八日の祈穀祭此二祭は舊時は三月の三日と十八日とに行はれて俗に田植の神事穂擲の神事と稱し來れるものなり十一月二日の神幸祭行ひしにて神輿渡御式と稱せしものなり、神官帶來してを三大祭といへり、前の二祭は農事に係り、且競馬などあるをもて、遠近より參詣するもの頗る多く滿山立錫の餘地なき程なりとぞ、

牛頭天王のまじ

因に記す、古來素盞鳴尊を牛頭天王と稱して、この社に詣つるを天王詣と呼べることなるが、是は聖武天皇のとき、行基菩薩といへるが現示垂跡説を唱へて、神佛は異跡同身なりとせしより始まれることなり、この説によれば天照大神は天竺の大日如來の垂跡なり、應神天皇は八幡大菩薩の權現なり、素盞鳴尊は牛頭天王の化身なり、我國の八百萬神は何れ

も天竺なる三如来七菩薩のこゝに権りに現はれ給へるなりなるといひて、神佛を混淆せることなるが、後世爲めに各神社に僧尼を置くに至れり、是を兩部神道といふ、この習慣は維新の際明治元年三月十三日に至りて嚴に禁止せられぬ、

松原神社

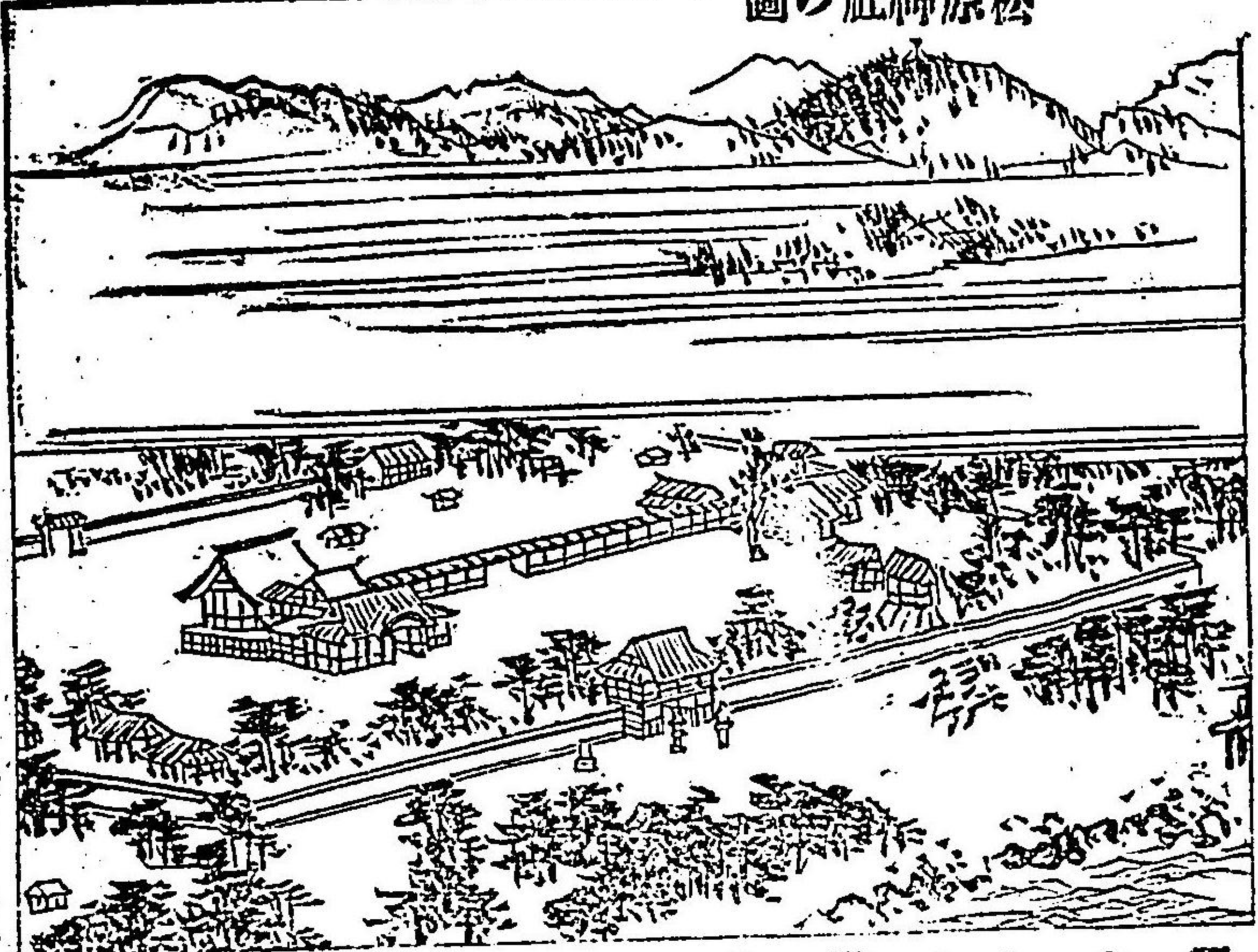
松原神社は姫路より凡そ二里許東南なる白濱村松原にあり、兩部神道の時には八正寺と稱して寺領六十石あり、權勢頗る強かりき、淳仁天皇のとき海中より八幡宮の文字を彫める靈木現はれ、筑紫宇佐八幡宮の御神跡なりとの神告ありしかば、乃ち社殿を營みて應神天皇を奉祀せしなりとぞ、この社は地方の厄除神にて、陰曆正月十九日には除厄を祈るため老弱男女の詣づるもの路に相連り、賑はしきこと云はむ方なし、

厄神館

例祭は陰曆九月十六日にして、地方にては灘祭と稱し、神輿は三丁許西手の山嶺に遷され、各村の氏子は屋臺を出して扈從し、三昧神輿の衝突といひ、壯年老年色別の屋臺練行の競争といひ、其技甚だ劇烈なるより、そを

灘祭

松原神社の圖



船場本徳寺と其邊  
居松

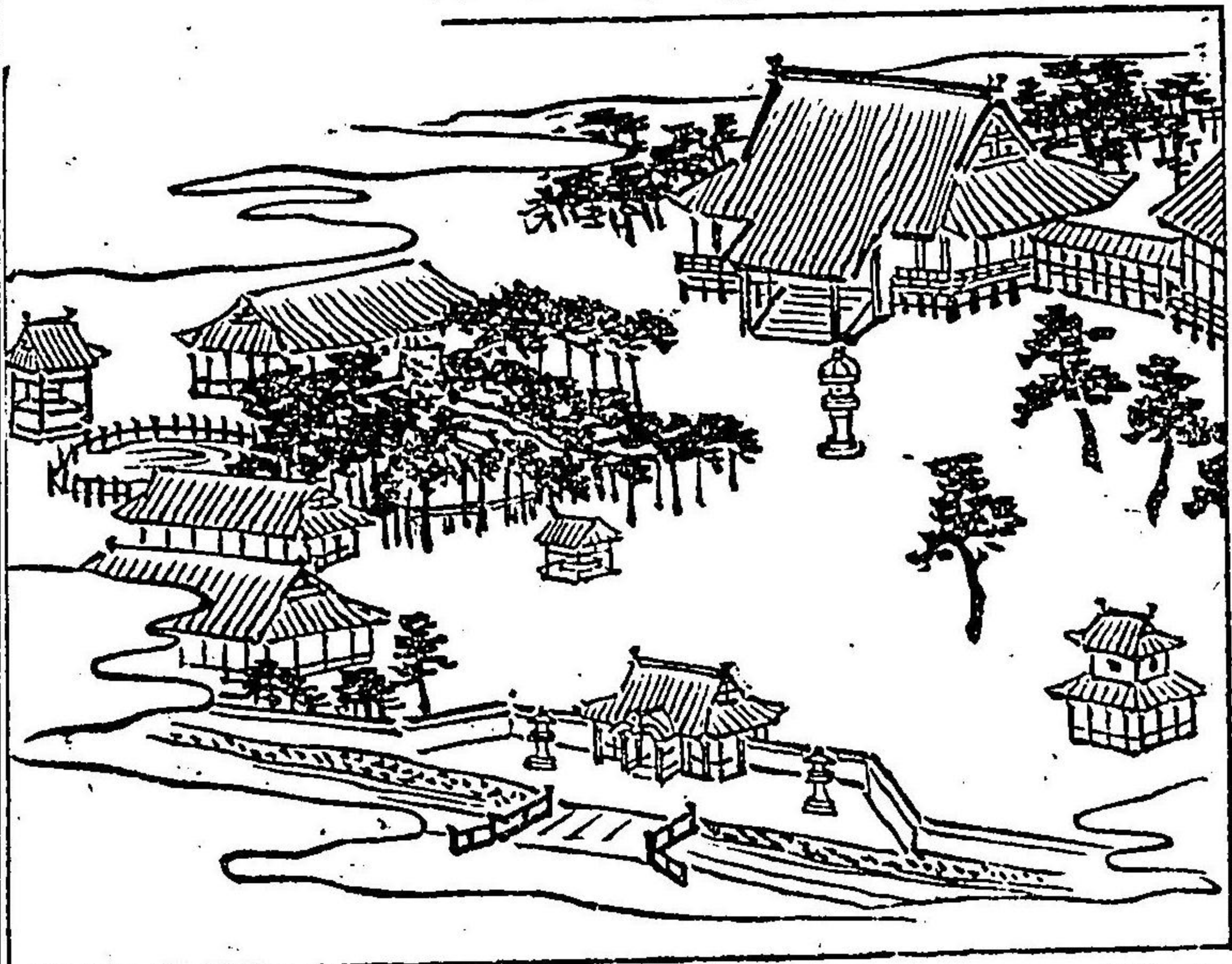
觀じてて姫路を始め近郷遠地より群集するもの數萬人に達し、御旅山并に其南手の山とも人もて築かれたる山の如く祭式の賑はしきこと日本全國に其比稀なりとぞ、

第四章 佛 閣

姫路市内にて佛閣の名あるものは船場に本徳寺、景福寺あり、内町に正明寺あり、野里に慶雲寺あり、本徳寺は淨土眞宗東本願寺派にして地内町に在り、明應元

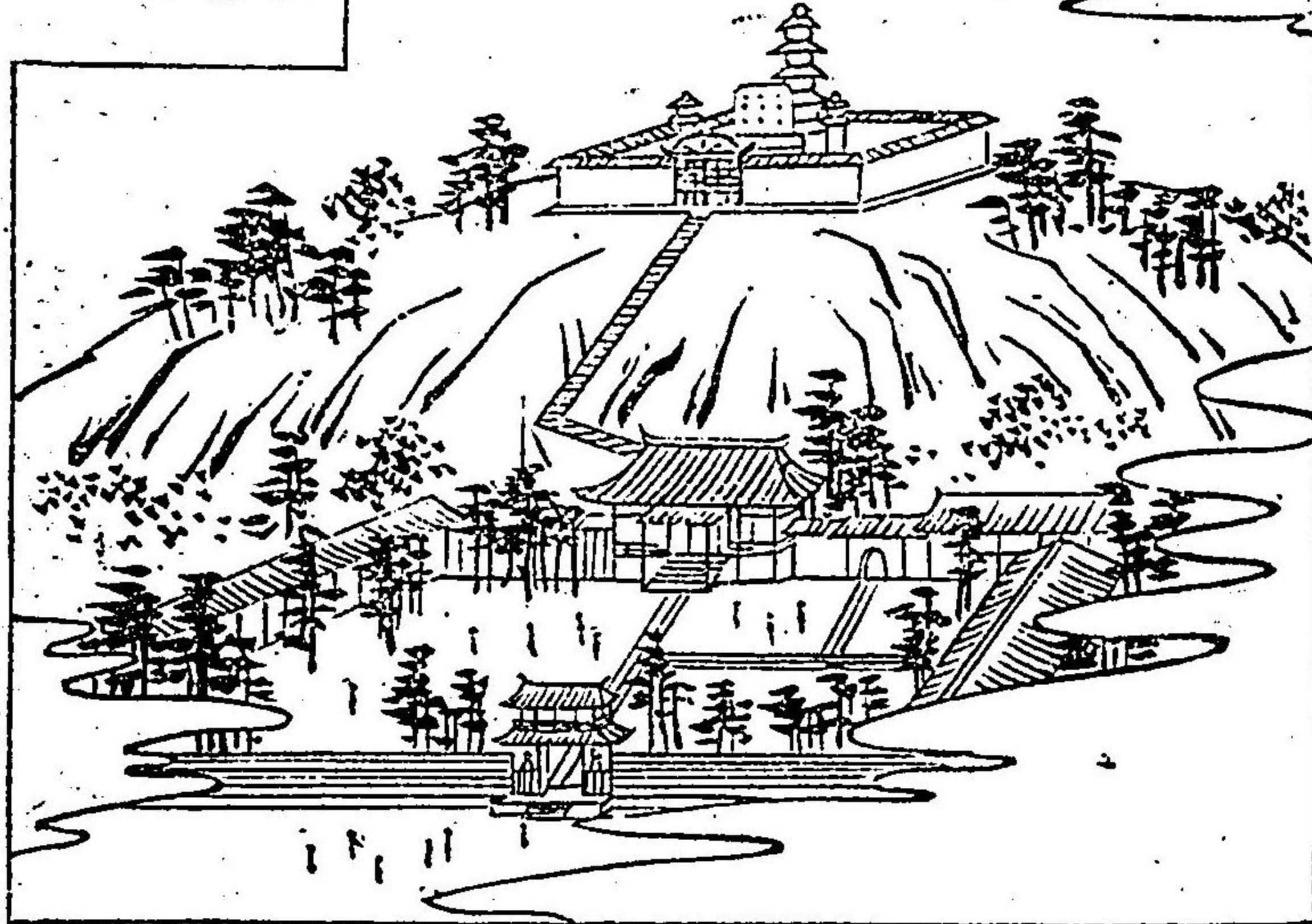


圖の寺徳本



年本願寺蓮如上人が、法弟延  
末村法専坊下間空善の乞を容  
れて、備前郡英賀村に創立せ  
しを、天正十年羽柴秀吉英賀  
城を滅  
せし後、龜山村に移り、後本  
願寺が東西に分争せしとき  
因に藤原鎌足の後裔皇太后宮大進有範  
の子和親聖人の開基に係る京都の本願  
寺が東西二派に分れたる次第を記さむ  
に、法主第十一世願如の子に光裕光昭  
の二人ありけるが父歿して其母は弟の  
光昭を愛して豊後秀吉に懇へうを立て  
、嗣とす、然るに秀吉歿して世は徳川  
家康の左右する所となりしが、この家  
康は光裕の嫡孫あるを見て光裕に命じ  
て更に東本願寺を興さしめき、是より  
後本願寺分れて東西兩派となり本末暨  
遺の論常に絶えざりしが、明治十五年

圖の寺福景



三月本願寺中興の祖願如上人に藤原大  
師の號を賜しとき勅して兩寺同格と爲  
め紛争の弊なから東派に屬せしが  
城主池田輝政のとき、其干涉  
によりて西派に屬せしを、後  
元和三年に至り城主本多忠政  
寺地を賜ひて東派を再興せし  
め、蓮如の玄孫顯淨院壽繼と  
いへるが寺主となれり、今の  
本堂は享保三年開光院海澄が  
建てしにて、このとき紀念の  
爲めとて一稚松を境内に植ぬ  
しが今の龜居松にて、枝廣く  
四方に垂延して其名高し、

景福寺と船丘

春秋の彼岸會、御取越法會などには詣づるもの頗る多く、全市爲め賑ふ。瑞松山景福寺は姫路城に對して船塙川の西手にあり、曹洞宗なり、この寺は南朝の正平十九年に攝津六瀬の領主平尾章勝といへるが創建せしにて、同宗本山越前永平寺の通幻和尚を開祖とし法弟一徑和尚始めて來り住す、通幻の法衣直筆及び一徑の蜀紅錦など寺寶として傳はれり

寺後の山は今景福寺山と稱すれど、本名は掃磨風土記に依りて船丘なることを知る、一時孝顯寺山と稱し、又嵐山、群鷺山など呼びしことのあるが如し、山に城主松平大和守義知の墓あり、

正明寺

姫路山正明寺は五軒屋敷にあり、天台宗なり、この寺は近衛天皇の康治二年に増位山の道遠和尚が開きしにて、元來城山の上にあしを、赤松貞範が築城の時其建物を使用して、別に寺地を國府寺町に授けられけるが、後今の地に移りしなりといへり、舊名は一乗山稱名寺にて、姫路第一の舊寺なれば古記類も多しとかや、

慶雲寺

願入寺

子安地蔵と宿分院

書寫山圓教寺

永祐山慶雲寺は野里村にあり、禪宗なり、創立年代は詳かならず、今の堂は天正年中の建立にて池田輝政の保護厚く、寺領凡そ七十石ありしなり、又阪田町に一乗山願入寺とて有名なる古刹あり、この寺は高倉天皇の治承二年に天台の僧幽玄といへるが開きしにて一牀の地藏尊を安置せり、傳説によれば、平相國清盛其女建禮門院徳子が高倉天皇の中宮となりて姪りし時、六十六牀の地藏尊を刻みて全國に安置し、もて安産を祈りしことあり、この寺のは其内の一牀なりとぞ、始は宿村にありしを池田輝政の時今の地に移せしなり、子安地藏とて名高し、宿村にありし時には宿分院と稱せし出にて、そは宿村と國府寺村との境界地なりしに由れるの名ならむ又この宿村と城山の西なる武人屋敷八代村との中間に一村ありて、中村と呼びし由なり、

姫路近地にて有名なる佛閣に飾磨郡にて書寫山圓教寺、増位山隨願寺、牛堂山國分寺、佛日山法輪寺などあり、

書寫山圓教寺は姫路驛を距る一里三十二町、曾左村書寫山上にあり、山の

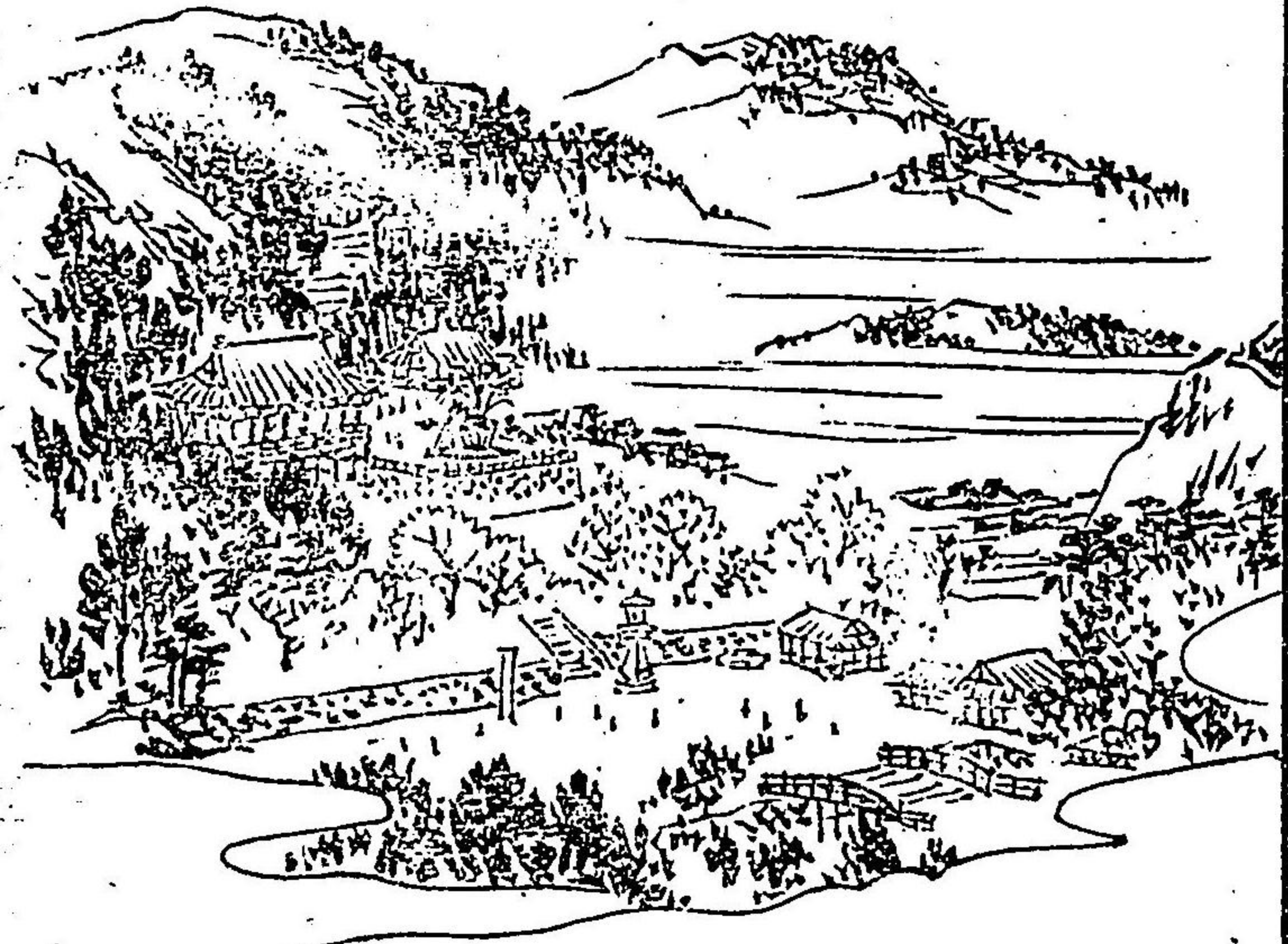
高十八丁、西國三十三所第二十七番の靈場にして、康保三年今より九百年前に性空上人の開基せし寺なり、其以前はこの山に吉備大臣が素盞鳴尊を奉祀せしより素盞山と稱せしを、上人登山の途中に仙人の告によりて書寫山に改めしなりといへり、この性空上人は橋善根卿の二男にして俗名を方用と呼びき、智深く徳高く、其名全國に聞ゆる時の天皇も甚く尊敬し給ひき、寛和二年七月廿八日華山法皇御臨山あり、後に一條皇后上東門院は和泉式部など六人を従へて御登山あり、上人避けて逢ひ給はざりければ、式部「冥きより冥き途にぞ入りぬべき途に照らせ山の端の月」と詠しければ遂に御面會あり、上東門院歡喜の餘り詠み給へる歌に「二ツなく三ツなき法を聞くからに今は五ツの障りあらまし」とあり、長保四年三月五日法皇重て御臨山あり、時に上人は退隱して二里奥なる通寶山彌勒寺に住せしかば、法皇は半夜山路を徒歩して其寺に向はせ給ひ、翌終日法話を聞き給ひし上にて、上人の坐像を描かせ給ひしといふ、其後寛弘四年三月十日上人九十八にて昇寂し、悉地菩薩と諡す、後年俊白河法皇、

性空上人の坐像

華山法皇の坐像  
上東門院和泉式部の登山

羽柴秀吉の陣守領のこと

書寫山の圖



人九十八にて昇寂し、悉地菩薩と諡す、後年俊白河法皇、後醍醐天皇の御臨幸あり、其前後住山の衆徒頗る盛にして寺院三百餘坊あり、今の安室村、高岡村、餘部村などは其頃の寺領なりしが、天正六年羽柴秀吉播磨攻めるとき、其年三月六日本陣をこの山に定めしより、後數月間全山俄に衰頽せしが、八月廿三日事半ぎて舊に復し、廿四日東阪本村五百石を授かる、同八年九月

性空上人のま  
華山法皇のま  
上東門院和泉式部の登山

高さ十八丁、西國三十三所第二十七番の靈場にして、康保三年今より九百年前に性空上人の開基せし寺なり、其以前はこの山に吉備大臣が素盞鳴尊を奉祀せしより素盞山と稱せしを、上人登山の中途に仙人の告によりて書寫山に改めしなりといへり、この性空上人は橋善根卿の二男にして俗名を方用と呼びき、智深く徳高く、其名全國に聞ゆる時の天皇も、世々尊敬し給ひき、寛和二年七月廿八日華山法皇御臨山あり、後に一條皇后上東門院は和泉式部など六人を従へて御登山あり、上人避けて逢ひ給はざりければ、式部「冥きより冥き途にぞ入りぬべき途に照らせ山の端の月、と詠しければ遂に御面會あり、上東門院歡喜の餘り詠み給へる歌に「二ツなく三ツなき法を聞くからに今は五ツの障りあらまし、とあり、長保四年三月五日法皇重て御臨山あり、時に上人は退隱して二里奥なる通寶山彌勒寺に住せしかば、法皇は半夜山路を徒歩して其寺に向はせ給ひ、翌終日法話を聞き給ひし上にて、上人の坐像を描かせ給ひしといふ、其後寛弘四年三月十日上

羽柴秀吉の陣寺領のこ

書寫山の圖



人九十八にて昇殿し、悉地菩薩と諡す、後年校白河法皇、後醍醐天皇の御臨幸あり、其前後住山の衆徒頗る盛にして寺院三百餘坊あり、今の安室村、高岡村、餘部村などは其頃の寺領なりしが、天正六年羽柴秀吉播磨攻のとき、其年三月六日本陣をこの山に定めしより、後數月間全山俄に衰頽せしが、八月廿三日事平ぎて舊に復し、廿四日東阪本村五百石を授かる、同八年九月

朔日更に五百石を賜ふ、慶長九年池田輝政のとき二百五十石に減じ、徳川幕府となりて八百三十三石を賜はる、然るに維新の際無藤となりしかは、住山の僧侶漸く減じて今は僅に三ヶ寺あるのみ、明治三十一年六月一日内務省より五百圓を保存金として下賜あり、今日にては凡そ二千圓の基本金ありとなり、

女人禁制

この山應永五年今よりは五百年前九月二十日心空上人の請奏によりて女子の登山を禁止せしが、維新の際其禁を解けり、  
毎月十八日は參詣人多く、七月九日は四萬六千日と稱して山上山下老弱群集す、又正月十八日は山嶺なる白山といへる所に追儼式あり、修正會と稱せり、

御車屋敷

限岩と白山

この山は登山の途東阪、西阪、鯉尾阪、裏阪の四あり、全山古蹟名勝頗る多く山下なる東阪本村に後醍醐天皇が風箏を停め給ひし跡あり、今御車屋敷と稱す、限岩あり、性空上人が梵唄を唱へられし跡なり、頂上に白山と

如意園と開仰水

見鏡水

一本杉

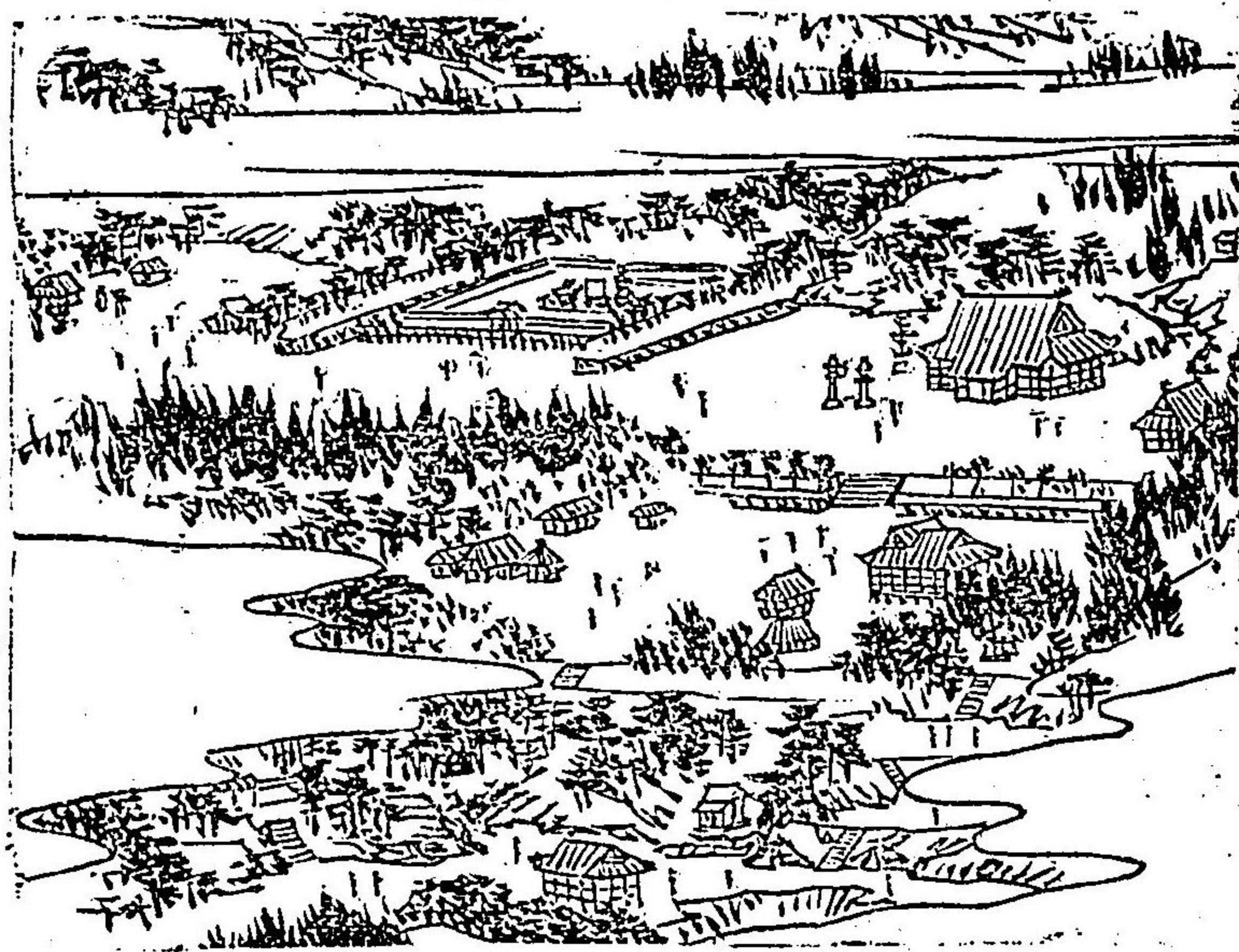
女人堂と退凡碑石

増位山隨願寺

呼べる地あり、是れ素盞鳴尊を祀れりし原地にして、後年性空上人が六根の清淨を求めて六年を経たる所なりといふ、其背後に如意瀧あり、開仰水は後醍醐天皇の汲み給ひし靈泉にして、辨慶水は雲水井又見鏡水なと稱して有名なり、一本杉は峯の西手に特出せし大樹にして、舟人の目標なりしものなるが、參詣人が紀念の爲めとて妄りに其皮を剥ぎ取れる結果にて、明治二十三年の交に枯れしかば伐採しけり、惜しむべき限りなり、  
女人堂は東阪本にあり、應永五年女子禁制の際、三十三所の札所として建てし所なり、又退凡碑石は東阪の中央砥石阪の邊にあり、女子登山の限界たり、  
増位山隨願寺は白國村の奥なる開谷山の上にあり、姫路驛を距ること凡そ一里、山の高さ八丁と稱す、山の本名は有明峯なり、  
この寺は聖武天皇の天平七年今を距ること一千行基僧正の創建せしものにて、其孫弟法勢の時には勢望頗る盛なりしといふ、其頃は法相宗なりしが後、

増位町のこ

増位山の圖



仁明天皇の勅によりて天台宗となり増位山隨願寺醫王院の號を賜はりしといへり、其頃は全山甚だ盛なりし由なるが降りて天正年代に至り、三木城主別所長治大兵を率ゐて來り攻めしかば、寺堂全く焼亡して、衆徒は悉く佐土村に退き、次て姫路嵐山に來りて十、四ヶ年間其地に住みけり、今に其地を増位町といへるはそれが爲めなりとぞ、其後天正十五年羽柴秀吉寺堂を再營し

牛堂山國分寺

永享の大地震並に轉着村動目村のこ

て纒に舊觀を復せしとのことなり、寺領は増位田と稱して、山ノ井村の西手にありき、其地の一部は今姫路監獄支署となれり、

牛堂山國分寺は市川の東國分寺村に在り、この寺は聖武天皇の天平十三年三月廿四日の勅命にて創建せし播磨の國分寺にして、其時は金光明四天王護國寺と稱しき、封五十戸水田十町を領し、境内廣大東西六十丁、南北七十五丁、丈六の佛像、七重の高塔、五十の寺堂、美觀を窮めし由なるが、戰國より御着城主小寺政職が羽柴秀吉に抵抗せし際までに追々零衰して、現今は其百分一を遺さずなりぬ、寺領は秀吉のとき國分寺村三百三十七石なりしが、池田輝政のとき實收三百六十石となりて維新の際に至れり、境内に四國八十八ヶ所の地藏あり、堂内に寺堂建築の際功勞ありしてふ靈年の像を置けり、

今より四百六十六年前、後花園天皇永享四年八月二日の大地震、及び同年九月三日の市川筋大洪水は、古今希有の一大慘事なりし由なるが、この時

國分寺の圖



國分寺を始め増位山、普賢山などの諸堂塔大抵倒破しければ、翌年七月二日大納言藤原基隆諸寺再興の勅使として御下向あり、其御着興ありし地は今の御着村にして、御逗留ありし地は勅使村なり、今は勅使村と目村と云ふ其時播磨守駿職赤松滿祐は家臣加納主膳、原田兵庫を奉迎使として伺候し、厚く勅使を國分寺の境内松本といへる地に饗す、其地は今に加納原田村なること舊記に見ゆ、

佛日山法輪寺並に岡田村町坪村のみと

佛日山法輪寺は町坪村清ヶ岳の東麓にある有名の古刹なり、天正九年羽柴秀吉が英賀城主三木通秋を攻むるとき、寺僧秀吉に好意を表しければ平定の後厚く寺領を興へけりとは、俗に湯澤山着連寺と戲稱するは、秀吉を見誤りて茶を出さで湯を進めし故事ありしに依るなと云ひ傳ふ、

因に記す、赤松滿祐、山城國岡田の加茂明神を飾磨郡に勧請し、社領として法輪寺山邊なる一町坪の田地を寄進せしことあり、其社地は今に岡田村と稱し、神田の地を町坪村と呼ぶ、この社かく岡田村にありしを、永享四年の大洪水に中搦の地内に遷し、かば、其地は今に加茂村と稱する由舊記に見ゆ、

第五章 巡 覽

姫路の名勝古蹟を巡覽せむと欲する外來の人士は、先づ姫路停車場に下車して適宜の旅館に投せよ、驛前には菊水館、城見樓、淺田屋、堀田屋などあり、それより御宮初橋を渡りて北に進み左折すれば入江樓あり、再び北

旅館のみと

に向へは宇多川樓あり、されど姫路最繁華の地を望まむ人は、進んで國道に出で西に向ひて福中町に行くを要す、福中町には友惠、花屋、紺庄、金五、赤松などいへる佳良なる旅館多かり、この赤松樓は舊藩時代の豪富高原彌太郎の邸宅なりしにて、結構頗る至れりとの評あり、

姫路驛より福中町までは路程八丁にして人力車賃金五錢なり、宿泊料は何れの旅館も一泊中等金六拾錢内外にして、別に茶料を置くも置かざるとは人々の隨意たるべし、

全市が最も賑ふは毎年十一月十五日の惣社の例祭、及び兵庫全縣下より執行する薬師山の招魂祭なり、其外春秋二回の船場本徳寺の彼岸會、姫路神社、長壁神社の例祭、景福寺の地藏祭、男山の大師講、七月廿四日の阪田町西福寺の庚辛祭などのあれど、そは一時に併せ観るべきにあらねば、今は先づ市内の勝蹟を巡遊せむとす、

第一日の巡覽



惣社能樂の圖

長壁神社と惣社

先づ福中町より東に進めば姫路郵便電信局に衝き當るべし、これより左折東行すれば左手にあるは長壁神社にして、社西を経て神橋を渡れば所謂惣社境内なり、其大なる石華表は城主松平忠次の寄進せし所なり華表を過ぎて西手は第十師團長伏見宮殿下の御住館にして、本町六十八番地に當り舊借行社なり、其東手には案内社と招魂社とあり、招魂社は兒島長龍及び維新前勳王



鬼石と懸掛石

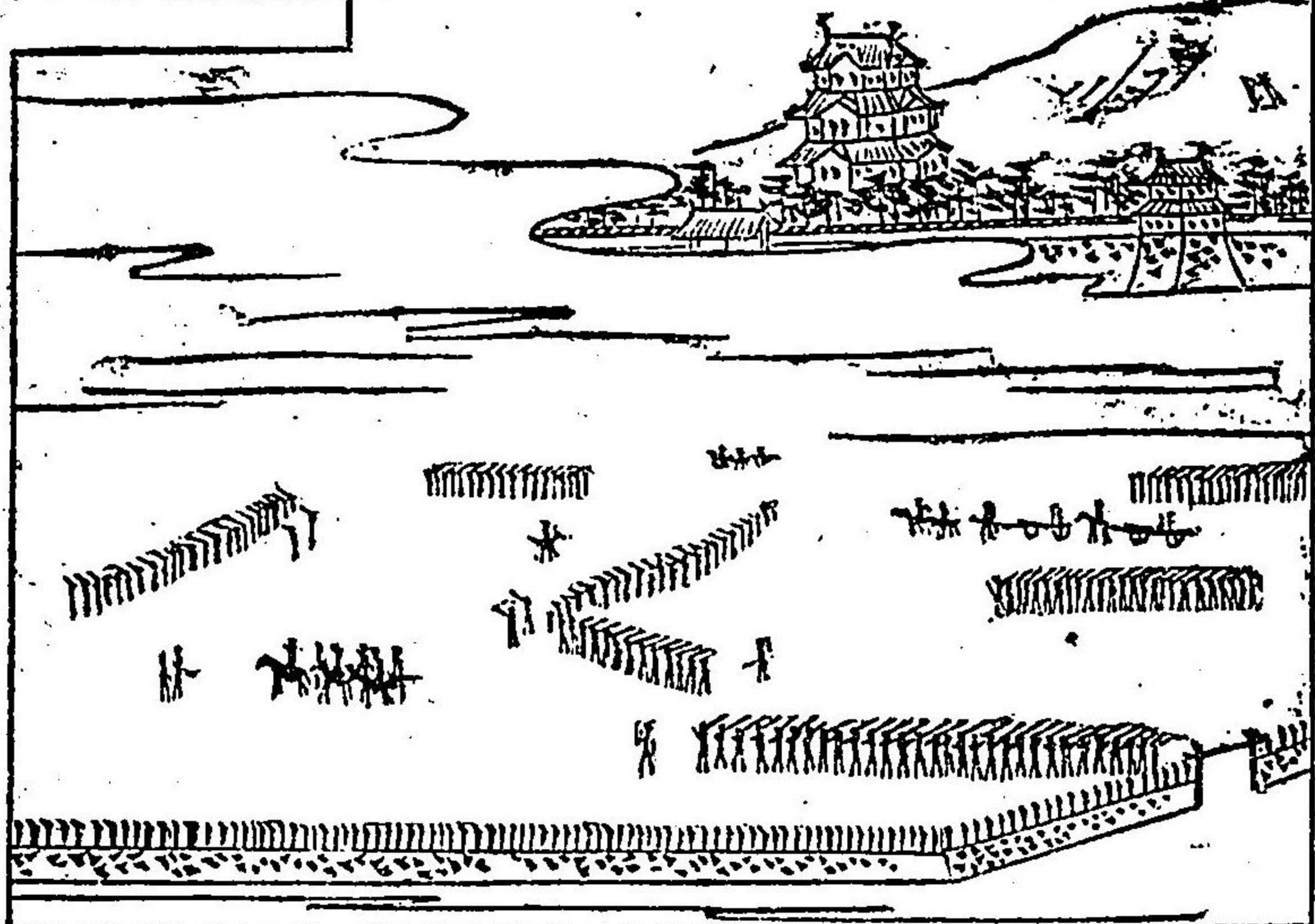
の爲りに死を賜はりし河合惣兵衛宗元を始め、七人の忠魂を招祀せる社にて、近年孰れも贈位の御汰沙を蒙れり、北向正門を過ぐれば拜殿あり、宮本武藏奉納の額、吉備大臣圍棋の額、堀上腰刀の額など高し、殿の東手に所謂影向松の枯根あり、其東に雌雄同根の一大長松ありて、赤松政村寄附の大鐘を覆へり、其北手に一奇石あり鬼石といふ、この石は今年の春ころまでは惣社の西通を北に行ぐ三丁許小溝の西傍にありしにて、今より九百八年前、正暦元年播磨守平井保昌が大江山の鬼賊を退治せしとき、そが、亡魂化して石となりぬ、是れ其石なりなといひ傳ふ、又別名を聖徳太子の腰掛石といへり、

道祖社

惣社本殿の背後に播磨各郡の神々百六十八座を齋けり、又末社に角社といへるあり、國府寺家の祖先角野明國を祀れるにて、道祖社といへるは今川貞世の紀行に所謂飾磨道祖社を遷しなりとぞ、惣社の西内門を入重垣門といへるは、出雲地に向へるといふならむ歟、こ

血池より生松原

姫路練兵場の圖



の門を出て、境内の西南隅にある一小池は所謂血池なり、それより西外門を出づれば西北三四丁の位置に五層の大城を望み得む、所謂名古屋城熊本城と共に日本三大城の一に數へらる、姫路城にて、南面大手なる桐門は今は第十聯隊の營門となれり、この城は南に背き北に面せるにて、其美観は北部より望むを得へし、蓋し中古までの國道は城の北にありしを以てなり、この邊

鶴ヶ淵と笛吹岳

より北五六丁の間即ち城の東面は古の岐阜町にして古松多く、所謂生松原とて往昔神託ありて一夜の中に數百株の松生ひ出でしと云ひ、傳ふる所なり、正徳元年四月八日大江山の賊平定の兆ありて水色青變せしむる藍染川もこの邊なりしならむ、又彼の永享五年七月二日勅使南大納言藤原基隆が震災にかゝりし國分寺其外の諸堂を再興せしめむが爲めに御下向ありしとき、一鶴ありてこの松原に降りぬ、其地後に淵となりければ鶴ヶ淵と呼びぬ、又勅使が笛を弄はれしめてふ笛吹岡もこの邊なりとか、其北なる今の射的場の中は古の所謂柳本又小野江の地にして、惣社の故跡なるが、其西手に小野江の清水といへるがありて、播磨十水の一なりしも、是は池田輝政時代より出でずなりぬ、基隆の歌に「稀に來て老延の水を汲みて知る再び老も若くなるらむ、とあり、それより小野江を老延とも雅稱す、梅鉢松といへるは鳥羽天皇の永久三年今より七百八五月に小野江なる惣社境内に植ゑたる有名なる松の由なれど、今は其名のみ舊記に残れり、赤松政

老延の清水

梅鉢の松

往古の廣野の里と五郎右衛門屋敷

則の歌に「枝ふりの南の長枝北長枝みしかくなくは梅鉢の松、とあり、小野江の故地を過ぎ、野里門を出で、生野街道を行けば、往古の廣野の里の地にして、今野里といふは其縮稱なり、鑄物師多し、古來有名なる播磨鍋はこの地より出づるなり、この邊は豊太閤の忌願厚かりし姫路の故家芥田五郎右衛門の住めりし地にて、今に其屋敷跡を五郎右衛門邸と稱し一ヶの町名となり残り、其子孫は今も野里にありて圍棋の名手なるが、家には古記類頗る多く、特に秀吉より天正十八年正月日に、全國への標準として附與されたる新製量器は淺野長政、増田長盛などの花押烙印もありて、頗る珍らしき品なりとす、北行して市端に出づれば、右手は遊廓梅ヶ坪にして、明治十年の頃年限を定め官許を得てこの地に創めしなるが、來む春には城南の延末村に移さむ筈なりとぞ、其北手に山王社あり、左手に明珍宗之とて名高き鍛冶師あり、是より北に進めば白國村を経て増位山、廣峰山に至るへけれど、そは明日

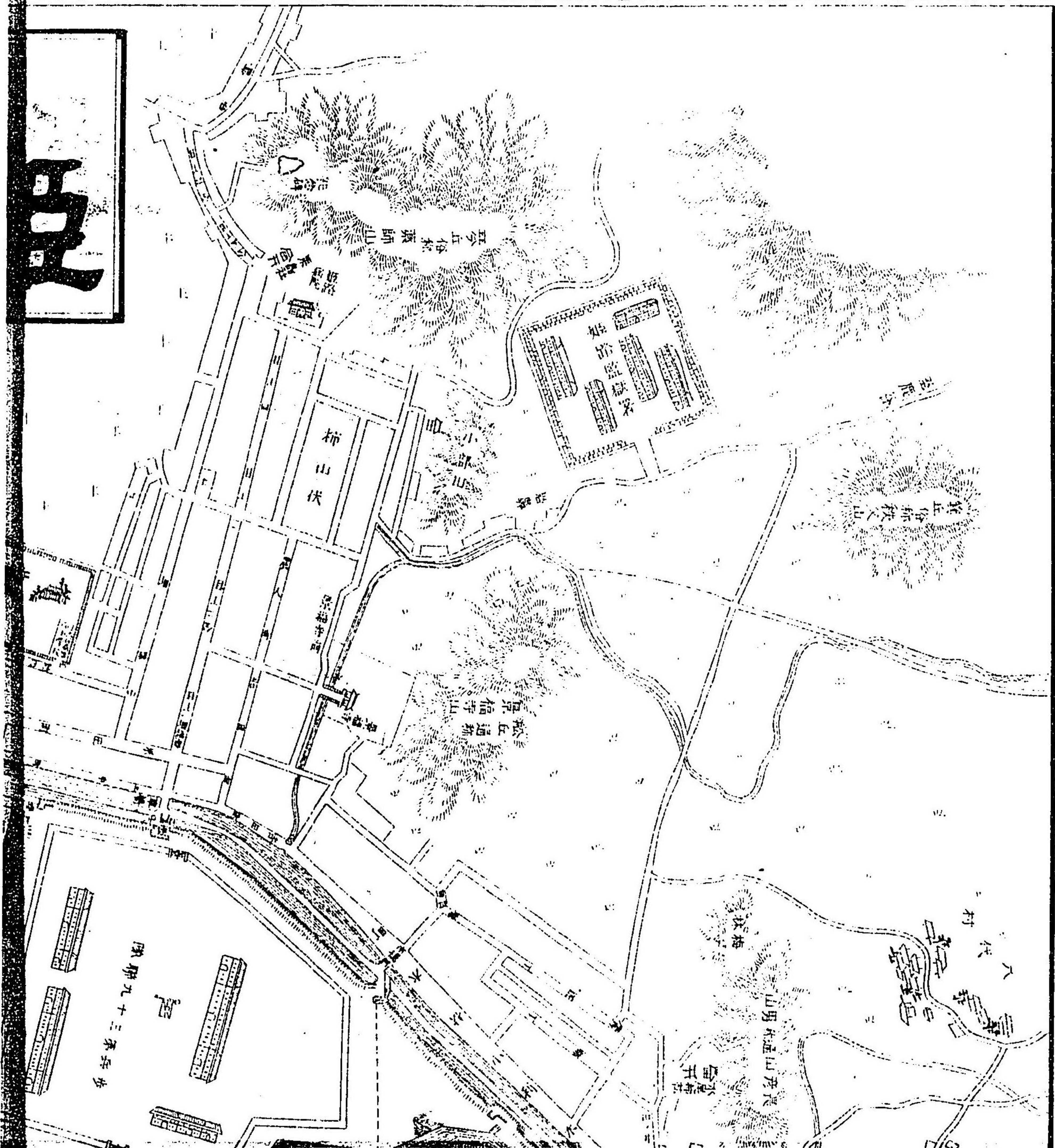
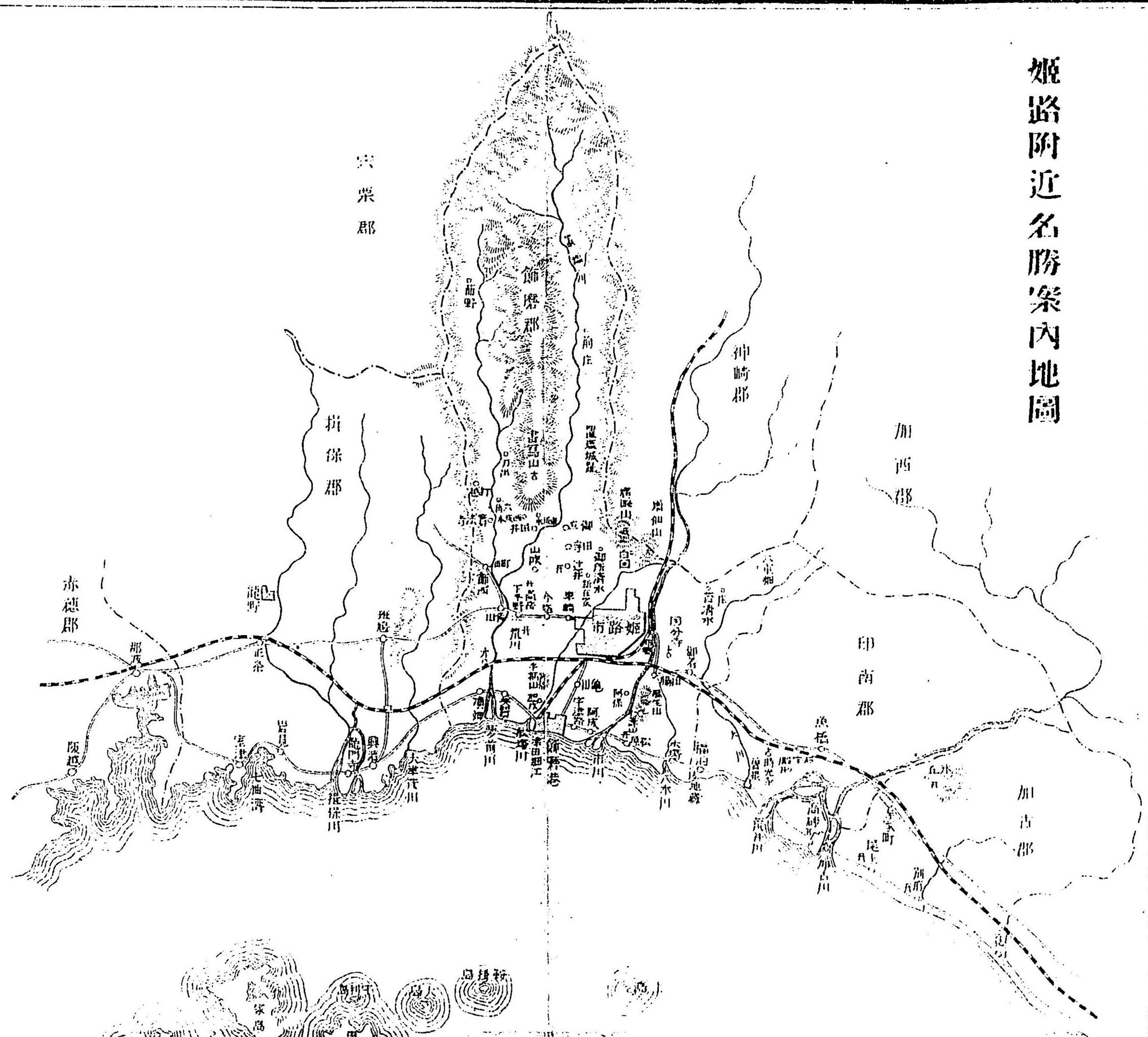
春山翁と其國書館

に譲りて、少しくもと來し路に返り、西に折るれば坊主町なり、池田輝政時代に城内に仕へし茶坊主の住りし地なりとかいふ、蓋し鷹師の住りしより鷹匠町といひ、小姓の住りしより小姓町といへるに同しからむ、坊主町の西部に姫路有名の博識家春山弟彦翁の居あり、翁深く意を教育の道に注ぎ、近年宅地内に圖書館を設け、數萬卷の藏書を陳列して志學者に縦覽せしむ、庭園亦清酒にして翁の志操に彷彿し、嘗に姫路の名士として敬すべきのみならず、また天下の篤志家なりけり、翁は天保二年三月十一日江戸、栗嶋の姫路藩邸に生る。砲術、蘭學、國學、天學、數學、曆學、經濟の如きを其遺業を稱む、其歸古稀を過ぎて偷隱録として日夕手に卷入稱かれざるよし、葵むへきのな、翁の邸より南行西折すれば所謂白川神社に至るへく、それより船場川なる白川橋を渡れば姫路紡績會社あり、其二丁南は所謂男山にして船場川を隔て、姫路城と相對す、近年この山の東腹に、四國八十八ヶ所の地藏尊を安置し、七月廿四日の緣日には詣づるもの多しとぞ。

男山八景と魁春園

この男山神社は城主榊原政邦の祟敬深かりし所にて、公は男山八景なるも

姫路附近名勝案内地圖



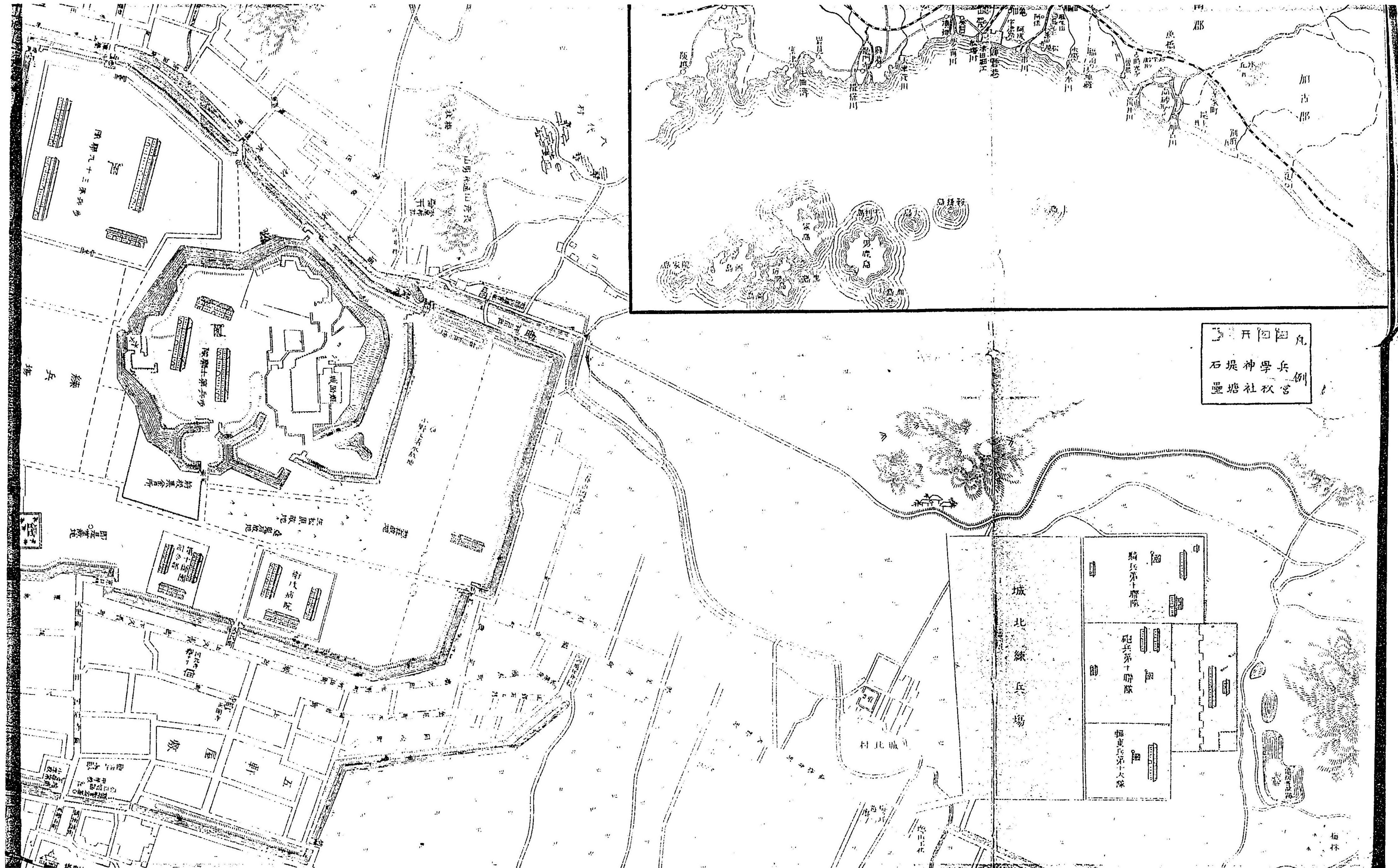
姫

名所古蹟案内  
姫路圖地細



赤穂郡

山崎山



凡例  
石堤神學兵  
壘塘社秋宮

城北練兵場

騎兵第十聯隊

砲兵第十聯隊

榴砲兵第十大隊

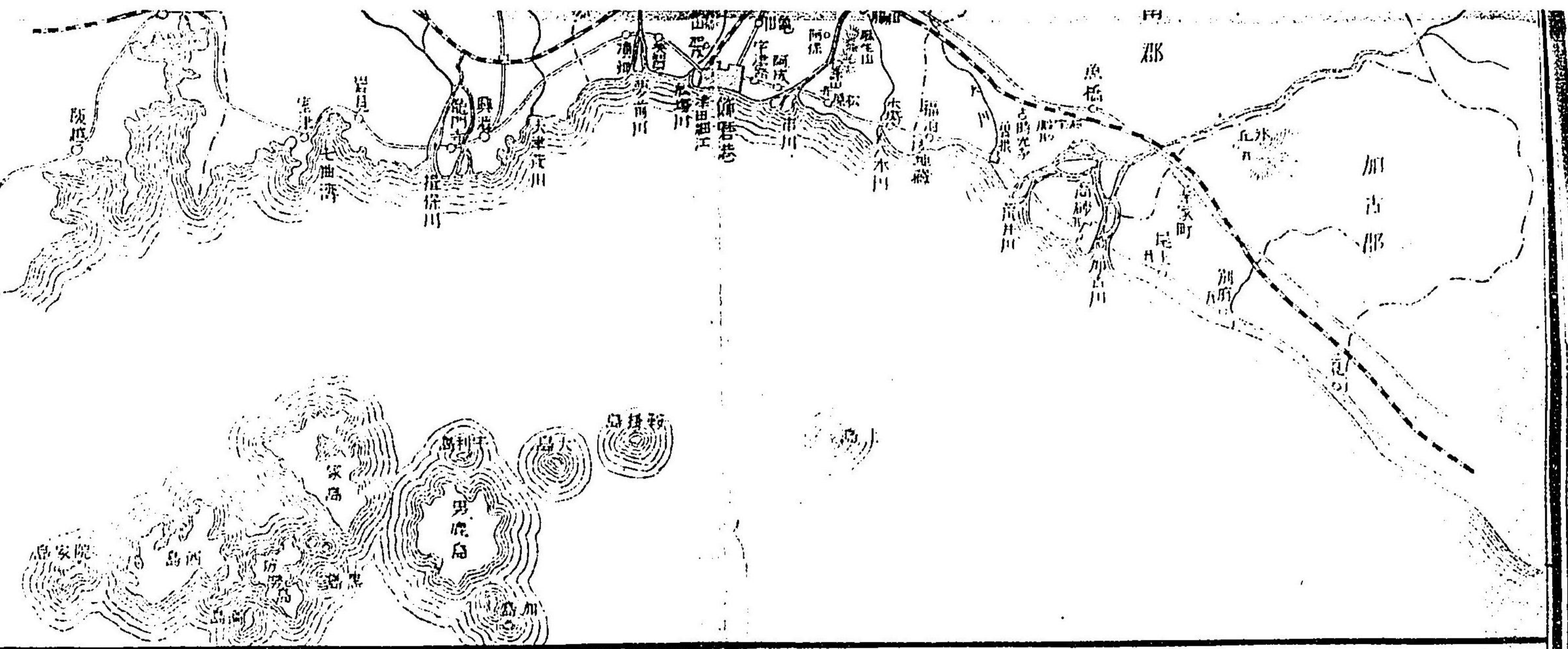
村北城

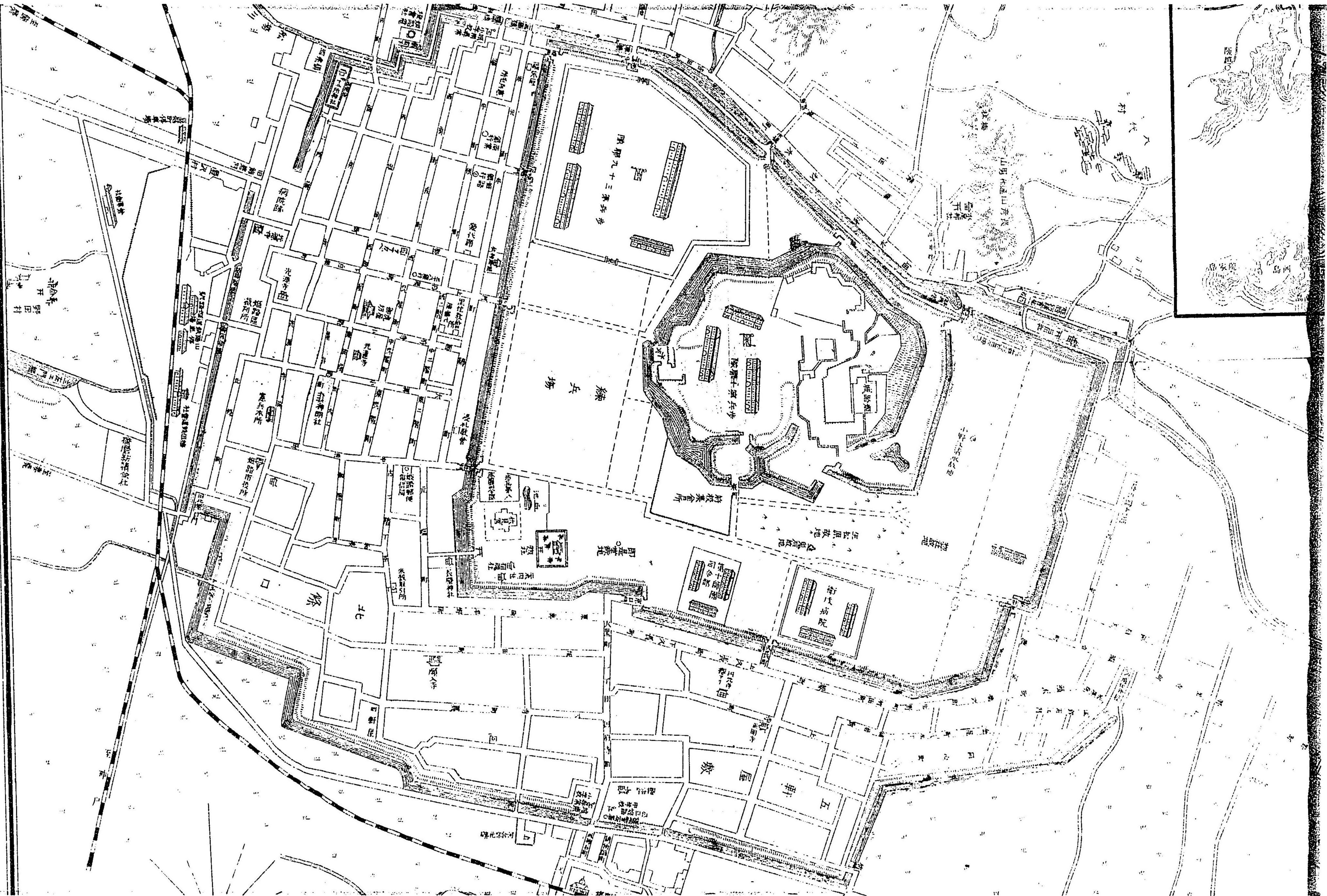
練兵場

城頭

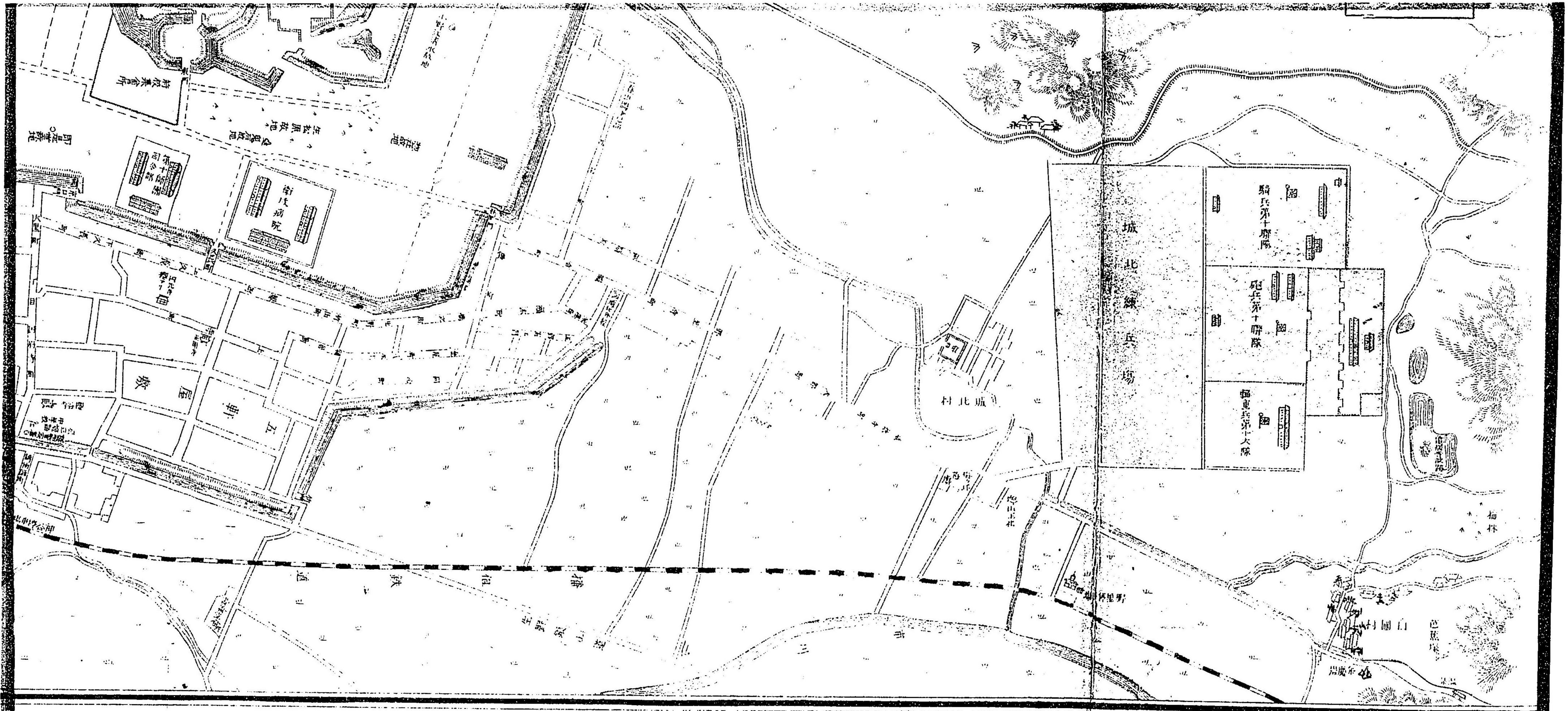
衛隊

五軒





明治三十三年二月廿五日印刷 著作兼発行者兵庫縣姫路市福中町二十二番屋敷  
明治三十三年三月五日發行 印刷 著大阪市南區饒谷東町百七十五番邸



村長事務所

生松原墓地

衛生病院

倉庫

倉庫

城北城

城北練兵場

騎兵第十聯隊

砲兵第十聯隊

砲兵第十六大隊

衛生局

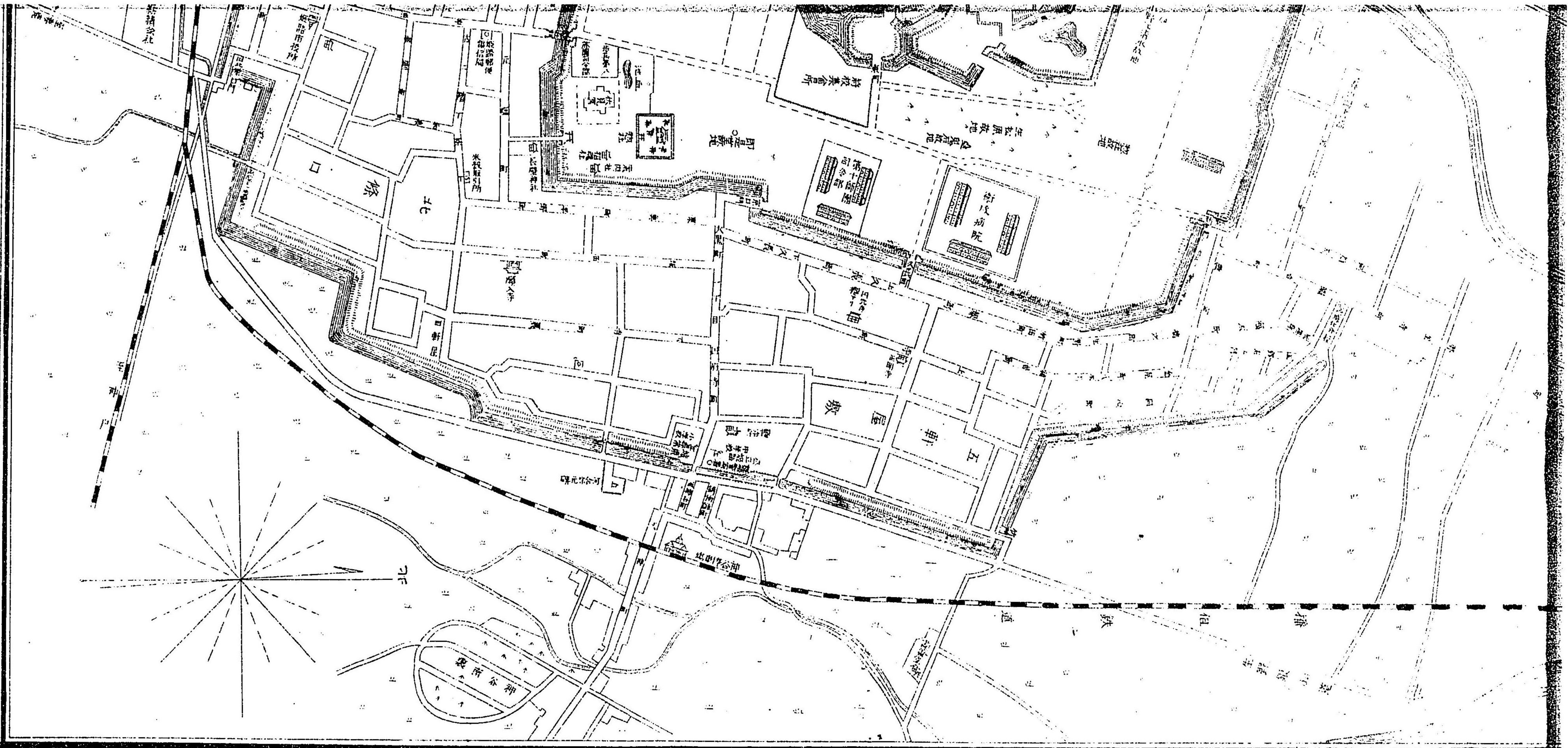
梅林

白土園

芭蕉塚

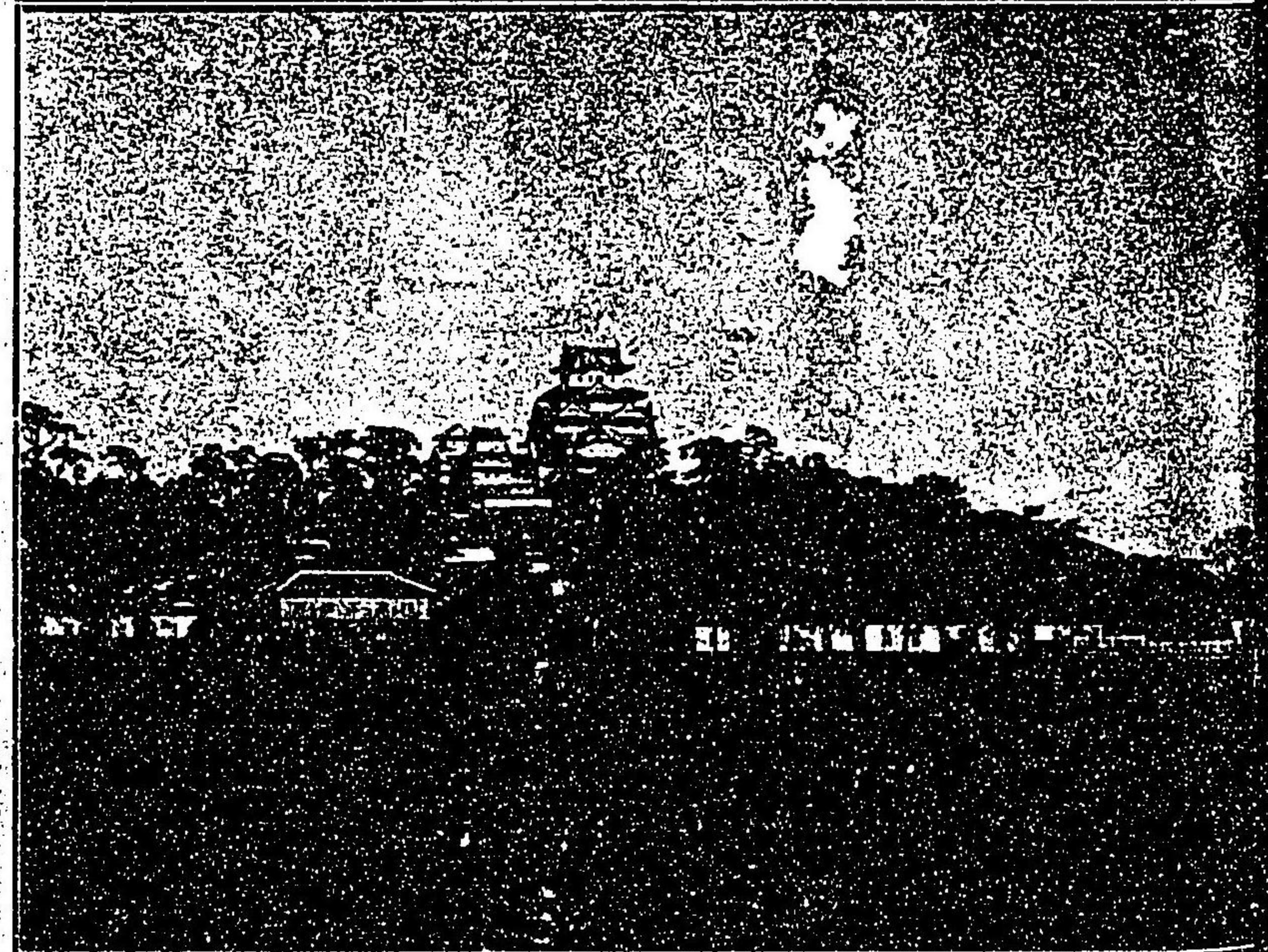
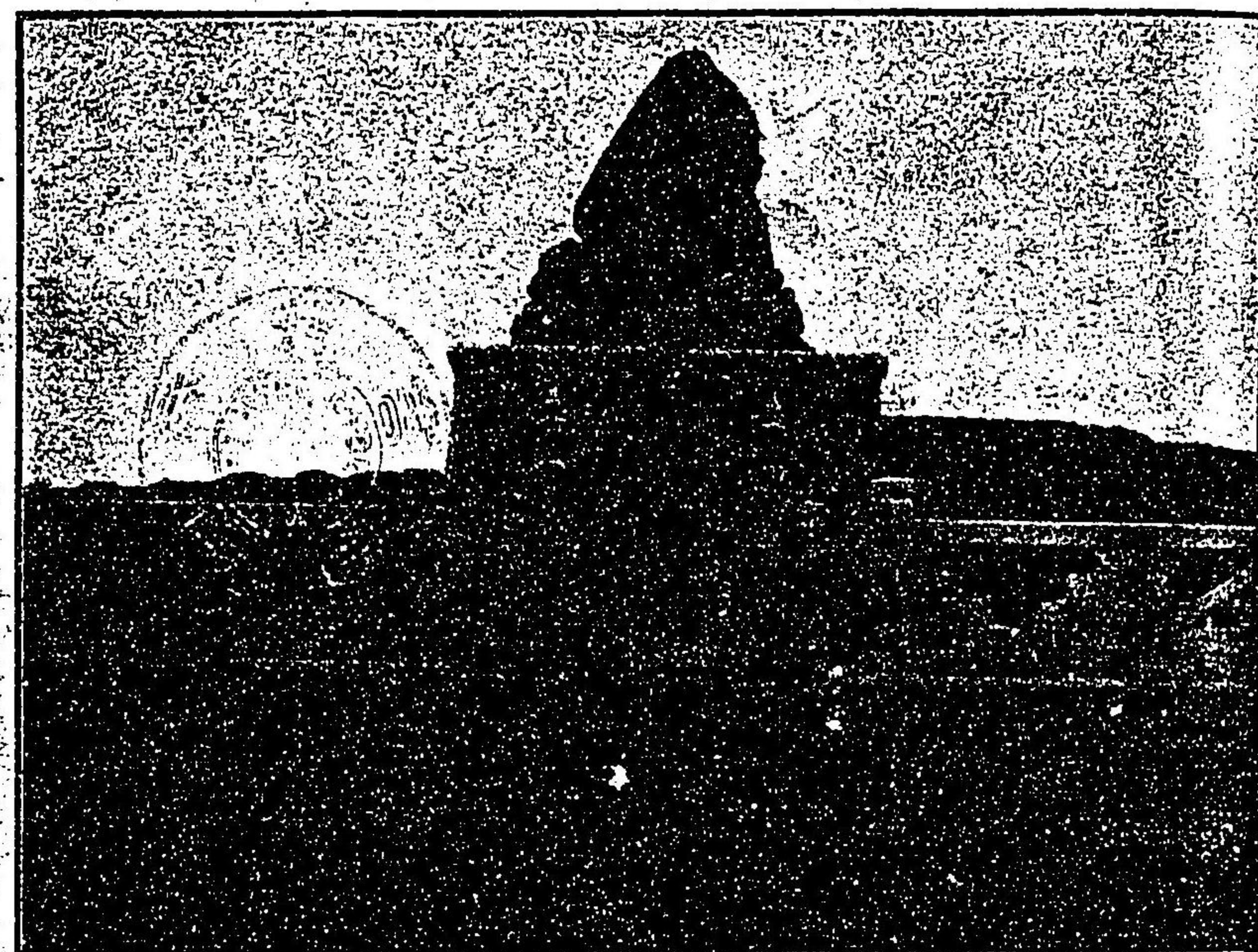
岩廣



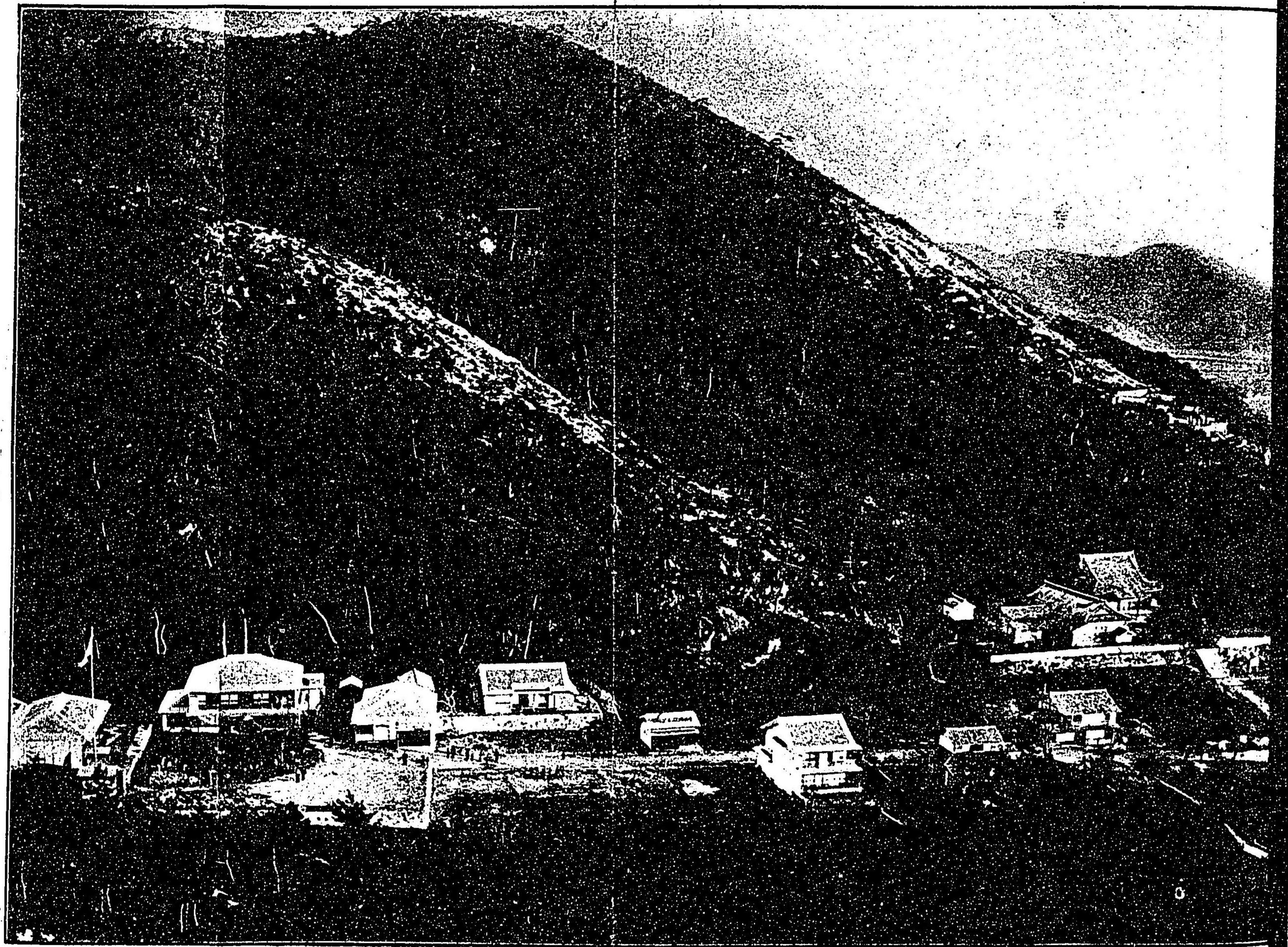


二月廿五日印刷 著作兼発行者 兵庫縣姫路市福中町二十二番屋敷 矢内正夫  
 三月五日発行 印刷 者 大阪市南區鯉谷東町百七十五番邸 前田菊松

藥師山紀念碑

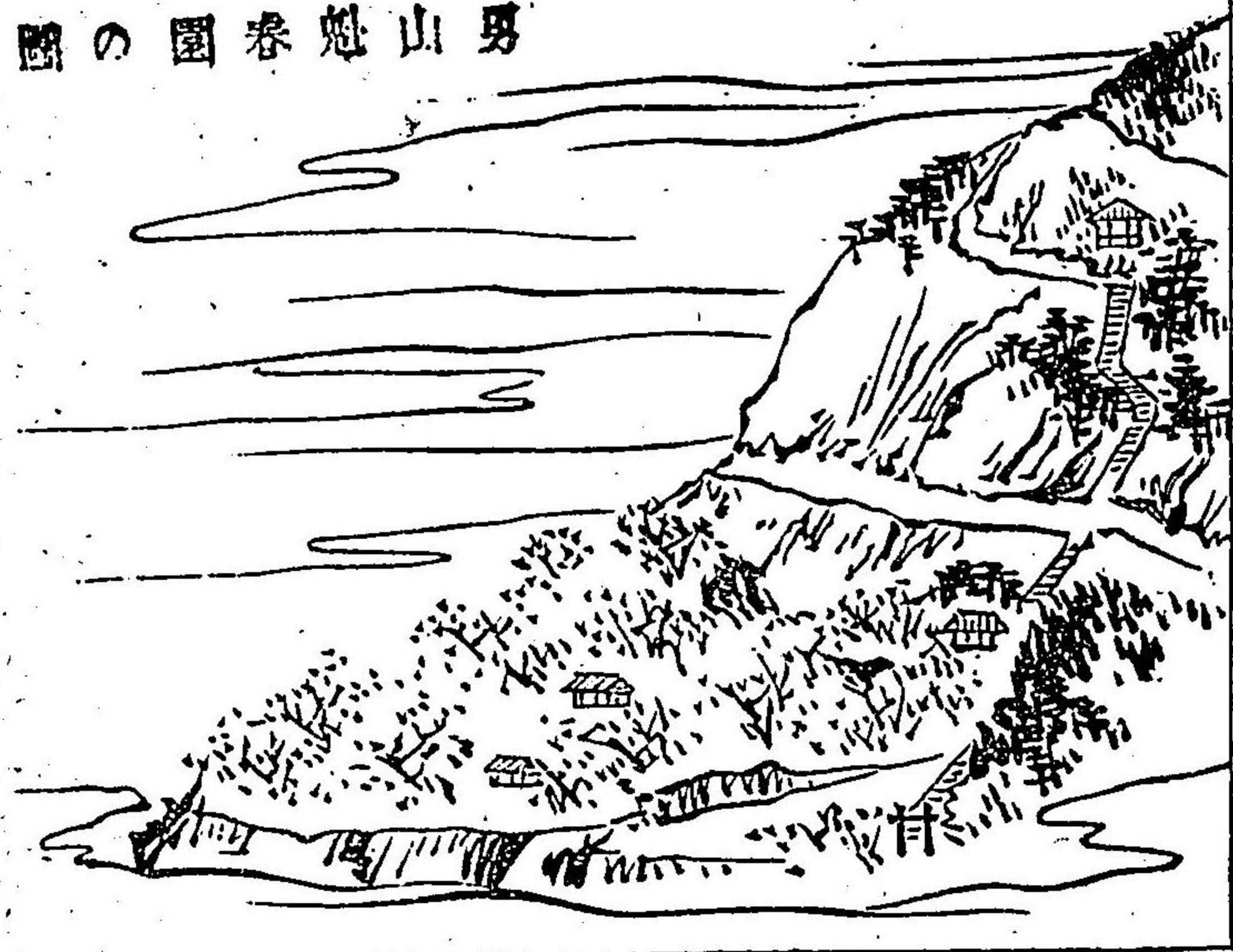


姫路城全景



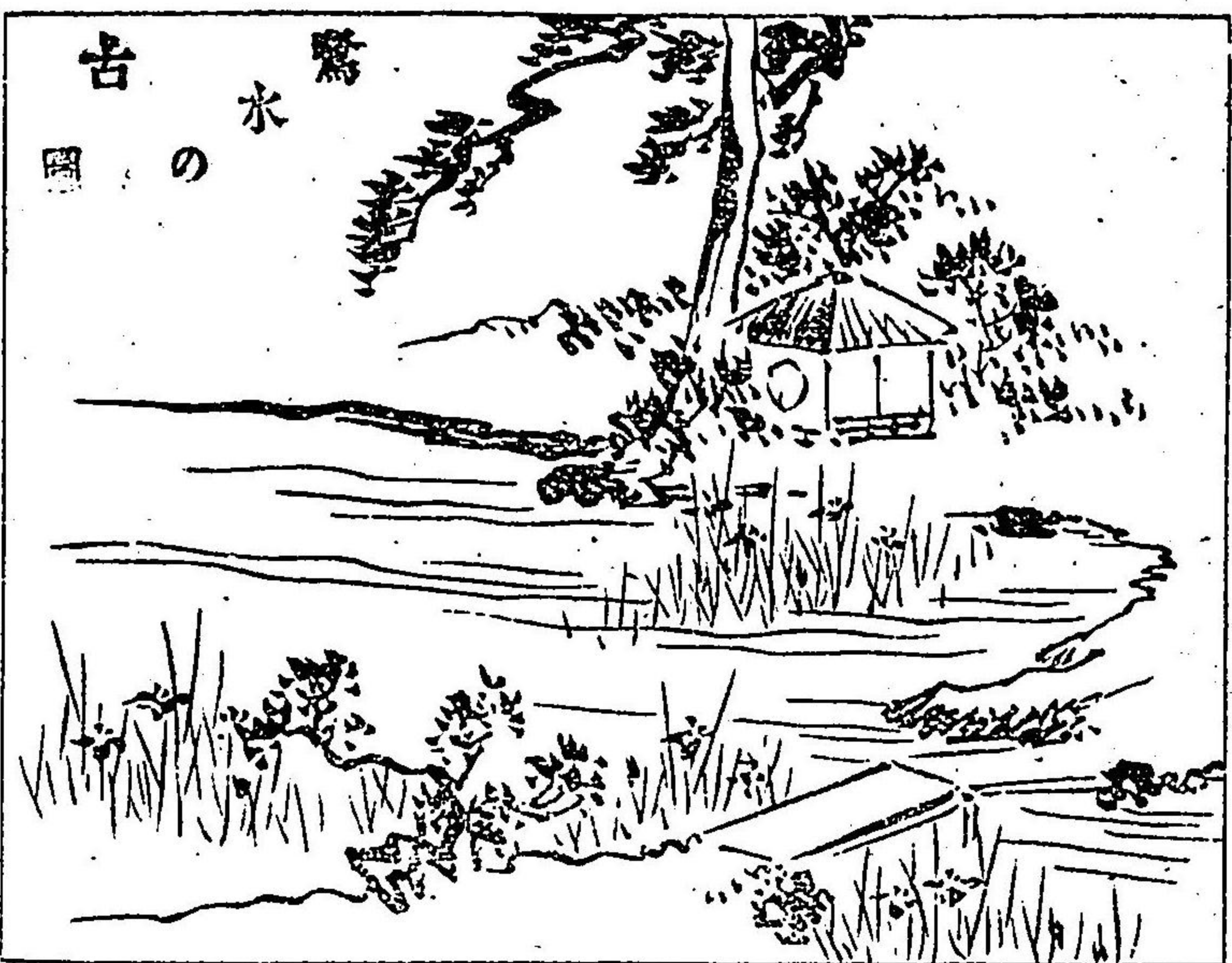
增位温泉之景

關の園春魁山男



のを撰定してけり、曰く雄徳  
の青松、曰く城山の朝暉、曰く  
前村の桃花、曰く廣野の宿麥  
曰く細川の秋月、曰く遠里の  
曙雪、曰く蒼海の孤帆、曰く  
社頭の舞鶴、風雅の詩趣面白  
し、山の南麓に連丘あり、公  
の別荘のわりし所にて、位置  
頗る趣あり、明治二十二年  
の交一市人あり、梅樹千株を  
植ゑて魁春園となし、以て公  
の遺蹟を保てり、  
梅林を降りて東に出づれば、

鷺の水と雅談



船場川の東岸に良泉ありて出づ、是れ維新前の清水町、清水門の舊池にして、其泉を鷺の水と稱す、播磨守置塩城主赤松義祐の歌に「鷺の水古ならば五位の鳥いかに田舎に住を果つべき」といへるは已が不遇に親べて詠めるなるべし、この義祐は叛臣浦上景宗に所領を奪はれて、快々の中に世を終りし人なり、この鷺の水につきて面白き話あり、或とき京都の商人城主

本多甲斐守政朝公の便殿にて夜關るまで打くつるまで話しけるに、頓て頭は茶の湯のことに移りけり、彼の商人をすやう「茶の風味こそは水に因り候へ、我都には柳の水あるは宇治の槇島の水などの候へば、他國の茶味など逆も話になり申さすと申してければ、公は笑ひて「否とよ汝は都の故しか思ひつらむが、我姫路にも鷺の水とて名水のあるなれ、今まをす柳の水には劣るまじと仰せられければ「天の下廣けれと柳の水に並ぶ水のいかで候へきと、我田に水のそれならで、互の争ひいつ果つべしとも思はれざりけり、「さらば汝の逗留の間に柳の水を汲みつかはし、鷺の水のよしあしをくらへ見むと仰せければ、商人「それは御無理といふものなり、三日四日かゝりて運べる間に、水の性の變り侍らむものをも申せば、公はせむすべありとて、同じ樽四ツつくらせて、二人の力者を都に上げせ、十五日の早天といふに柳の水を汲みて、夜を日に繼ぎて歸り來らせ、又二人の力者に仰せて、同じ日の同じ時刻に鷺の水を汲みて、急ぎ都の方として

梅雨の松

上げせ、頓て出會ひし所より、連れ立ち歸るを待ち、彼の商人を招きて是こそ同一働きせし水なれとて、其場にて茶を煮けるに、いづれの香味も同じくて、更に劣り優りのなかりしに引替ひ、試しなればと他水を汲み来て煮たるは、風味いと劣りて飲まれざりしとぞ、さることのまことありしにや、はた作り話にや、兎も角も名水なりしには相違なし、其より少し南手に梅雨の松といひて、梅雨中紅葉する名高き松がありし由にて、今より二百八十年前、元和三年の頃さる人の植ゑしなるが、六七十年ありて枯れしとなり、

景福寺より彌師山の記念碑

この邊の西手の山は播磨風土記に所謂船丘にして、南麓に景福寺あり、境内別に見るべきなけれど、其庭園は禪家の特有として風致清し、寺門を出て、西行二三丁にして風土記に所謂琴丘あり、今は藥師山と稱せり、山巔に御岩の祠ありて岩を祀れり、虛弱家、神經家が毎朝上下して岩に祈れば運動の「エチルギー」は變じて岩の靈験となり、宿病も不思議に平癒する

船場御坊のこと

は敢て不思議にあらざらむ、其南に一大記念碑あり、明治十二年六月の起工にして十年西南役の戦死者を招魂せるなり、其築額は故大勳位有栖川宮殿下の書にして、勁節嚴風と題せり、この邊遠く南海に對して、島嶼舟船一々指點すべく風景絶佳なり、是實に姫路人士が春秋の行樂地にして、唯樹木に乏しく、保護に薄きは一大缺點なり、南麓に藥師堂あり、山名の因縁にして、一時は城主本多政朝の弟政勝の夫人が甚く信仰せし程の歴史ある靈堂なりとぞ、東腹に工學士木村正一郎の碑あり、碑誌に見れば甚だ敏腕家なりしが如し、壽を得ざりしは惜むべきなり、山を下れば舊飾磨縣廳の南に出づ、この廳舎は明治八年權令森岡昌純の建てしにて、功竣ると共に廢廳となりしは、我姫路市の一大不幸なりと、今は飾磨郡役所本年中に館りて郡役所は他を其内に置かるに轉ずる筈なり

此所より東行新道を過ぎて南折すれば、所謂船場御坊なる本徳寺にして、境内頗る廣く、龜居松とて名松あり、この寺地は今より二百八十年前なる

藥師山より南眺望の圖



元和三年に、城主本多忠政が本願寺の東派を再興せしめむが爲めに賜はりしものにて、同寺は今に大乾院殿てふ公の位碑の供養に怠りなしとぞ、明治十八年八月八日、天皇陛下この寺に御留蹕あり、明治三十一年十一月廿四日第十師團長伏見宮貞愛親王殿下御來任ありて、二十九日この寺に赴かせ給ひ、陛下御留蹕の御室に入らせらる、其結構は十二月上旬中一般に拜觀を許

せりとぞ、寺門を出で、東行すれば直に福中橋に至るべし、其西詰を南下すれば東手に姫路電燈會社あり、明治三十一年三月一日より開業せり、同社の東手なる新西橋を渡りて右折すれば、所謂十二所神社にして、境内別に阿菊の祠あり、詣づるもの皿を納めて祈願す、この阿菊の話は好事者の作説にして採るに足らねど、今試に其顛末を述べて行客の一粟に供へむとす、

爰に姫路皿屋敷といへる一部十三卷の小説あり、誰の作なるかを知らずと雖ども、其記事は應仁二年に赤松政則が姫路城主となり、天明元年に置邊城に移りて、姫路城を小寺豊職に譲りしに起りて、寛保二年松平義知が白川より姫路に入府ありしに終れるが、重なる話は皿屋敷のことにて、説く所願る詳なり、

抑置邊城に浦上村宗の謀叛ありしことは隠れなき事實なるが、皿屋敷作者はこの事に附會して、同じ頃に姫路城にも青山鐵山といへる逆臣ありて、

浦上の徒と相約して事を巧みしが如くに脱けり、今を摘み記さむに、こゝに赤松政則が姫路城を小寺豊職に與へしは別所、浦上、衣笠、得平、間島などいへる族の不平の種となり、機もあらば取りて代らむの念、この不平の徒の間にありき、さるに豊職の執權に青山修理亮時元入道鐵山といへる奸臣あり、三千石を領して威權頗る強く、青山村に一城を構へて長子時秀に守らせ、自分は野里の邸に住みけり、次男時國も父に劣らぬ奸物にて隣崎新吾、白國源藏、町坪彈四郎、同彈九郎、南條兵庫、平福兵内などいへる悪徒に語らひて、主君を亡きものにせむと密々に相謀りぬ、然るに永正元年二月豊職歿して長子則職立つ、僅か十八歳なりき、逆徒は時の到れるを喜び、二年三月廿八日増位山に觀花の宴を催し、其席にて則職を害せむとす、乃ち一味徒黨を青山城に召きて其手筈を定めけり、この時鐵山は已赤小寺氏の下に賜るをばしめ鐵山の三男に小五郎といふありけり、この時年十七既びるよと風文に見ゆは鐵山の三男に小五郎といふありけり、この時年十七にて古今に稀なる美少年なりしが、もとより則職の妹白妙姫に通してあり、

こゝに彼の奸臣らが逆意のはを聞きて甚く打驚き、赤松滿祐の例を引き、て其父を諫めければ、鐵山は大に怒りてそを脱倒し、其まゝ連れ歸りて倉中に幽してけり、爰に又小寺家の忠臣に衣笠元忠といへるあり、其弟なる鞍負介元信は文武に長けたる者なるが、其頃阪越港に出雲の尼子勝久の臣寺本障子介といふもの、浪人して住み、三人の美女を持てり、妹二人は室津にて花鳥花月と呼べる遊女となり、姉の阿菊は媒介するものありて、元信の妾とはなりけり、この元信は豫て鐵山の舉動を怪しと思ひ、阿菊が未だ人に知られざるを幸にして、鐵山が家の婢に遣はし、以てそを疑はしめき、阿菊今は婢となりて深くかの小五郎が味氣なき幽閉の身の上を憐れみ、陰に陽にかばひてければ、小五郎は其情をうれしみて、己が父兄の悪事を打明けて、そを姫と主君とに告げしむ、さればよと阿菊は急ぎ良人にこの趣を報らせければ、元信はすぐ參殿して小五郎が忠實のこと、阿菊が通報の次第とを述べて、さて花房兵衛常秀、松原掃部助などの諸重臣



と評定しけるに、則職は事の廣く世に漏れなむことを愛ひ、そを知らぬまねして、彼の奸臣等に誘はるゝまゝに増位山に赴き、機に臨みて處置せむとす、既にして彌生の廿八日とはなりて、山は庶人の登ることを禁め、誓固みさく嚴重なり、時刻は來れり、數多の國老は主君を守護して登山あり、別當坊が宴席なりけり、峰に谷に見わたす限りの櫻花は、今を盛りと咲き揃ひて、逆臣の毒計も爲めに鈍りなむ心地す、飛觥の獻酬は最早酩酊となれり、鳩毒今や主君の唇を沾さむとする時しも、事危しと見るまゝ、つと席に駆け出てしは元信なり、逆賊思ひ知れよと大喝して切てかゝる、家島なる飯盛山の城主苦瓜助五郎元通の子、五郎治通は大勇の士なり、先きに奸臣の毒計にて、國老常秀を壓殺せむ爲め天上より墜し、巨石が、傍にありけるを取り揚ぐるよと見る間に、鐵山の妻なるものに投げつければ、時ならぬ紅葉は四隣に散りて、五妹は微塵に碎けてけり、一味の逆徒はこのさまに呆然たりしが、頓て口々に罵り騒ぎて逃げ去りける、されど此事

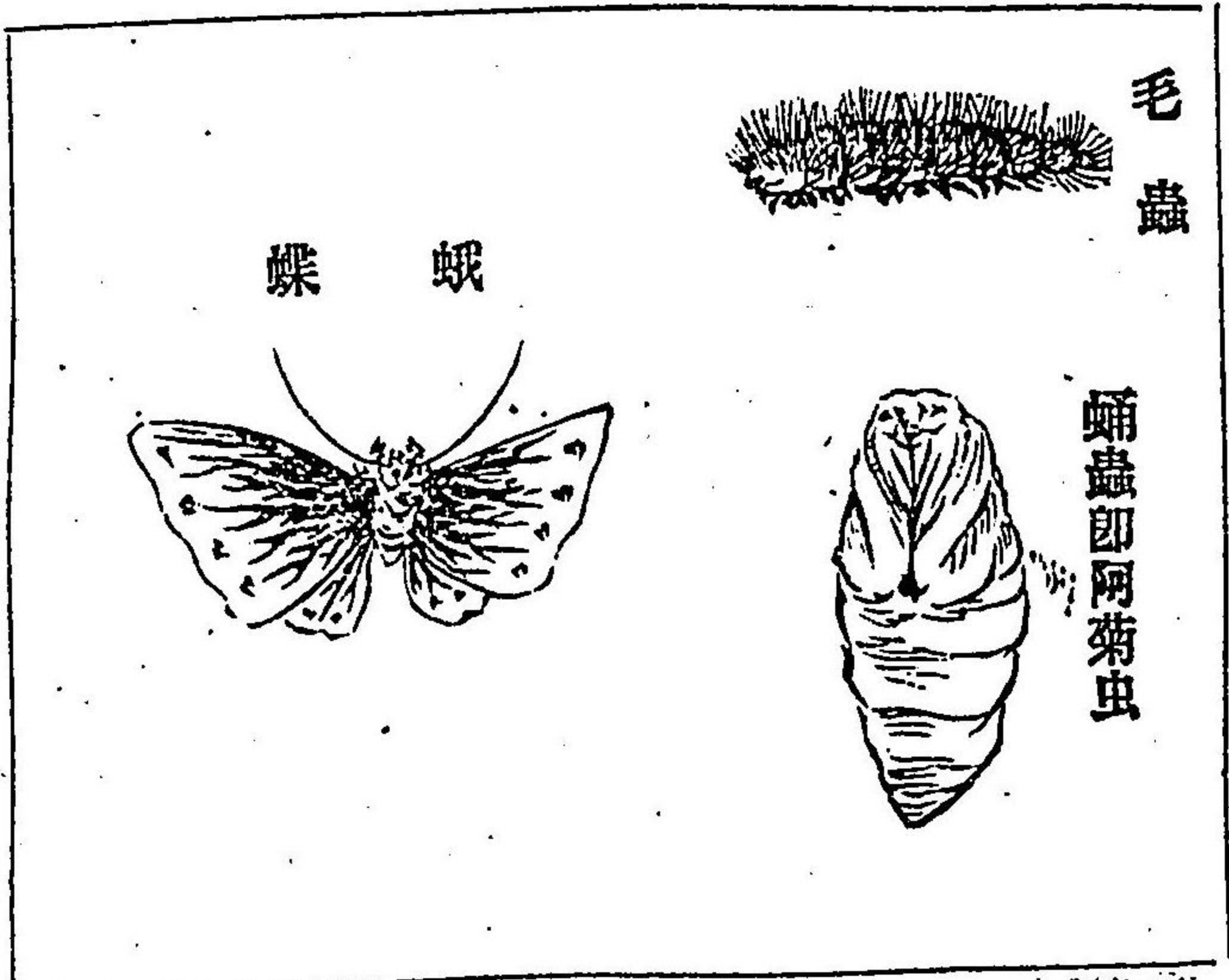
のかねて置搦城の浦上村宗を始先、各地の領主と謀し合し、ことなれば、則職を嫉める族は此日何れも大兵を率ゐて、姫路城に來り攻めしより、則職は治通を待みて家島に逃れ、白妙姫は小五郎等數人に救はれて、大阪生玉庄なる本願寺の證如上人に頼りさ、されば鐵山は姫路城を我まゝに押領して、遂には村宗に加勢し、置搦城主赤松政村をば室津に幽し、二逆ともく、非理の榮華を食りけり、其後鐵山は密計を漏し、小五郎を逃し、も皆阿菊が所爲なりしと聞き、甚く怒りて彈四郎にそを殺さしめむとす、さるに彼れ彈四郎は日頃より想を阿菊に運ばせてければ、そを殺さむ心なくて其まゝに過しけり、或とき鐵山は一味の者を呼び寄せ、索繩の懸なして、主家の重寶なる十枚の具足皿を我物顔に用ゐてけるが、事すみて阿菊に拭はしめさ、この皿は中毒のもの、そを舐れば毒氣忽ち消ゆと云ひ傳ふる希代の珍品なり、彈四郎阿菊が居らぬ間に、其一枚を抜き匿しければ、阿菊は驚き騒ぎて泣き索むれども終に出でざりさ、鐵山は豫て阿菊を懸め

る折柄なれば、今は憤怒に堪へて一攫に裂き殺さむつ勢なれば、彈四郎は傍より宥め賺して、車屋敷とて城の西なる己が住家に連れ歸り、それよりは毎日晝夜三回の阿責にかけて、我意に従はしめむとすれども許かず。この車屋敷といふは、赤松貞範が築城のとき、木石の類を大八車に積み運ひ、その車は此所に置かれけるより名づけられしなりとぞ、彈四郎も今は阿菊の強情を憎みて、庭なる松の木に縛りあけて、笞つ事斷ぬまなかりしより、可憐なる阿菊は遂に盡さぬ怨を松に留めて死してければ、亡骸は頓て庭の深井に棄てられける、彼の名高き梅雨松は阿菊の縛られける松なりとぞ、斯りしより後、其屋敷には夜なくに怪しきもの現はれて皿を數ふる聲す、鐵山一味の悪徒はこれより漸く衰運に向ひけるが、元信は龍野城主赤村政秀に頼り、常秀は室津の赤松政村方にあり、遊女花鳥花月の二人は、そが姉の殺されけるを聞きて甚く哭き悲しみ、常秀に仇うたむことを乞ひて止まず、それより常秀は逆徒の種々なる奸計に戒心しつゝ、廣峰

山に上りて別當秀成、神職小松原修理に回復を謀りけるに、衣笠兄弟を始め忠臣の面々一時に四方より馳せ集り、主君則職を家島に迎へて、姫路城を取り圍みしに、鐵山の鹽治通等の勇戦に敵せむすべなくて、青山城に逃げ退きける、この時白妙姫も恙なく大阪より歸城あり、尋て大兵青山城を圍みけるに、數日の合戦ありて悪徒は悉く滅びにける、この時に小五郎も人々の止むるを聽かて自刃しければ、そを聞ける白妙姫も亦あたら花の顔を黒染の衣に捨てられける、如何にして逃れけむ彼の彈四郎は、日を経て匿せる一枚の皿を奉して主君に謝罪し、歸參せむ願す、時に二人の妹は姉の仇、世にありと聞き、晴て復讐の許を受け、頓て首尾よく彈四郎を誅してけり、後に花鳥は元信に花月は常秀に嫁さて睦じく世を送りけるにて一部皿屋敷の談終れり、この談によれば、鐵山の輩二三を除く外の人物並に地理、年代ともに事實に近けれど、斯る出来事のなかりしことは明かなる次第にて、其作話なる

ことも、この談を讀む者の自ら悟り得むところなるが、唯阿菊の祠は現  
 に十二所境内にありて、年忌ごとに阿菊虫とて、彼の亡魂が虫となりて井  
 中より出づと云ひ傳へ、殊には去る寛政七年乙卯今より百餘年前には大にこの蟲を  
 持て難しはかことありと舊記に見ゆたり、人の亡魂が蟲になるなどは固より  
 あるまじきことにて、翅蟲しやうちゆう即ち蛾蝶がてつの類が春夏の際に樹枝又は土中に卵を  
 産み置き、それが夏秋の頃に孵化して蛄こ、野蠶やさ、芋虫いもむし、青虫あおむしとなり、これ  
 等が再三脱皮して冬春の中に蛹蟲まぶたむしといふものになり、春夏の交に至り再變  
 して完蟲くわんちゆうなる蛾蝶がてつとなる、所謂阿菊虫は蛹蟲時代のものをいへるなり、翅  
 となるべき部分が頭部より耳部に垂れ、且物にかかり居るために口より絲  
 を出せるなど、其狀如何にも怪しげなるより、種々の愚説を唱ふるものも  
 出て來しなれ、因に記す、赤村政則が其祖源祐の絶家を再興したるは異れ多くも南朝の遺裔  
 小寺入道性説せうせつなれば、秀王、忠義王を弑し奪りたる功勞によれるにて、うのなり赤松家にいと功あり  
 は先例と云ひながら是等の功にも因りたるなりむ、  
 五軒屋敷小幡九郎右衛門の邸に阿菊の墓あり、其石佛はよく諸願を叶ふ、

### 翅蟲の變化



其家には古來菊を作るを禁ず  
 と大臣譚筆に見ゆ、河合寸翁  
 も或人の問に答へて、血屋敷  
 なるものありといへりし舊記  
 もあれば、この傳説は識者の  
 間にも多少信せられしが如し  
 この事は江戸番町の出來事な  
 りしを、番町を播州と誤り傳  
 へたるなりとも云ふ如何にや  
 この十二所神社を出で、南行  
 西折すれば、忍町なる姫路俱  
 楽園に出つ、清遊雅談積日の  
 巻を拂はむとする人々は、就

姫路俱樂部より手  
柄山眺望

手柄山の圖



演劇場のこと

さて樓上檣下隨意の席を選び、この園は藩老本多氏の別荘たりし所にて、庭園の結構観るべきものあり、就きて遊ぶもの手辨當御隨意、席料御思召のことなり、この園、南数丁を隔て、手柄山の公園に對し、眼界廣闊眺瞻尤も好し、手柄山公園は市郡有志の者が、明治三十一年の春官許を得て設けたるにて、小亭三五人を招くの趣あり、俗人婦女子の悦ぶべき演劇場

は、阪元町の福榮座と、西二階町の七福座とにして、福榮座の如きは年中の大半は興行しつゝあり、又堅町に幾代席とて歌舞落語などを演ずる一席あり、因に即す、阪元町には往昔姫路丘に上下する阪下なりしよりの名なり、

第二日の巡覽

姫路市内の名勝古蹟は昨日の記事に盡きたれば、今日は市外の部に移るべし、

白國村と増位の温泉

早朝旅館を出て、野里を通ぎ北行すれば、一時間を要せずして所謂増位山下に届るべし、山下の白國村は往古新羅國人來り住めりしより其名起れりとのこと、風土記に見えたるが、一帯に高地にして空氣晴明なる上、風景も佳なるを以て、衛生には極めて宜しかるべし、太古より夙く開けたるも由縁あるなり、村内一面に梅林ありて老幹古株、枝を交へ、地に匂ひ、花時の観は近地其比なきより、來り遊ぶもの頗る多しといふ、山に両谿あり、東谿に入れば温泉橋、鐘鐺橋あり、二丁許にして増位温泉に達す、

この東路は聖徳太子が暫て行啓ありて、自像を巖に鐫り給ひしことありしより、太子谷と稱すと云ひ傳ふ、一名閻谷ともいふ、増位温泉は明治二十九年十月有志者伊賀保太郎、内藤利八の諸氏が發起して設立せし會社組織の温泉浴場にして、混堂、庭園とも手入れ行き届き、数棟の料店、旅館ありて客の需求に應せり、胃腸病、神経症、肋膜炎などに効能ありとぞ、

風籬堂と芭蕉翁

温泉の西南一丁許に増位橋といふあり、渡れば其右手は世に名高き風籬堂の舊蹟にして、太子谷の中央に當れり、この風籬堂は芭蕉翁の住りし京都東山の岡崎なる風籬坊を移せしものにて、中央に翁の木像を安置し、左右に惟然坊、千山坊の影像を掲げ、翁の遺物として茶色木箱縁の菅蓑、流引反古張の笠、三尺五寸の杖其外袈裟、行囊、硯面など納めありし由なり、

風籬堂のありし地の脇に翁の築塚なるものあり、俗に芭蕉塚と稱せり、樹



堂籬風の年前十八

樹の下に、平たき遺碑のみありと見ゆれど、荆楚に埋れて近寄り難し、今この事を述ぶる前に、翁の経歴を説かざるべからず、芭蕉翁姓は松尾名は宗房、正保元年今より二百五伊賀國上野の赤阪に生まる、平宗清の後胤にして、世々上野城主藤堂家に仕ふ、泊船堂、風籬坊、桃青、皆其別號なり、幼にして學を好み老莊の流を汲みて禪機に通し、深く僧西行の人と

なりを慕ひき、寛文二年翁年十九にして城主藤堂良晴に仕へ、良晴卒して良忠に奉事す、この良忠は性俳諧を好みて蟬吟と號し、北村季吟の門に遊ひけるが、翁も深く斯道に志し、主従相逐ひて花月の遊をなす、さるに翌年良忠世を早ふせしかば、翁は甚く之を悲しみ、自ら遺髪を奉じて高野山に納めしが、それよりは浮世の名利を厭ひて、再三暇を乞ひけれども許されず、乃ち一封の書に「雲とへだつ友かや雁の生わかれ、の句を遺して竊に京に上り、東山に住み泊船堂と稱せり、其後季吟に學ぶ七年、會々主君幕命にて江戸小石川の水道を修む、翁常に功なくして骸骨を乞ひしを念とせしかば、乃ち自から進めて其工を管理し、事成りて後、致仕薙髮して風蘿坊と號し、小石川水道橋の側に住す、時に年三十一なりき、後伊賀、難波を歴遊して再び江戸に住し、天々軒桃青又芭蕉翁と稱す、門人芭蕉翁を翁に贈れるものあり、之を庭前に栽てしより芭蕉翁の號を用ひしなりとぞ、翁は禪理を佛頂和尚に學び、書畫を雲竹許六の二人に就きて學ぶ、職高く

して飄逸なりければ、世譽りて之を慕へり、翁の俳諧は専ら正風牀を唱へ、門弟凡そ二千人に達せしが、就中其角、嵐雪、許六、去來、北枝、晉良、野坡、犬草、支考、越人を稱して燕門の十哲となす、  
 「兩の手に桃と櫻や草の餅、といへるは、翁が、門下に其角嵐雪の如きがあるを喜へる句なりとのことなるが、翁が職退の意見ひてゆかし、  
 元祿二年彌生の末、奥羽を行脚して、加賀の高弟立花北枝が許に旅寢しけるが「あかくと日はつれなくも秋の風、の句を得てしかば、秋の風を故に秋の山として北枝に示しけるに、この北枝も流石の名手なり、山の字は風の佳なるに若かずと答へて、翁の感賞に預りしとぞ、翁それより越前に赴かむ途に就きしに、北枝乃ち菅蓑に「白露もまだあら蓑の行衛かな、の句を添へて餞にす、其後翁はこの蓑を被て、北國より近畿を巡り、須磨、明石の月を詠めて、近江石山の幻住菴に隠れ、又叡山の麓なる金福寺及び洛の四夢菴などに住まひけるが、永祿七年九月中旬浪華に移りぬ、旅中の

蓑笠はこの時惟然坊に譲りしとなり、其月二十八日俳友園女といへるが厚  
 き櫻應に、圖らず齒毒に中てられ、泄瀉の病を得て花屋仁左衛門の宅に轉  
 し、十月十二日申刻といふに、永年契を結びし衆門弟が看護の下に、靜に  
 觀音經を念じつゝ、永き眠りに就きぬ、年五十一、十三日遺骸を大津に送  
 り、十四日義仲寺に葬る、其角が物せる翁終焉の記は風俗文選にあり、一  
 讀優愴暗涙の墜つるを覺るさらしむ、翁生涯の名句は萬を以て數ふべし、  
 其春日集に在る正風の主昧として知られたる「古池や蛙とびこむ水の音、  
 の一句は天下の耳に入れるに反して、其眞意を默會せるもの絶てなしとい  
 へり、其「旅にやみて夢は枯野をかけめぐる、の句は辭世にあらぬ最終の  
 口吟なりしとぞ、

惟然と千山

惟然坊も俳歌の名家なり、美濃國關ヶ原の人、姓は廣瀬、名は素牛、家も  
 と富裕なりしが、後甚く貧困に陥りしも意とせず、蕉門に遊ひて風月を友  
 とし、四方に行樂す、其さす短襦破笠一見乞巧の如し、一女あり名古屋の  
 富婆に嫁す、嘗て侍女二三を従へて市街に出て二丐に逢ふ、父なり、馳せ  
 行きて袖に纏りて泣く、惟然亦潸然として「兩袖にたゞ何となく時雨かな、  
 の句を吟して逸げ去る、浪華の花屋に師の翁に訣れて暗涙坐るに禁せず、  
 朝夕のつとめに翁の發句を和讃として、木魚を打鳴しつゝ其蹟を用へり、  
 寶永七年五月二十一日歿す、生前に師翁の遺物を門弟姫路の千山坊に與へ  
 しかば、千山携へ歸りて菅蓑を神とし、塚を築きて其側に居る、之を風蘿  
 堂の起因とす、この千山坊は享保十一年十一月十四日に歿せり、其後藩公  
 酒井忠知碑を塚上に立つ、高さ三尺墓石二尺なり、中央に芭蕉翁左右下に  
 惟然、千山と題し、傍に公の「はせを葉や風にやれども名は幾世、の句を  
 刻めり、其碑銘に、今茲己己之秋、我候新入城府、聞政之暇、廻駕于此指位  
 山、隨觀風物、偶溪邊深蕉叟之遺趾、而裁俳語、滑稽者流寒爪、傳聞其事、仰望  
 德輝、景慕風彩、竊慕奉其雅章以置於不朽、武備可之、遂叙其由、以貽永年云、  
 寛延己己九月中漸、とあり、公の入府は七月廿四日なれば、芭蕉塚の建碑

は其より五十日後に成りしもの如し。

この事のありしは、今より凡そ一百五十年前にして、年移り月重なるに連れ、舊蹟次第に廢潰して、今は風蘿堂も其影だになく、只谿水の音のみ幽かに聞えて、荊間の殘碑に物言ふさまあるは、坐ろに浮世離れし世別界の心地すなり、翁の靈が幾千代かけて名利に遠かれるもなつかし、

千山は姫藩の俳人なり、支考の物せる西華集に「淋しうもちつたる芥子の一重かな」染ものに胡蝶もあそぶるしかな、など四句あり共に千山の秀吟なりとぞ、

千明の句碑

葦塚の下手に浴の俳人千明の句碑あり、この人風蘿堂の遺風を慕ひ、寛政十一年に來りて住みけるに、文化三年三月七日に客死せしとぞ、碑の句に「櫻はと散るもの裝那起夕か南」とあり、其側に又一碑ありしが、誰のなりけむ見落しぬ、

温泉の東手は登山の路にして、右手に一大岩あり辨慶岩といふ、岩の少し

隨願寺と淨光院の

上手に増位寺あり、是より上ること凡そ八丁にして、山上なる隨願寺に登すへし、堂塔音なくして老樹之を圍み、全境幽絶なり、一池あり水色古蒼俗氣なし、古池やの句其まゝとも評すべし景、

隨願寺本堂の天井なる天人の畫は、深幽の筆なりとか聞さしが、畫神活動凡手の及ふべきにあらざると思はる、

奥院に靈水あり、薬師水といふ、本堂とこの奥院との間にあるは、例の名高ら姫路城主播磨拾遺源朝臣淨光院禪原忠次公の墳墓にして、其碑文は幕府弘文院學士林恕の選に係り、今より二百三十餘年前なる寛文五年の秋

に立てられしなり、この碑文は夫世徳臣貞嚴勇成續者萬世之美談也才兼文武出將入相者千古公に至るまへの事蹟を稱述し最後に四字二十句の銘を掲げあり、字數三千有餘の長文なり、俗にこの碑文を國文といふものありは蓋し國文に動くと稱せるは其長きをいへるなり、

増位山嶺と紫雲閣

増位山嶺を西へ北に迎れば、所謂一步を誤れば千仞の底に墜ちなむ危徑に出づ、過ぎて東に降れば紫雲閣の谿流に至るへく、西に向へば廣降山の北阪なり、この紫雲閣は清絶なる川瀧にして、奇石水を織ひ、奔湍岩を瀧ひ、



廣峰神社と登山の

風趣頗る愛すべきものあり、上流の紫雲と下流に承けて喫すべしとて其名ありとぞ。

廣峰山は増位山の續きて西手に在り、神社雄麗にして山上別に一部落をなす、本社より四五丁を隔てたる西の谷に、別に吉備大臣を祀れる小社ありて、壺向閣と幽境なり。

平野村

廣峰山の登路に表阪、裏阪、西阪、北阪の四ツあることなるが、白國村の西谿より登るは所謂表阪にして十八丁あり、一支峯を隔て西なる平野村より登るは裏阪なり、この裏阪は阪路急にして登程八丁あり、明治三十年の秋大雨のとき、山裂けて麓の人家數戸を破壊し死傷多かりしが、更に新路を設けて峻峻の度をませしとなむ。

廣峰

裏阪の麓より二丁許東手の敷中に古墳あり、石を疊みて穴庫とし、南方に入口あり、其中に興形なる一大石棺を設置す、俗に御興塚と稱して賭づるもの多し、棺は長さ九尺、幅五尺、高さ三尺五寸、上は屋形に尖りて、早



近き頃の長者屋敷

く爲めに造られたるかの如き柄あり、一見肩輿の如し、人類學者の説を聞くに、斯る完全なる石棺は至りて稀なりといへり、土人は素尊の乗り給へりし輿なりといへど、案ふに播磨風土記に、此邊に少彦名命が住みて、姫路丘の女神と契り會ひ給へりし記事あれば、この棺は命若くは命に縁ある貴人を葬りしなるべし。

平野村の南は一帶に明治三十

長者屋敷と其傳説

年來新築せられたる兵營なるが、其以前は村の東南に當りて、名高き長者屋敷なるものありしなり、

この長者屋敷のことにつきては、種々の傳説ありて臆かならねど、保元元年の頃は國府よりこの平野村、白國村邊は池殿の領地なりしが、揖保郡福井の家司太郎左衛門なるもの、男熊太郎なるもの、性頗る凶暴にして、弱年より家を出で、白國村に流浪ひ來り、多くの乾兒を従へて里人、旅客を惱し、領主も之を制すること能はざりしが、後文明五年の頃は其後裔に小鷹なるものありて大に暴威を振ひければ、世に小鷹長者と呼ばれて思はれる、あるとき坂田長兵衛といへるもの、この屋敷に泊りて身命殆かりしに、屋敷の娘は之をいと憫然に思ひて、竊に事の次第を諷せつ、共に姫路にまで落延びしに、追手に捕はれて殺されける、彼の節磨の搦染といへるは、この長者が血を絞りて染めけるなりなど、實なきことまでも口碑に残れり、

この長者の熊太郎は池殿時代の悪徒なりしやに見ゆ、池殿とは平清盛の異母弟頼盛のことにして、其邸を池殿と稱せしより、世に池大納言と呼ばき、攝津播磨の内所々に所領のありしは事實なり、源平の戦すみて、源頼朝は頼盛の母池尼に助けられたる恩あるより、厚く頼盛を遇して官職領地とも舊の仍くに差置さける次第なるが、固より亂世のことなれば政令の行届かざるも理なり、されば熊太郎とて悪徒が世に跋扈せしことはありしならむが、之を長者として世間より敬稱することはあるまじき善なれば、是は古來由緒ある長者がこの地にありけるを、彼れ熊太郎或は小鷹なる無頼の徒ありて、政令の行はれざる亂世に乗じて、長者の一族を襲殺せし上に、其居館財物を横奪せしことを、誤り傳へたるにはあらざるか、

明治二十七八年日清戦役後、陸軍擴張の結果として、野里村より平野村一帯を新設第十師團用地と定められ、姫路の有志よりも土地買収費の中へ凡そ三萬圓を獻納せし程なるが、明治三十年の春より工事に取り掛り、こ

の長者屋敷も人見塚も開拓して兵舎を築くこととなりしに、所謂長者屋敷の地下に、縦横二間深さ一間許の大なる洞窟ありて、周囲は堅き木材にて圍み、底は石瓦の類にて敷き詰めあり、其中には異色の砂堆く臭氣烈しかりし、之を分拆せしに、多くの有機質を含有せしことなりき、されば其起原は果して何物なりやと知れるものなし、今發掘の當時姫路中學校教諭前波仲尾氏の實査せられし談話を聞くに、氏は發掘のことを聞き得て、直に檢臨せられたる由なるが、窟内には赤黒色の一砂面に堆まりて、其間に四五枚の塞塔婆形木片并に漆塗の佛具にて靴形をなせる破片及び六七百年前のものならむと思はるゝ素焼の壺の類ありて、其木片には古代の達筆にて、山賊、獄死などいふ文字が残れるを水に浸して、幽かに讀まれしとのことなり、氏は又同時に廣峰山上の傳説を確かめられし由なるが、神官の話にては、往昔廣峰神社の大官司は、一時全國群不逞の徒を集めて非常なる權力を有し、白國村に住せしに、其配下の中に大官司の權力を奪は

むとするものありて、其居を襲ひ、代々重要な教書下知狀を始め一切の財物を燬したり今の長者屋敷は其居の跡ならむと云ひにきことぞ  
 昨明治三十一年六月十七日神宮司廳の發行に係る古事類苑神祇部に、西行雜誌を摘記せるが、其中に播磨國廣峰山大別當職刑部大夫長重が、山僧の濫妨を停止せむことを訴へて、處分を仰きし事あり、是に據りて觀る時は、承元二年十二月廿日付、延應元年六月八日付、寛元三年十二月廿三日付、同四年十一月十九日付、建長二年四月廿九日付、正元元年閏十月十六日付、文應元年九月七日付の關東教書并に六波羅下知狀に據れば廣峯山大別當は世襲の領職なること明かなるに、山僧實光坊玄運、阿闍梨自智王丸の輩、辨阿闍梨後藤左衛門尉以下の惡黨を差し遣はして、住宅を追捕し、財物を搜取し、濫妨無道到らざる所なかりければ、速に停止せられむことを幕府に訴へしに、正和二年二月十七日、其貫首に禁止の下知あり、尋て三月八日、大別當職より當職重代相傳の如何を稟伺し、同月廿三日、越後守

北條時政武藏守なるは北條貞顯の名を以て異議に及ばざる趣を執達せられたるものなり、今日廣峰山にての傳説は多分この時代の出来事をいへるならむ歟と思はる。

數多の説を綜合して案ふる時は、此屋敷は長者の住りし跡には相違なく、其長者の祖先が山賊若くは凶僧の爲りに濫妨狼籍せられしより、往昔にては珍しからざる地下の大窟を設けて、さうらの時の避難所となし置きしに、其後重ねて悪徒の襲撃に逢ひしかば、祖先の位牌佛像を奉じて地下に潜み居けるに、居館を焼き拂はれたる上、彼等の毒刃に斃れしものならむか、其砂の異色を呈せるは、焼餘の灰及び有機物の液汁が、長日月の間に自然に浸透して、染まりしものなるべし、深く穿ちて案ふれば、彼の人血の搗染説は悪徒が此長者を襲撃する時、凶行の口實として特更に云ひふらせし淫造説にはあらざる歟、肥後縣人類學會員和田千吉君は地方の史事に明なる人なるが、同君の談によればこの熊本縣また小笠原といふは往昔白國神社の

御所清水を蘇菅清水

神隱なりし由緒ある郷土にて、一時は植物類の強かりし由なれば、多少の凶行はありしなるべしとぞなり、されば廣峰山の神隱の事も、この一族の業ならむか。平野村の南方より西なる舊節西郡に越ゆる梅ヶ谷といへる小坂の入口に、一清泉あり、御所清水といひて播磨十水の一なり、往昔醍醐天皇が隱岐より御歸洛のとき、書寫山に御臨幸あり、其時の御料水はこの水なりしかば其名あり、この播磨十水の中に最も有名なるは、明石郡なる野中清水なるが、姫路附近にては御所清水の外に谷外の庄村に蘇菅清水といふがあり、平野村より南下すれば、數丁にして八代村に至るべし、この村の東光寺の邊に城主榊原忠次公の別墅の趾ありて、今に御茶屋邸と稱し名高し、公のとき八代八景の選ありて山頂松風、田村傾照、廣嶺暮雪、隣寺晚鐘、平野疎雁、前川遠棹、増位濛雨、東籬晴月といへり、この地は往昔伏見天皇の離宮のありし所にて、城主池田輝政も別荘を築きしことあり、又彼の長者屋敷の北手にて白國村と平野村との中間に龜井寺の趾あり、淡海三船公六代の孫藤原山陰が九州渡航のとき、愛見を海に落し、大龜の

龜井寺の趾

八代八景

爲めに救はれければ、甚く悦びて一寺をこの地に建て龜を寺の紋としけり、其子は後に大徳の僧となりてこの寺に住みたまふとぞ、今は其趾池となりて時に龜紋の古瓦ありて出づるなり。

第三日の巡覽

増位山廣峯山の方面に第二日を費しければ、是より第三日の巡覽として書寫山方面を説かむとす、

水尾山と其附近

船場なる龍野町三丁目より北行すれば、藥師山の連丘なる小部山の麓を過ぎて、姫路監獄支署の前に出づべし、其少し北に一小丘あり、是を掃磨風土記に所謂箕丘にて、後世水尾山と書す、即ち惣社の神なる大己貴尊の祭られりし原地なり、この丘は随分高さものなりしに、花園天皇の應長元年今より凡五四月十日より三日間、水涌り出で、俄に其形を失ひけり、置置城主赤松政村時代に、家臣秩父正道なるもの住みてければ、夫より秩父山の稱あり、正道の妻那古吉村なるものに通じ、露はれて自殺しければ、其地

安室村と六本松

今に伏妻岡と稱して、野里村の西にあり、吉村の住りし地は秩父山の西南三丁許にある那古山にして、この山以前は青森山と呼ばれしとぞ、秩父山の南邊に手枕野とて、今より凡一千二百年前に掃磨守たりし柿本人丸が、終宵手枕しつゝ、歌詠みにし舊跡ありて、今に枕田と呼べりとなむ、秩父山より西は今安室村と呼ばれて、新在家村、辻井村、田寺村、御立村など、の總稱たり、因に記す、この安室といへる名は掃磨風土記にある御室を轉は空と同音讀といへりし人の上祖、家名を空と改めて、掃磨風の室を造りしより起りしなりと風土記にあり、又中古安室郷と稱せしと今の安室村のみなちがして古左村、高岡村なども加はりありしが如し、風土記によれば今の御立村と上古は巨智里即ち今の置置村に屬せしに似たり、そは風土記巨智里の條下に大立丘とありて應明天皇の丘に立きて地形を見給ひし故の名なりとあるにて知らる、蓋大立は後世、御立に改めて遂に、みたちと讀むに至りしこそは細路河國の掃磨を後世發取と稱して遂には、みしつと讀むに至りしが如む。

秩父山より新在家村の分村三軒屋といへる所を経て辻井村にかゝれば、其西に見ゆるは袖振山にして、蛤岩のある所なり、辻井村より六本松、御立村を過ぎて置置川を渡れば、東阪本村に至るべし、この六本松といへるは今は田寺村の分村なるが、明暦年代までは置置川の東岸にして、松の大

書寫山は其寶物の  
こと

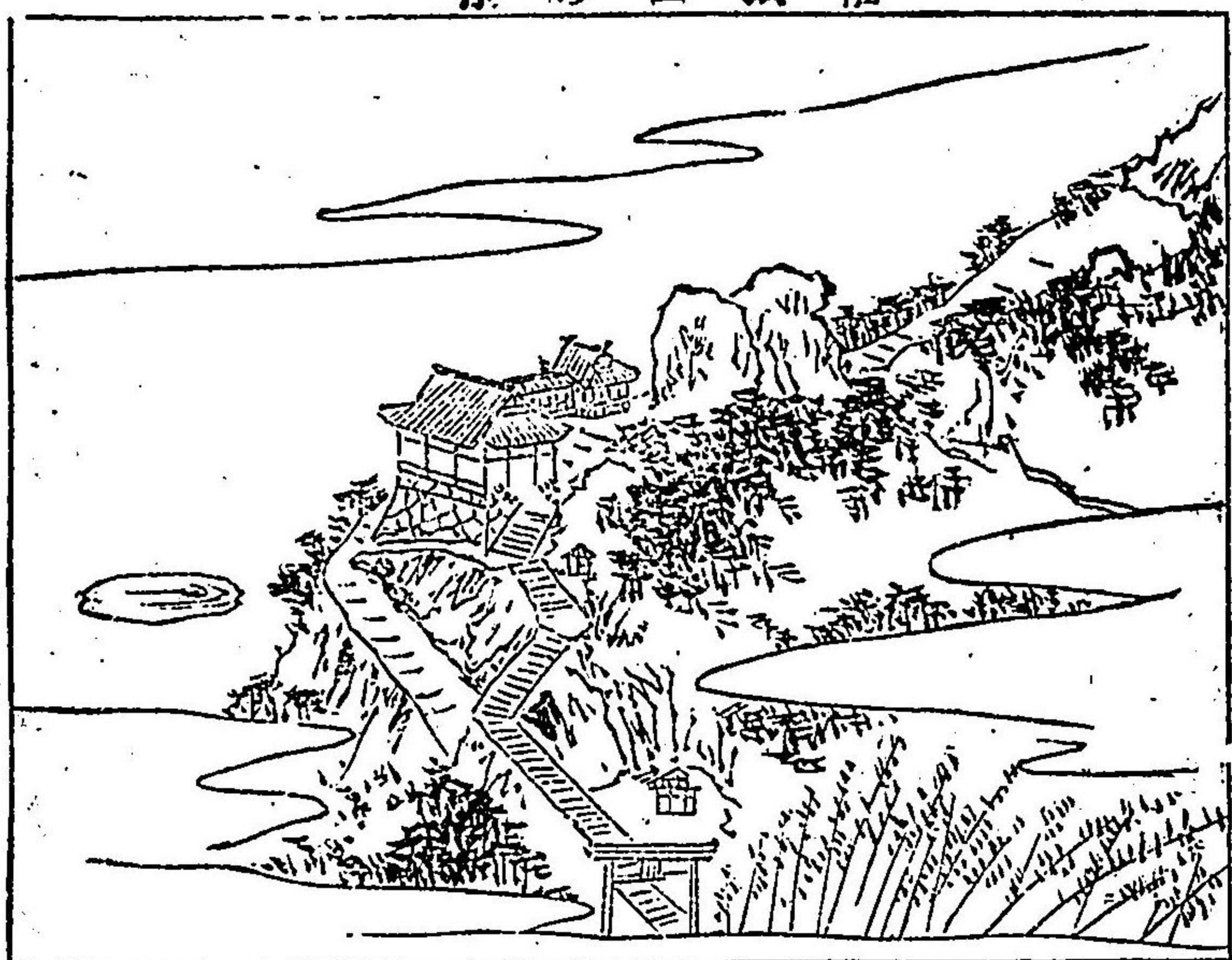
木六本ありし故の名なるよしなり、  
東阪本村なる後醍醐天皇の鳳章邸より阪路凡そ十八丁にて、書寫山頭（いまは）に届  
るべし、本堂なる如意輪堂は性空上人の開基にして、數丁の西手に三ツの  
堂といへるあり、是は名工左甚五郎の建築にして、柱上の力士の像は頗る  
巧妙迫神なりとの評あり、如意輪堂の扉の音、簾筆架の聲すとのこと、共  
に名高し、三ツの堂の所には寶庫ありて、華山法皇の勅階に係る巨勢廣貴  
の筆性空上人の肖像に、藤原行成の書ける具平親王の讚文ありしもの、上  
東門院和泉式部の色紙の丹尺など、數千點の寶物を納めありしが、明治三  
十一年五月廿八日出火ありて鳥有に歸せしを惜むべき。

堀御所と王院の馬  
場

書寫山の名蹟は頗る多かれと今は之を尋して西阪を下山すれば、其麓に西  
阪本村あり、村の南手に播磨作の大守赤松滿祐が、一時榮華を極めしてふ  
堀御所の趾あり、そを見て田井村に入れば、其寺に華山法皇の舊跡なる王  
院の馬場といふがあり、東行して置鹽川を渡り東に見ゆるは、例の袖振山の

草上寺と今宿との  
ふど

袖振山の景



北端にして其所を隠ヶ鼻とい  
ひ、山腹に大なる岩穴ありて  
往古老鼠の米搗きし趾なりと  
いへり、この山の東麓にある  
は今は山吹村と稱すれども、  
上世は名高き草上驛のありし  
地にて、一千二百年前の風土  
記にも出で、續日本紀にも見  
ゆ、村の北に近き頃まで古き  
杉林ありて、草上寺の趾とい  
ふが残りし由なるが、この  
寺は慈覺大師の八講所の一に  
して、今よりは凡そ一千五六

昌樂寺と君居寺

十年前に建てられしなり、袖振山の東麓より姫路方面に向ひて凡そ十丁の間は、明治三十年の春より第十師團の砲兵射撃用地となれることなるが、それより山南の蛤岩を経て南にあるは今宿村なり、この今宿村も六百年以前より名ある所なるが、草上宿漸く衰へて、後に出て來し村なれば、今宿といひしなるべしといへり、今宿村の昌樂寺は華山法皇書寫山に御臨幸の際、敎度御立寄りありて御手栽の松さへありしなど、有名の古刹なれど、今は荒れ廢れて見る影なし、又この邊に君居寺の古跡ありしとこのことなれど、更に分らず、

大井川と手野川

國道以南に大井川といふあり、芹の名所なり、其隣の山は髮櫛山といひて、姫路城の用石は多くこの山より出でしなりといふ、其西は手野川にして、川の香魚は風土記にも見えて今に味旨し、

青山村の名跡と其八景

國道に沿ひて、手野川の東には手野村あり、西には青山村あり、この青山村は名蹟に富める地にして、山名宗全の築きし宗全寺の跡あり、神功皇后が麻生山より放ち給ひし矢の落ちたる跡あり矢落田といふ、柿本人丸が播磨守たりし時はこの村に住めりし由にて、歌書淵といふあり、播磨守平井保昌其妻和泉式部とこゝに來りしことありて、式部の腰掛石といふが今に遺れり、日本書記に名高き暴漢、女小麿の躰はこの村の小麿山なりといひ、又城主柳原政邦公のとき青山八景を選みて、南海の漂船、淺影の秋月、季奥の疏雁、遠地の風鐘、義舎の夜雨、夢前の漁火、錦戸の青雪、山肚の晴嵐といへり、又永祿十二年八月九日三木城主別所長治、龍野城主赤松政秀と謀りて姫路城主黒田職隆を挾撃せしとせしとき、姫路軍と龍野軍と、この地にて大合戦あり、姫路の將栗山利安敵將足原彌十郎、桑原勘解由二人の首を討ち取りし由、常山紀談に出でありて名高し、近年まで戦死者の碑石などありしとなり、

第四日の巡覽

是より第四日の遊程として姫路の東南方面を説かむ、

御饗橋と御谷村

姫路の國府寺町、橋之町邊に惣社の神料水を出せし御饗橋の跡あり、又この邊を神屋と稱し、村と呼べるは、往昔惣社の神はたゞこの地に御勅座ありし由にて、御慮從のもの、此村に宿居せし故の名なりといへり、京口橋の南手に勅王家河合宗元の招魂碑あり、明治廿五年に正四位の追贈ありしとき設けられしなり、其東なる市之郷村に五靈天神とて有名なる社あり、元は忍熊川の東岸なりし由にて、永享の大洪水に流れ來て其所の荊棘に止まりし神を祀れるなりとぞ、この市之郷村は往古は忍熊村と呼ばれし地なるが、攝保郡大市村神功皇后御征韓のとき賀として伴ひ歸り給ひし新羅王子の創立せし由りて高き坐相山鶴足寺は此の村にありしにて一時は七堂伽藍千ヶ寺ありて京商賈客の往來止宿するもの頗る多く貞應年中には爲めに盛なる市場を立てられし由なり村の名もそれより起れるなるが後年羽柴秀吉に抵抗して全山悉く焼き掃はれぬに大なる市場ありしを、何時の頃なりけむ、この地に移して市之郷村と改めけり、村に忍熊森といへるあり、仲哀天皇の皇子忍熊王が神功皇后の凱旋を要撃せむとて、暫く住めりし古蹟なりといふ、村の東なる市川には一長橋ありて架れり、長さ三百間に餘れり、水を渡り

市之郷村と其歴史

國分寺と菩提碑

麻生山と仁壽山

八家の地蔵と小赤

て東に見ゆるは所謂國分寺なり、又南なる山脇村には一百五十年前なる船場川大洪水のときに溺死せし者の菩提碑あり、山脇村の山脈は南に走りて麻生山となれり、神功皇后が御征韓のとき、船より上陸し給ひて御登臨ありし有名の山なり、形に依りて攝摩富士ともいふ、山の南方に仁壽山あり、瀧老河合寸翁が文政年中に學校を興し、地にて、頼山陽の如きも久しく逗留せし所なり、今も山腹に寸翁一家の墓碑あり、翁の墓誌は津田貴の選に係り傳記稍々詳かなり、誌によれば翁の上祖は遠州に住めりし藤原氏なり、彼の經濟雜誌社の大日本名辭書に出でたる翁の傳はこの漢文を節譯せるものゝ如し、壘城よりして南望、海に向へば風景頗る宜しくして重ね遊ぶの價あり、況んや翁の靈を祀れる地なるをや、麻生山より東南一里、福泊といへる江村に有名なる地藏佛あり、八家の地藏といふ、其地直ちに海に枕みて風景佳なるをもて、春秋の際來り詣づるもの多し、其像は行基菩薩の作なりといへど如何にや、其西手に辨天山な



福治の稱呼を脱ぎて播磨の國名に及ぶ

小山あり、奇岩怪石波に激して咆哮するさま、西士の赤壁にも似たらむとて、小赤壁の名あり、  
 因に記す、神功皇后御征韓の船路に最と荒かりし風波が、この邊にて夢の如くに風きてければ、後世その地を吹止と稱し、國を晴間と名づくる由俗に云ひ傳ふれど是は天文の頃までは多く世に行はれし播磨風土記が、其後元龜天正の乱に、失せ去りしより後の臆説にして、この福治は舊記には唐泊とありて、韓人が來泊せしよりの名なるが、彼の飾磨郡の韓室を安室と改めしが如く、唐の音は空虚を意味するを思ひて福治とせしなり、猶めしといふ草をよしと呼べるが如し、又播磨といへる名は、谷間故に但馬といひ、稻間故に因幡といひ、鹿多かりしが故に飜磨といへりしが如く、榛多かりし故に榛間といひしにて、風土記攝保郡の所に其證見ゆ、今の文字は何れも紀元一千三百七十二年元明天皇の和銅六年五月二日の、地名は好字を着けよとの詔勅に基きて改めしなりけり、

粟生の松原

福治は印南郡なるが、其西に飾磨郡の木場村あり、其三ッ橋は小錦帯橋とも稱すべし風流なる反橋なりしが、今は平橋となりて雅味なし、この邊の海濱は所謂盤濱にして、見渡す限りに潮水煮く煙の棚引くも面白き心地し、一帶の眺望も頗る佳なり、この所より西行一里にして懸濱なる松原神社あり、其松林を粟生松原と稱して有名なり、三百年前には英賀城主三木通秋の扇懸濱城のありし所なり、

妻鹿の功山

松原より西に妻鹿村あり、村の北に一山あり功山といふ、元弘年中赤松則村の臣妻鹿長宗の始めて築城せし所にて、後天正八年に黒田孝高が姫路城を羽柴秀吉に譲りて移居せし地なり、國府の城として有名なりしが、今は僅に瓦石の類の遺れるのみなり、それより市川を隔て、穴師村あり、今は阿成村と書く、この地は上世倭の穴無神の神戸のありし所なるより、其名ありと風土記に見ゆ、阿成村の西なる海濱を宇津路と稱し、其邊に産する貝を子安貝といひて、安産の靈符となすと云ふ、宇津路海苔亦古來有名な

子安貝

蘆屋

宇津路の附近なる三宅村は陰陽師蘆屋道滿及其子孫の住めりし所にて、近年まで蘆屋塚といふがありし由なり、この道滿は彼の有名なる天文博士阿倍晴明と同時代の人にして、時々晴明の門に出入し、後其妻季花に通じて金鳥玉兎集てふ秘書を割みけるが、或とき太政大臣藤原道長を呪ひて、晴明のために發かれ播磨に逐はる、それより佐用郡の仁方村に住み、後に飾磨郡の三宅村に移りしものゝ如し、後世嘉吉元年に赤松滿祐その裔道繼を赤穂郡城山に召して藥を乞ひしことあり、其後道仙なるもの英賀城の陰陽師となり、道善のときには種々の藥草を作りて往來の人々に施ししことあり、そを三宅の施藥と稱して有名なりし由なり、大永六年五月廿七日深志野村加茂神社にては、三宅村蘆屋道軒を聘して雨を祈りしこと舊記に見ゆ、又天正四年四月七日蘆屋道海といへるが、播磨の府中めぐりせしとて其所見を録せしもの今に残れり、

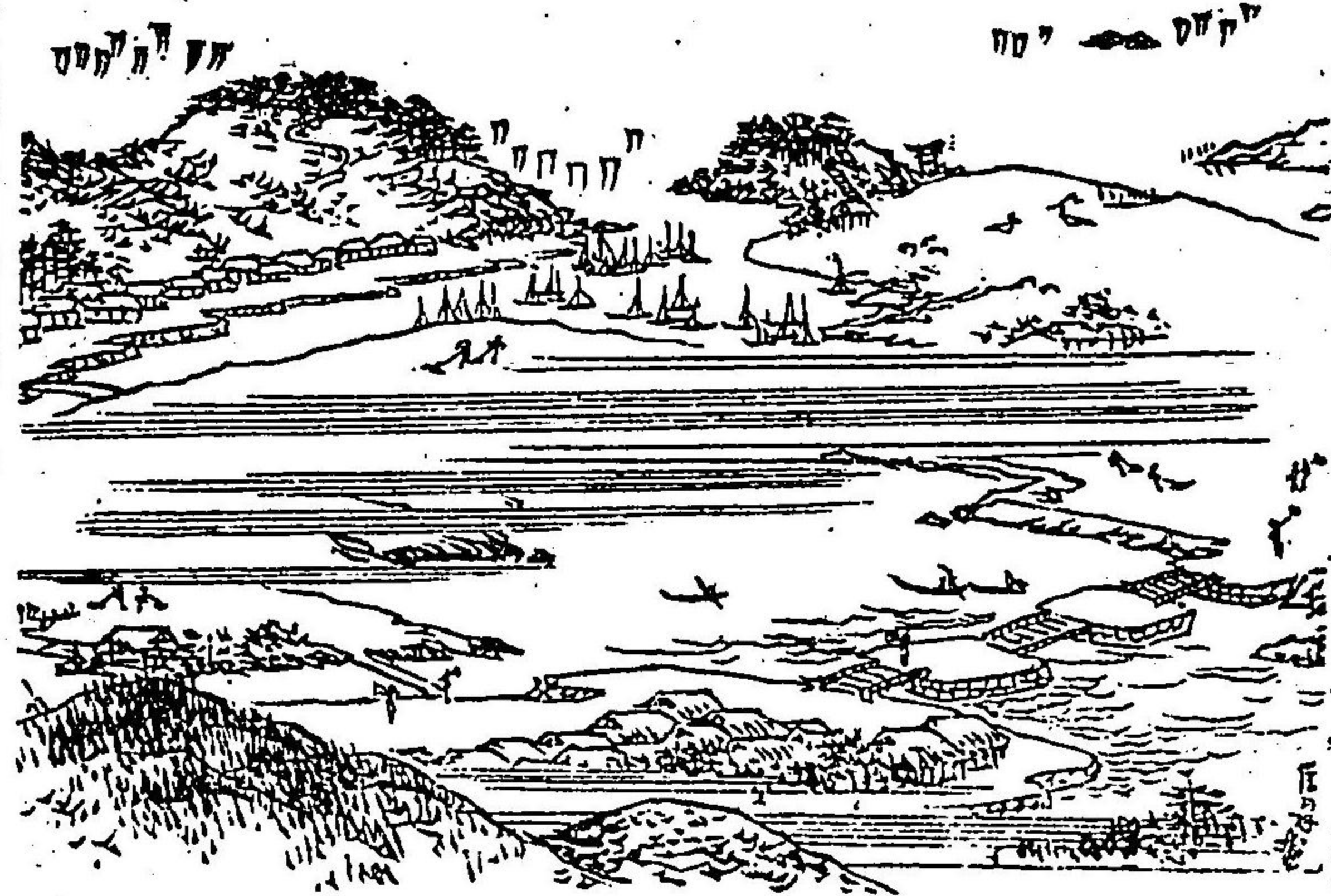
飾磨津の港

飾磨津は三宅村の西にある有名の港にして、戸數一千二百、人口六千あり諸會社銀行遊廓などの設あり、其港の輸出入品は毎年一百万圓に下らずとぞ、抑も飾磨といへる名は郡名に始まるか、將たこの地より擴まりけるが後に郡名に用ゐられしか不明なれど、播磨風土記によれば孝昭天皇がこの地に坐ししとき、大鹿ありて鳴きければ「牡鹿の鳴きつるかも」と曰ひけるより起れりと思ゆ、後世寛和二年に華山法皇が書寫山へ御臨幸のとき、この津の家々美しく飴りにければ、鑄萬津とかくべき由勅らせ給ひしとぞ、彼の有名なる搦染は藍を搦き碎きて布を染めしよりの名にて、往古神功皇后が御征韓のとき、この地の者巧に幡など染め出しければ、それより軍事にはかち染とて佳例となり來りしが如し、今は對岸の阿波國に其技を奪はれあるぞうたてき、飾磨の今の堤保の築かれし工事は、弘化三年四月十七日に始まり、其十月廿五日に終れり、東西六十六間、南北八十三間、水深干潮も一間を下らず、實に魚商藤田維昌が甚く奔走して姫路藩主酒

飾磨 橋保

津田の細江と其礎

木場附近の景



井忠寶の許を得て成りしなり  
 とぞ、  
 この地御幸橋、妻戀森、彈琴  
 浦、折居松などして名蹟多し  
 、彈琴浦とは管公が筑紫に遷  
 り給ふとさ、この地に宿りて  
 琴を弾じられし趾にて、今に  
 公の社あり、網敷天神とて公  
 自作の木像あるよし、又折居  
 松とは和泉式部が植ゑし松な  
 るよし舊記に見ゆ、殊に西部  
 にある細江村は、津田の細江  
 とて古來頗る名高き地にて、

山邊赤人の歌に詠まれて、一千二百年前に編まれし萬葉集に出づ、其歌に  
 風吹けば浪や立むとさもらひに津田の細江にうらかくれ居ぬ  
 又續後撰集覺盛法師の歌に、  
 五月雨は津田の細江の滂つくしみぬぬもふかさしるし成けり  
 菅原道真公の歌に、  
 はのくぐと津田の細江のみをつくし我には見せよあり明の月  
 古き名産に孫三餅なるものあり、今川貞世の歌に、  
 もとよりも頭はりまの國なれば飾磨のからん喚はしても見よ

津田の穂蓼も有名なる品にて、貞觀八年に始めて數十株を生じ、仁治三年  
 七月勅使に獻せしことあるよし夫木集に見ゆ、  
 この海濱には多く蛤鮑を生じ、そを撈りて生計を營むもの少からず、河合  
 寸翁が始めて放養しけるなりとぞ、  
 飾磨の江灣を一に玉江と呼ぶ、又智賢寺とて有名なる古刹あり、藩侯藤原

家島と室津七曲の景

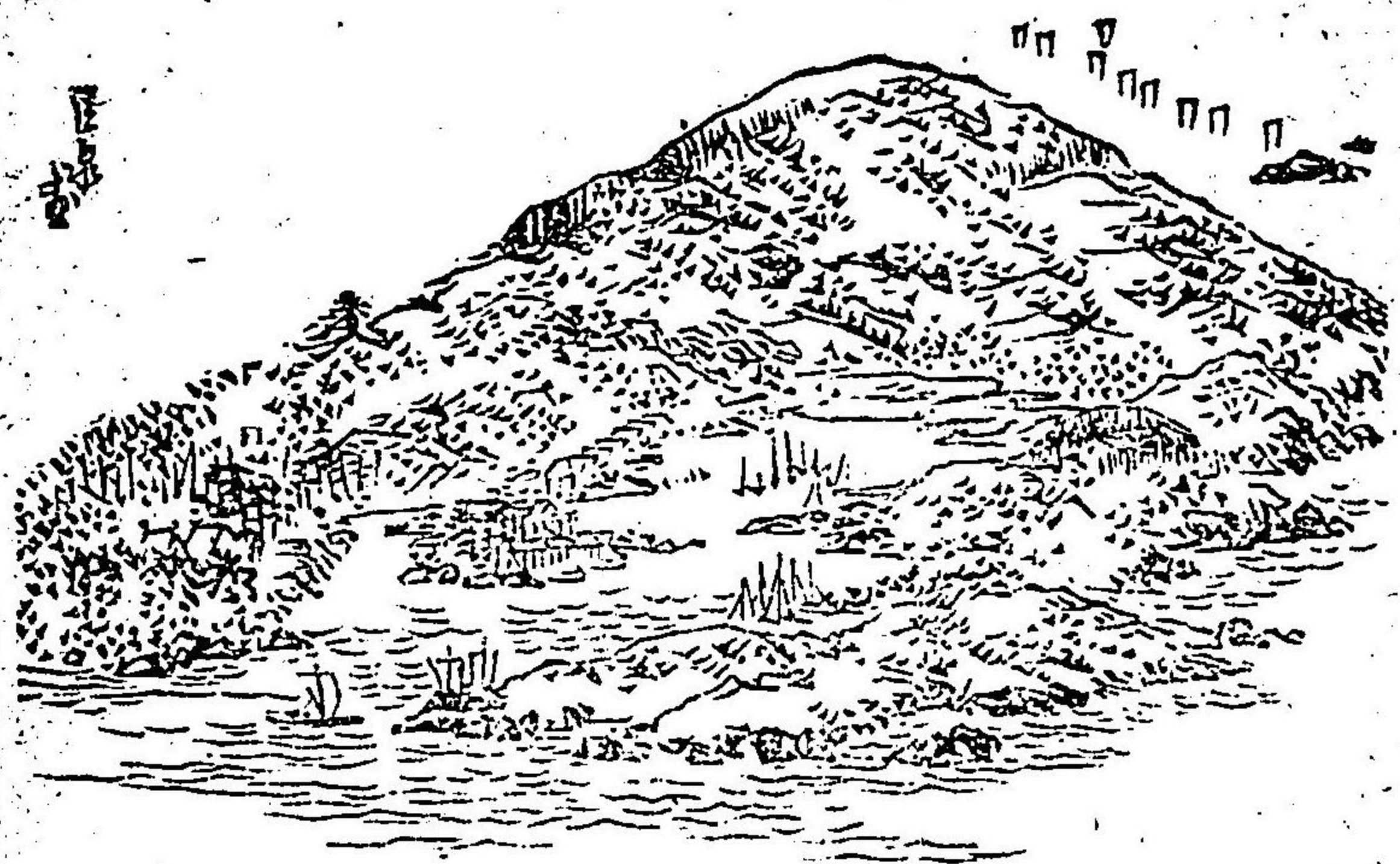
政邦は、それ等を取りて飾磨八景を評定せり、江橋の觀月、家島の歸帆、妻鹿の反照、玉江の白鷺、淡路の濛雨、智寶の晚鐘、菅祠の青松、飾磨の晴嵐是なり、誰が定めけし別に中島、須賀、津田、家島、國府、窪路、龜山、細江の八景を品せるものあり、

家島は飾磨津より海上五里にして、大小二十餘島あり、家島の外に坊勢島、院家島、男鹿島など大なり、家島なる宮浦、眞浦の二港は良泊にして、船の爲めには安全なる家の如し、故に家島の名あるよし風土記に見ゆ、男鹿島の楯崎といへるは名所にして、潮流の景頗る趣あり、又櫻谷の觀音崎も絶景の地なりといふ、

家島八景なるものあり、宮浦の夜泊、白髭の靈祠、眞浦の古城、天満の雪樹、赤坂の清水、櫻谷の霞景、楯崎の觀月、坊勢の晚鐘といふ、又天神森の鶴、二本松の雪といひ、裸島の千鳥、梅崎の夕霧などもあり、

清和天皇のとき、苦瓜元通といへるが築きしてふ飯盛山の城趾あり、

家島の景



この島々は春夏の遊覧には頗る宜しき由にて、特に魚族の多く且ツ廉なるには驚かるゝとぞ、

この家島の北に當れるは揖保郡なるが、その海岸に、東に伊津の浦あり、西に至津の灣ありて、其間一里に七回の曲江あり、風景奇絶なるを以て其名高く、風雅の士人の家島に遊ぶものは、歸路に必ず此地を巡り覽る、世に之を室津七曲の景と稱せ

播但鐵道と龜山本  
徳寺

り、  
脩磨の堪保より播但鐵道に乗ずれば、天神驛、龜山驛を経て、十五分間に  
姫路豆腐町驛に着すべし、その龜山驛には有名なる龜山本徳寺あり、この  
寺は眞宗西本願寺派なれども、其開基は船場本徳寺に同じ、

第五日の巡覽

是より第五日の遊程として播磨四勝を案内せむとす、

阿彌陀尊の時光寺

姫路驛より東十五分の徳車路にして阿彌陀尊に達せむ、驛より南行すれば、  
路より東手に見ゆるは淨土宗の遍照山時光寺にして、清和源氏多田滿仲の  
後胤時光上人俗名源經家が建長元年 今より六百五十年前 二月十五日に開基せし名高  
き寺なれども、別に見るべき名蹟もなければ、差し置きて、十數丁の坦途  
を下れば、曾根町に出づ、其天満神社は所謂四勝の一にして、菅公手植の  
松は枯れて庫内に納まりあれど、後繼の松も頗る美事なり、水戸彰者館員  
松拙忠の遷へる菅公廟記は名高し、

曾根の天神社

石寶殿と觀音殿

石寶殿の圖



この社より東北三十丁許にし  
て、生石子村龍山なる靜ヶ窟  
俗に石寶殿といへるに至るべ  
し、全山多く石を出し、丁々  
の音常に斷えず、山の東腹に  
ある石殿は所謂石寶殿にして  
四勝の一なり、戸を上にし、屋  
を西にし、倒れて石を穿てる  
大窟中に横ふ、蓋し山岩其の  
中を鑿りて石殿を作らむ者  
案なりしに、功竣りて正立す  
る能はざりしものならむ歎、  
正面に大日貴尊少彦名命を祀

高砂神社と十輪寺

れるは寶殿を作らせ給ひし神なればなり、山の南腹に觀瀾庵の三大字を彫りたる大岩あり、河合才翁の遺業にして、江戸の書家永根文峰の筆なり龍山より東南十數丁にして、加古川の分流なる荒川を渡り高砂浦に至るべし、高砂神社は舊名牛頭天王と稱して、廣隆神社と神祭を同じくす、神功皇后時代よりの舊社なり、この地も四勝の一にして相生松最も名高し、其港灣も眺望に宜しく、夏時海水浴の來客多しとぞ、地藏山十輪寺はこの地の名刹にして、建永二年（今よりは凡七  
百三十年前）の創建に係れり、

尾上社と其鐘

高砂の東に加古川の本流ありて、一大長橋を架す、そを渡りて數丁の東に四勝の一なる尾上神社あり、祭神は住吉大神にして、社前に神功皇后のとき海中より出でてふ一古鐘を安置せり、

別府浦と手枕松

播磨四勝の巡覽は既に終れり、されど世人尾上に至れば、必ず其東一里許にある別府の手枕松を觀る、この手枕松は別府港住吉神社の境内にあり、老幹長く西に延びて、一たび地に俯ひ、二たび上に向ふさま、人の手枕せ

俳人瓢水のゑて

るに似たり故に名づく、彼の寛永年代に姫路城主本多忠政公を、私宅に待たむ約ありて、瓢然家を出で、月を須磨浦に詠めて歸らず、終に藩公を待ちばけに逢はせし有名な俳人瀧野瓢水はこの地の産なり、

刀田山の太子堂

別府より西北に刀田山の太子堂あり、鶴林寺といふ敏達天皇の十二年に聖徳太子の建て給ひし有名な古刹なれど、今は荒廢して往昔の面影なし、刀田山より加古川驛に出づれば、北一里にして大野村に日向神社あり、この地に生れ給ひし景行天皇の皇后稻日太耶姬を祭る、又水岡神社ともいふ、

水岡神社

山上に皇后の御陵あり、御子大碓尊小碓尊（後に日本武尊と稱す）もこの地に生れ給ひしなり、此社の祭神は吉備津彦尊なる由舊記に見ゆ、されど世人が産の神として遠近より來り祈るを見れば頗るも合せ祀れるならむか

野口の念佛堂

加古川驛の東に孝謙天皇のとき教信上人の開基せし、念佛山教信寺といへるがあり、所謂野口念佛にて其名高し、四勝並に其附近に名ある舊跡も、一日の遊程に日に盡さぬ、行客は日暮に

加古川驛より乗車するも、僅に三十分にして姫路驛に歸着せむなり、

巡 覽 後 の 概 評

五日間の遊程は姫路市内外の名勝舊蹟大抵足跡を印しぬ、其外町家に國府寺あり、寺院に虎屋あり、横なるに堅町といひ、木造にて竹門と稱すなど、ことごとくしく姫路の七奇を數ふるものあれば、記し置くほどの價值もなければ云はず、さて斯く見來り巡り了れば、最も繁華なるは福中町通東西十丁の間ならむが、是を二百年前渡守呼ぶ聲に水禽を驚かせし、松並河原なりし國府渡の變りしなりけり、市街の南端なる山鐵停車場は、今日氣車の來往頻繁にして、乗降の客繼るが如きも、近き頃までは姥ヶ淵、月見清水などいひて、名を聞くに淋しげなる村外れなりしなり、惣社境内、練兵場邊は別に觀るべきものなきも、往き返ふ人常に斷せず、彼の福榮座と七福座とは電光夜を盡に繼ぎて兒女の歡聲湧くが如きも俗界の行樂場なり、西部なる琴丘には夏の朝、冬の夕、あるは長閑けき春の日に、或ものは愛

姫路の七不思議

車中町通と山鐵停車場との桑治の變

姫路八景の私観

兒の手を引き、或ものは親しき友に連れて、一提の行厨に積日の鬱を掛へるも多かり、

姫路には洞庭湖の景なく、耶馬溪の趣なければ、今強ひて好む所を評選せば、姫路八景として、琴丘の秋月、男陵の晴嵐、鷲城の夕照、嵐山の暮雪、御坊の晚鐘、惣社の夜雨、鹿浦の歸帆、市水の落雁など名づけてむもかし、男陵、鹿浦、市水といふ、孰れも市外に屬せりとならば、野里の晴嵐、國府の歸帆、祓水の落雁など昔の夢を繰り返へさむもゆかし、

姫路附近の風景

姫路附近なる市外の景を云はば、山には増位、麻生、仁壽を推すべく、水には福泊、懸瀆、家島などを語るべきか、而して山と水とを兼ねて清絶神を洗ふなる室津七曲の景に至りては、匹を天下に求むるも、恐らくは得易からじ、只其景の小なるを憐むのみ、

姫路の地盤と中幸枝の脚價

風候順適にして且水質の宜しきは姫路の特有にして、この點は同じ中國にても、廣島、岡山などの及ぶ所にあらず、是れ頗る遊學者に適する土地な

るべし、彼の姫路中學校の出身者が、大學其他に好位置を占めて、嘖々天下に其名を揚げつゝあるも、故なきにあらざるなり、況むや岡校長名は元輔は熱心なる教育家なり、前波、名は仲尾のせだ名は佳格福井の八野瀬田名は佳格の両教諭は、其學識共に天下に誇るに足れり、加ふるに博學家春山弟彦翁が二十年來同校を潤はされつゝあるのみならず、小野田名は勇夫つた名立本のの両教諭も其學術に於て稀なる経験家なるをや、小學を出で、中學に遊ばむもの、其地を選まば姫路こそ極めて適當なる其地ならめ、これ等後來有望なる學生が、一日の休暇に阿保村なる仁壽山に遊びて、河合寸翁の碑畔に低徊し、姫路の一人日本三介の首班なる翁が老後の芳躋を用はむも、浩然の氣を養ふに足るべく、又春山翁の圖書館に好著珍本を繕きて、時に城南北に、國家干城の練兵を傍觀し、且は彼のやむごとなき竹の園生の御身をもて、遼東の役、雪中雨の如かりし彈丸のうちに、率先して第二師團第四旅團の兵を御指揮遊ばされし第十師團長陸軍中將大勳位功三級伏見宮貞愛親王殿下の御英姿を拜仰せむも身を修むることなきたづまになむ。

### 第六章 名産

姫路木綿  
高砂染

姫路は古來有名なる所なれど、其割合に産物は至りて少し、河合寸翁時代に藩の奨励ありて姫路木綿は一時東都に玉川晒の名高かりしが、今は高砂染なるものありて、旅客の紀念に供へらる、この高砂染は相生松に因みて松葉を染め出せる木綿湯形にして、元塩町の中川屋が主として賣り捌き居れり。

野里鑄物

野里の鑄物は古來有名にして、芥田五郎右衛門は豐太閤の殊遇を受けし鑄物師なるか、京都智恵院の大鐘は其鑄造せし所なり、子孫今は其業を廢して、尾上久三郎といへるが、盛に其遺業を營み居れり、明治二十三年の頃兵庫能福寺の大佛を鑄しはこの家なりけり、

姫路草具

姫路の草具も古來有名にして、是は韓國産の牛皮を市川の水に晒して、柔製したるを、蓑具、文庫などに作れるものにて、福中町なる板屋といへる



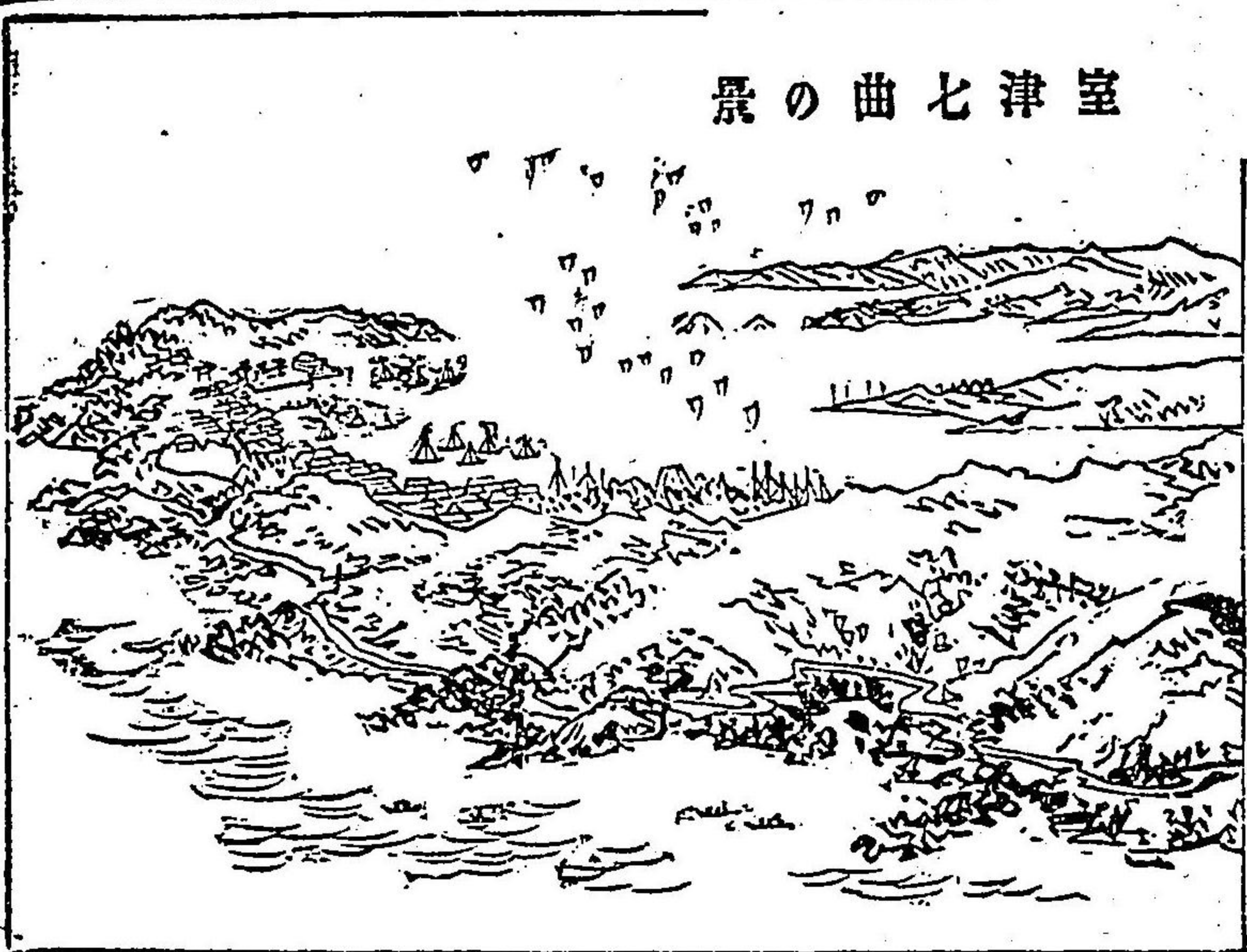
明珍火箸

玉椿  
開虎丹

に多く仕入れ居れり。

野里に明珍宗之とて、名高き鍛冶師あり、紀姓にして武内宿禰の後胤なり、祖先宗清は源頼朝に仕へて鎧師たり、後代其業を以て酒井氏に仕へ、兼て鍛冶師たり、當主宗之は今年八十七なれども尙製鏢として日夜治工に従ふ、聞く維新の際農具の鍛冶を目的に今の地に出でしなりと、翁妻を失ひ、子に先たれ、又兄弟なし、外に一の望みなく、只専心一意其技の堅ちざらむことを望めりとなり、人に接する林野にして古武士の風あり、繼嗣なきは惜むべきなり、彼の明珍の火箸は翁の鍊煉に成れるものにて、巧に揮れば鈴虫の音すといへり、實に姫路名産の上乗にして、中二階町の蓬萊堂といふに販居れりとなり、伊勢屋の玉椿は姫路の名菓にして、西二階町にあり、この家は古より菓子業に精しく其名近國に傳ふ、製品は數十種あり、玉椿を第一とし、内國博覽會に數次賞牌を得けりとぞ、富屋の龍虎丹は、是亦富山の萬金丹と共に日本全國に其名の廣まれる名藥にして、解熱劑なり、家は西二階町にあり、阿菊煎餅は中二階町に、鷲陽饅頭は國府寺町にあり、料理の精妙なるもの、阪元町に森重の饅あり、米田町に梅ヶ枝の餅あり、何れも姫路に遊ぶもの、味ふて激賞する所なり、

室津七曲の景



森重の饅  
梅枝の餅  
産 姫路附近古今の名産

姫路附近より出づる産物に、松原釘、鹿谷茶、置盤栗、書寫の竹及び松茸、手野川の鮎、英賀人參、草上蘿蔔、網干海

昔あり、而して古來有名なる飾磨搗染、津田穂蓼、播磨杉原、及び孫三餅の如きは今ありやなしや。

沿革 姫路名勝誌 大尾

追録 三則

其一、飾磨分郡のこと

飾磨郡が東西にわかれたる年代は東京大學文科教授文學學士三上參次君にその取調を依頼しあること本誌にいへるが如し、然るに、學士は目下帝國史料編纂事務といふ重職を帯びれあることとして公私頗る多忙にて急にはその取調もつさがたさよしなり、いま一月廿九日東京より著者宛の學士の信書に、郡名のこと未だ判然せず候へ共貞和四年攝保郡峯合寺の僧の筆といふ降相記にありに郡はもと十二郡今は十七郡と申す、元は明石以下郡名、今は飾磨を分ちて飾西飾東、攝保を分ちて中條へ近くは飾東西の間に中條郡とて有也、とあり一寸參考になるべし、尙分り次第可申上候、とあり、この貞和四年は今より五百五十年前にて其ころは飾東西の中間に尙も中條郡といふがありしものと知らる、今の南條村北條村は其遺稱ならむ歟、尙委しくは聞き得て追録すべし

其二、播磨寶鑑編纂のこと

姫路名勝誌の著者は元來三上參次君前波仲尾君外十餘名の贊助を得て播磨寶鑑の編纂に従

事し、目下其第一編なる飾磨寶鑑のうち姫路市の部はすでに完結し、飾磨郡の部も其草稿の七八分は成功しあり、彼の姫路名勝誌は世の渴望に充てむが爲め、この飾磨寶鑑中より要を摘みて抜きがさしたるものなりけり、されば委しきことを知らむと欲する人々は播磨寶鑑の世に出づるを待ち給へかし

其三、舊記と傳説とを採りつゝあること

播磨寶鑑の記事は正確にして詳細ならむことを望めりより自然長時日を要せるなるが、最も望ましきは多く舊記古録を手にし、廣く口碑傳説を耳にするにあり、而してこの事は頗る困難なる事情ありて著者も時々五里霧中に亡羊の歎を抱かすむはあらず、世の有志家に望む希くは著者の微志を贊助して其大成を期せしめられむことを、

明治三十三年二月十五日

著者 追 録 す

明治三十三年二月廿五日印刷  
明治三十三年三月二日發行

定價金八拾錢

著作兼發行者 矢内正夫

姫路市福中町二十二番地

印刷者 前田菊松

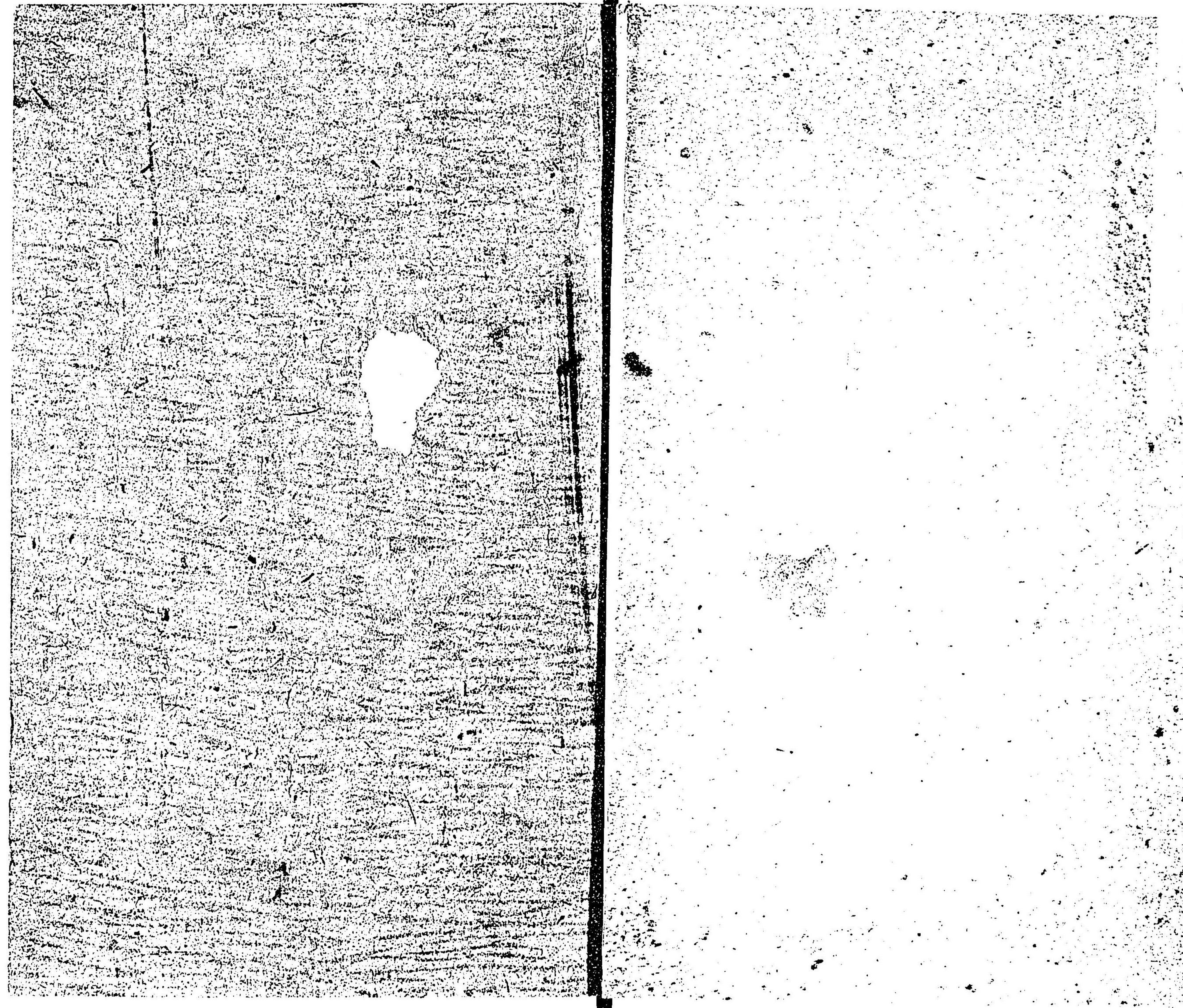
大阪市南區鯉谷東之町  
百七十五番屋敷

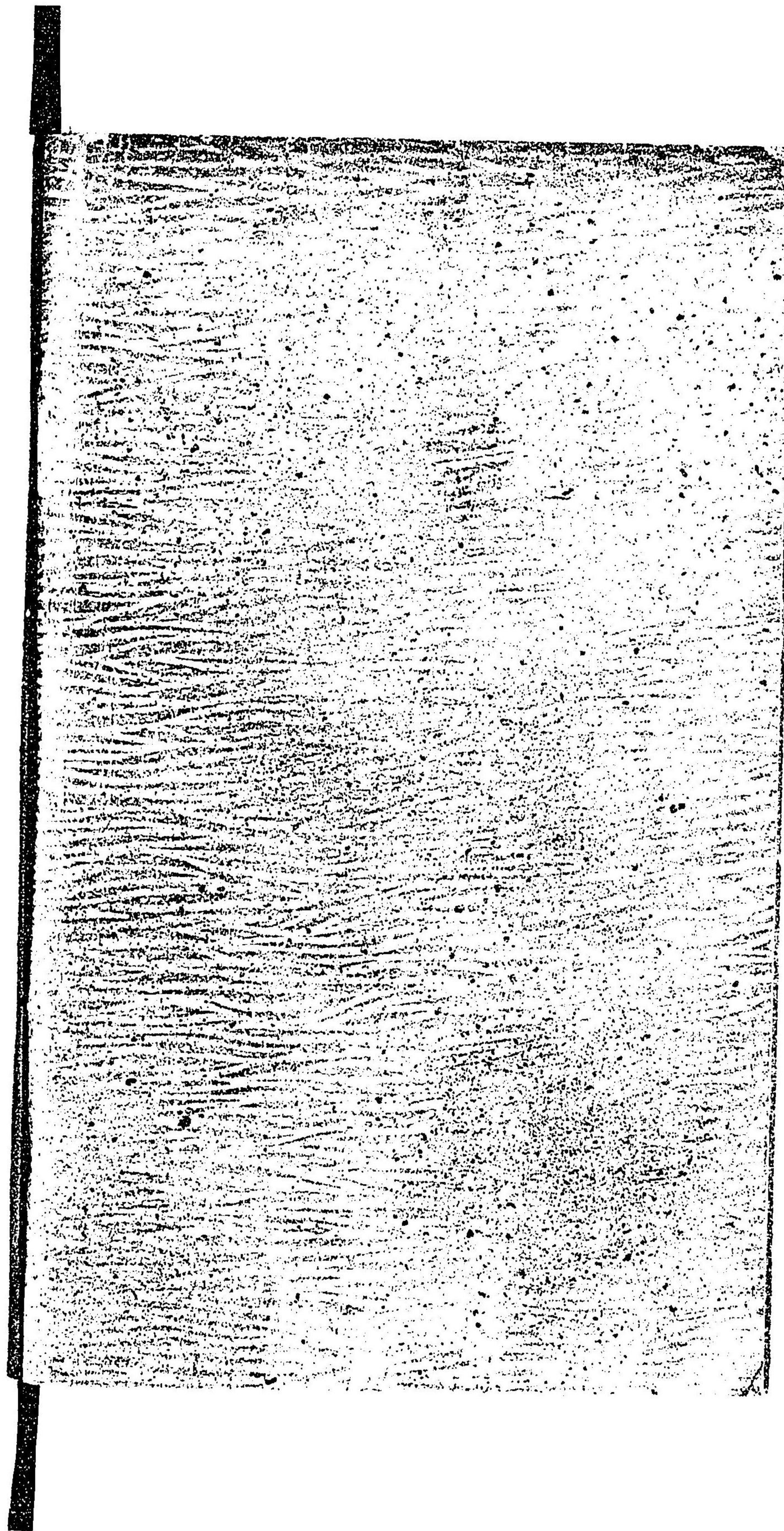
發賣所 矢内書院

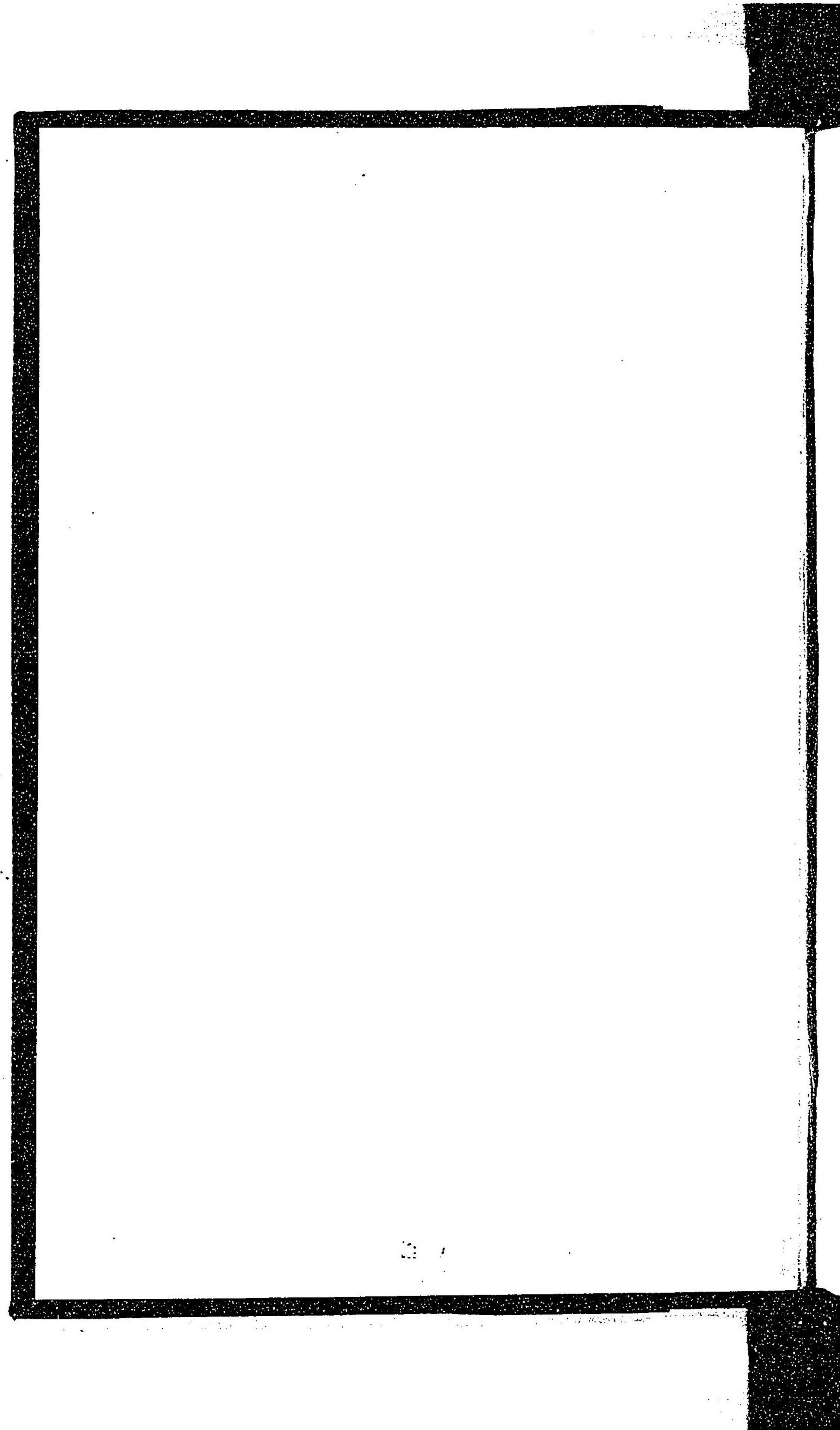
姫路市福中町七番地

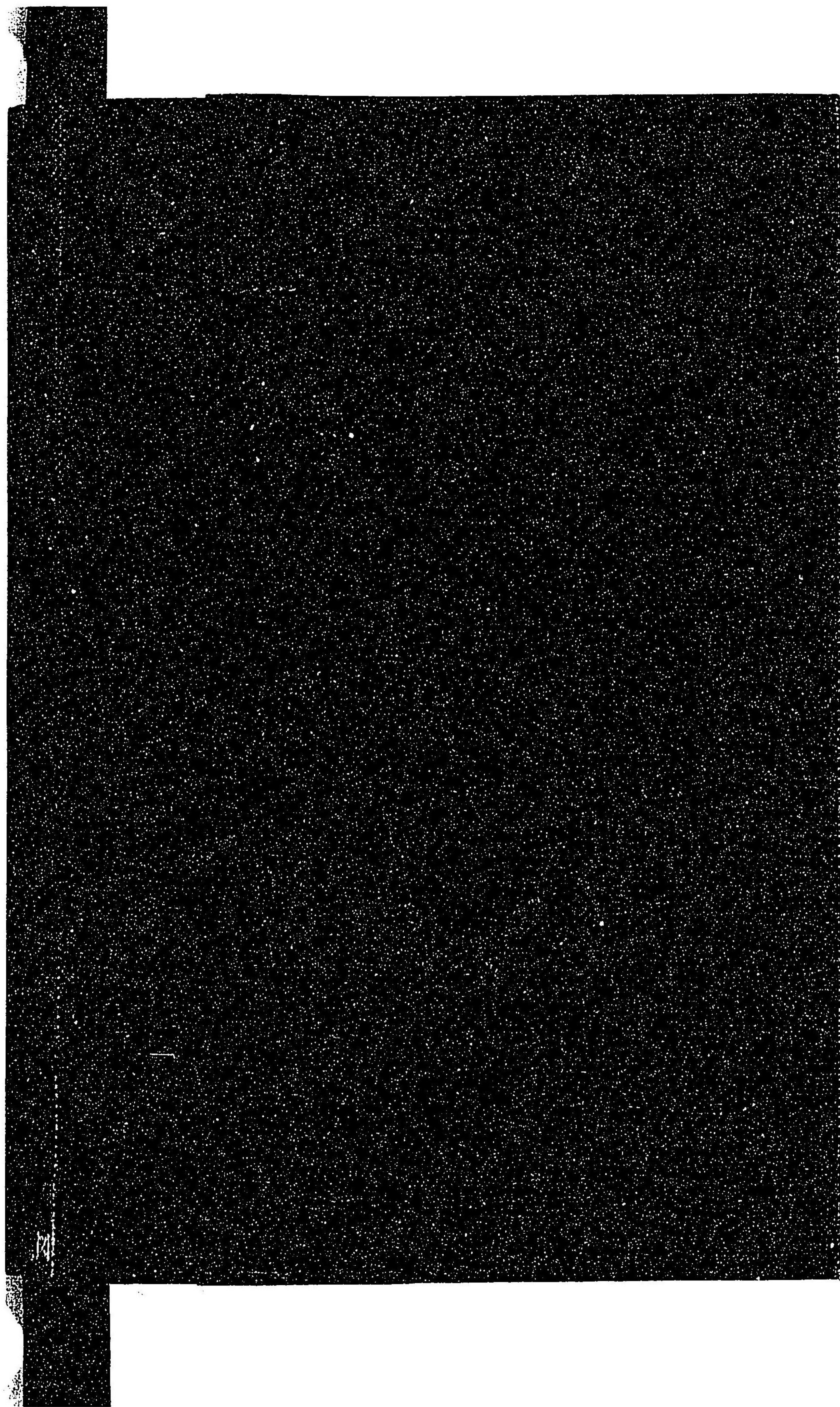
版權所有











025607-000-4

182-89

姫路名勝誌(沿革考証)

矢内 正夫/編

M32

ADC-3101





